吉　原　遺　跡

― 県道柏・御坊線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

１９９０年 3月

財団法人　和歌山県文化財センター

吉原遺跡

――県道柏・御坊線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

1990年3月

財団法人　和歌山県文化財センター

序　　文

日高郡美浜町に所在します吉原遺跡は、戦前戦後を通じ町立松原小学校校庭、あるいは周辺地において、弥生時代・古墳時代の遺物が、時おり発見されていました。

昭和61年度、県土木部所管の県道柏・御坊線改良工事に伴い(社)和歌山県文化財研究会により遺跡の範囲確認調査が行われ、広範囲に広がる砂丘上の墓跡ではなかろうかと注目を集めました。

その後、昭和62・63年度の2ケ年にわたりに当センターが県教育委員会の指導のもとに発掘調査を実施して参りました。その結果、海岸砂丘『煙樹ケ浜』に弥生時代を中心とし、平安時代に至る土壙墓・方形周溝墓が多数発見され、大規模な墓地であることが明らかとなりました。また、検出された方形周溝墓の中には、県下でも最も古い遺構の一つに数えられるものもあり、その重要さが指摘されているところであります。

本書は、この3年間の発掘調査の成果をとりまとめ、報告書として刊行するものであります。本書が当地方の歴史を知るうえで一つの資料となれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御支援を賜った諸先生方や御坊土木事務所、美浜町役場をはじめ地元の皆様に対し、改めて厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

財団法人和歌山県文化財センター
理事長　仮谷志良

例　　言

1．本書は県道柏・御坊線道路改良事業に伴う吉原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は和歌山県土木部の委託事業として社団法人和歌山県文化財研究会・財団法人和歌山県文化財センターが受託し、確認調査・発掘調査および出土遺物の整理業務を実施した。

3．確認調査・発掘調査・整理業務に要した経費は土木部の負担である。

4．確認調査は昭和61年度に社団法人和歌山県文化財研究会が、発掘調査は昭和62・63年度に、整理業務は平成元年度に財団法人和歌山県文化財センターがそれぞれ実施した。

5．確認調査・発掘調査・整理業務は、調査委員会・教育庁文化財課の指導のもとに実施した。

6．調査の組織は次のとおりである。

調査委員会

調査委員　羯磨　正信（和歌山県文化財審議委員会委員）
〃　巽　三郎（和歌山県文化財審議委員会委員）
〃　都出比呂志（和歌山県文化財審議委員会委員）
〃　藤沢　一夫（和歌山県文化財審議委員会委員）

(社)和歌山県文化財研究会
（昭和61年度）

常務理事　梅村　善行（文化財課長）
事務局長　垣内　茂
次長　宮崎　喜一（課長補佐事務取扱）
〃　桃野　真晃（課長補佐）
幹事　吉田　宣夫（第2係長）
主任技術員　永光　寛（主査）・担当

(財)和歌山県文化財センター
（昭和62・63・平成元年度）

専務理事　鍋島伊津夫（平成元年度）
事務局長　梅村　善行（昭和62・63度）
〃　専務理事兼務（平成元年度）
次長　菅原　正明
埋蔵文化財課長　辻林　浩
主査　永光　寛（調査担当）
管理課長　松田　正昭

7．発掘調査・整理業務は、中林都志・川崎雅史が補助した。

8．出土鉄製品の保存処理は、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

9．自然科学分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。

10．調査事業遂行にあたっては、御坊土木事務所・美浜町建設課・町教育委員会をはじめ地元の方々に協力を得た。

11．本書の作成・編集は、財団法人和歌山県文化財センターが行い、実務を永光寛が担当した。

・挿図中、地図に方位の記載がない場合は、通例に従い地図上方を真北とする。そのほかの地形図・実測図は方位針を真北とする。

・遺構実測図などの実測図中、攪乱坑・調査中の任意の掘り方については、原則として毛羽の記入を省略した。

・出土遺物実測図は、原則として4分の1に縮小、第44図は6分の1に縮小と記載した。

・出土遺物実測図と図版中の遺物写真番号は共通する。
・砂丘墓址出土土器実測図（第44図）は、県教育委員会・由良町・田辺市各教育委員会保管の遺物を実測し掲載した。
・既刊の概要報告等に比べ内容に若干の差違が見られるが、本書をもって正報告とする。

本 文 目 次

第1章　調査の経緯 …… 1
1　確認調査の実施 …… 1
2　発掘調査の実施 …… 1
3　整理業務の実施 …… 1
第2章　環　　境 …… 1
1　地理的環境 …… 2
2　歴史的環境 …… 2
第3章　発掘調査 …… 4
1　調査の方法 …… 4
2　各調査区の土層 …… 4
3　遺　　構 …… 6
(1)　第1区の遺構 …… 6
(2)　第2区の試掘 …… 6
(3)　第3区の遺構 …… 6
(4)　第4区の遺構 …… 14
(5)　第5区の遺構 …… 17
(6)　第6区の遺構 …… 19
(7)　第7区の遺構 …… 21
4　遺　　物 …… 36
(1)　第1区の遺物 …… 36
(2)　第3区の遺物 …… 36
(3)　第4区の遺物 …… 37
(4)　第5区の遺物 …… 38
(5)　第6区の遺物 …… 38
(6)　第7区の遺物 …… 40
第4章　考　　察 …… 46
1　考　　察 …… 46
第5章　総　　括 …… 53

挿　図　目　次

第１図　吉原遺跡位置図 …… 1
第２図　煙樹ヶ浜遠景 …… 2
第３図　周辺遺跡分布図 …… 3
第４図　各調査区基本土層位 …… 4
第５図　調査地点 …… 5
第６図　遺構位置関連図① …… 7 ・ 8
第７図　遺構位置関連図② …… 9 ・10
第８図　遺構位置関連図③ ……11・12
第９図　第１区平面図 ……13
第10図　第１区遺構実測図 ……13
第11図　第３区遺構実測図 ……14
第12図　第３区遺構実測図 ……14
第13図　第３区平面図 ……15・16
第14図　第３区遺構実測図 ……17
第15図　第４区平面図 ……18
第16図　第４区遺構実測図 ……19
第17図　第４区遺構実測図 ……20
第18図　第５区平面図 ……21
第19図　第５区遺構実測図 ……21
第20図　第６区平面図 ……22
第21図　第６区遺構実測図 ……22
第22図　第７区平面図① ……23・24
第23図　第７区平面図② ……25・26
第24図　第７区遺構実測図① ……28
第25図　第７区遺構実測図② ……29
第26図　第７区遺構実測図③ ……30
第27図　第７区遺構実測図④ ……31
第28図　第７区遺構実測図⑤ ……31
第29図　第７区遺構実測図⑥ ……32
第30図　第７区遺構実測図⑦ ……33
第31図　第７区遺構実測図⑧ ……34
第32図　第７区遺構実測図⑨ ……35
第33図　SZ-021遺物出土実測図 ……35
第34図　第１区出土遺物実測図 ……36
第35図　第３区出土遺物実測図① ……37
第36図　第３区出土遺物実測図② ……38
第37図　第４区出土遺物実測図 ……39
第38図　第５区出土遺物実測図 ……40
第39図　第６区出土遺物実測図 ……40
第40図　第７区出土遺物実測図① ……42
第41図　第７区出土遺物実測図② ……43
第42図　第７区出土遺物実測図③ ……44
第43図　第７区出土遺物実測図④ ……45
第44図　砂丘墓址出土土器実測図 ……52

表　目　次

表１　土壙墓一覧表① ……47
表２　土壙墓一覧表② ……48
表３　土壙墓一覧表③ ……49
表４　県内弥生・古墳時代墓址一覧表 ……51

図　版　目　次

図版１　1　遺跡遠景（北西から）
2　調査区近景（南東から）
3　調査区近景（北西から）
4　第１区全景（東から）
図版２　1　第３区南端（北から）
2　第３区中央部以北（南から）
3　第３区中央部（南から）
図版３　1　第４区東半部（西から）
2　第４区中央部（東から）
3　第４区西端部付近（西から）
図版４　1　第５区全景（東から）
2　第６区東半部（東から）
3　第６区西半部（西から）
図版５　1　第７区SX001付近（北西から）
2　第７区SX002付近（南東から）
3　第７区SK081付近（北西から）
図版６　1　第７区SK086付近（南東から）
2　第７区SK100付近（南東から）
3　第７区SK109付近（南東から）
図版７　1　第７区SZ 020付近（北西から）
2　第７区SX 004付近（南東から）
3　第７区SD 020付近（北西から）
図版８　1　SK003・第１区（南から）
2　SK004・第１区（南から）
3　SK006・第３区（南から）
4　SK006遺物出土状況・第３区(南から)
5　SK012と他遺構の重複関係・第３区(南西から)
6　SK012遺物出土状況・第３区(西から)
7　SK018遺物出土状況・第３区(南から)
8　SD001・第３区（北西から）
図版９　1　SD002・第３区（北東から）
2　SD003・第３区（北から）
3　SK024遺物出土状況・第４区(北から)
4　SK028遺物出土状況・第4区(南西から)
5　SK032遺物出土状況・第4区(南から)
6　SK032遺物出土状況近景(南から)
7　SK038遺物出土状況・第4区(南東から)
8　SK032遺物出土状況近景(北から)
図版10　1　SK042他土壙群・第4区(北西から)
2　SD005・第４区（北西から）
3　SD006・第４区（北西から）
4　SK005遺物出土状況・第5区(南東から)
5　SK055遺物出土状況近景（北東から）
6　SK056礫出土状況・第６区（北から）
7　SK057遺物出土状況・第6区(北東から)
8　SK057遺物出土状況近景（北東から）
図版11　1　SK066遺物出土状況・第６区(東から)
2　SK066遺物出土状況近景(西から)
3　SK064・第６区（東から）
4　SK069遺物出土状況・第７区(東から)
5　SK081他土壙群・第７区(北西から)
6　SK081遺物出土状況・第７区
7　SK082土層・第７区（東から）
8　SK091他土壙群・第７区（北西から）
図版12　1　SK091土層・第７区（西から）
2　SK098土層・第７区（南西から）
3　SK104・第７区（南東から）
4　SK104土層（南西から）
5　SK108・109・第７区（南から）
6　SK109土層（南西から）
7　SK107遺物出土状況・第7区(南西から)
8　SK107遺物出土状況近景（南から）
図版13　1　SK137他土壙群・第７区（北西から）
2　SK133遺物出土状況・第7区(北東から)
3　SK147他土壙群・第７区(南東から)
4　SD009・010・第７区（北西から）
5　SD017・第７区（北から）
6　SD020・第７区（南東から）
7　SX001・第７区（北西から）
8　SX001土層（南西から）
図版14　1　SX001・第７区（東から）
2　SX001周溝部（SD007）土層（南から）
3　SX001周溝部南東隅遺物出土状況
4　SX002・第７区（南東から）
5　SX002周溝部(SD 008)土層(南東から)
6　SX003・第７区（北東から）
7　SX003周溝部(SD 012)土層(北東から)

8　SX003周溝部(SD013)土層(北東から)
図版15　1　SX003周溝部（SD012）遺物出土状況
2　SX004・第7区（北西から）
3　SX004周溝部(SD019)土層(北東から)
4　SZ012・第7区（北西から）
5　SZ017・第7区（南東から）
6　SZ021遺物出土状況・第7区
7　SZ021土層（南西から）
8　SZ024・第7区（南東から）
図版16　第1区地区出土遺物（1・3・5）
第1区SK004（2）
第3区SK006(8)・SK012（10）出土遺物
図版17　第3区地区出土遺物（6・7・14～22・24）
第3区SK018(11・12)・SZ001（13）出土遺物
図版18　第4区SK024(29)・SK027(26)・SK028(28)・SK032(27)出土遺物
図版19　第4区地区出土遺物（25・30～34・36～43）
第4区SK038(44)・SZ006（35）出土遺物
図版20　第5区地区出土遺物（46）
第5区SK055（45）出土遺物
第6区地区出土遺物（48・49・51・52）
第6区SK057(47)・SK066(54・55)・SZ009(50)出土遺物
図版21　第7区地区出土遺物（60・111）
第7区SK154(58)・SD007(56)・SD012(57)・SD018(70)・SD019(69)出土遺物
図版22　第7区地区出土遺物（71・73・75・79）
第7区SK104(74)・SK107(78)・SZ017(81・93・95）出土遺物
図版23　第7区地区出土遺物（80・113・115）
第7区SK108(114)・SK112(112)・SK156(85)・SZ017(110)・SZ021(88)・SZ024(84)出土遺物
図版24　第7区地区出土遺物（120・123・124・139・151・167）
第7区SK080(147)・SK130(138)・SK133(140)・SD012(146)・SZ017(150)出土遺物
図版25　第7区地区出土遺物（169～172）
第7区SK081(166)・SK109(173)出土遺物
図版26　第7区地区出土遺物（61・63・65・66～68・72・82・83・90・91）
第7区SK095(59)・SK130(62)・SD007(64)・SZ017(76・77・89・92)・SZ018(94)出土遺物
図版27　第7区地区出土遺物（97・98・102～104・108・109・116)・SK093(117)・SK094(118)・SK112(96・100)・SZ017(101・105)・SZ018(99)・SZ022(106・107)出土遺物
図版28　第7区地区出土遺物（127～130・132・133・137）
第7区SK069(125)・SK077(126)・SD007(131・135・134・136)出土遺物
図版29　第7区地区出土遺物（119・121・122・148・149・152～165）
第7区SD020(145)・SZ017(141・142)・SZ022（143・144）出土遺物

第1章　調査の経緯

和歌山県土木部と県教育委員会は、計画中の県道柏・御坊線の道路改良工事に先立ち、昭和60年度から埋蔵文化財の取扱協議を開始した。その結果、日高郡美浜町吉原に所在する吉原遺跡に対し、遺構・遺物の有無確認あるいは発掘調査範囲策定のため確認調査を実施することになった。

1　確認調査の実施

確認調査は、県教育委員会の委託を受けて社団法人和歌山県文化財研究会が昭和61年9月から翌年3月にかけて実施した。結果は、地表下0.3～0.8mにかけて、墓に供献されたであろう弥生土器・土師器あるいは須恵器などを、調査対象地全域にわたり確認した。その成果を踏まえ改めて取扱協議が実施され、面積約 4,000m² の範囲を2ヶ年継続で発掘調査を実施するはこびとなった。

2　発掘調査の実施

発掘調査は、第1次調査を昭和62年度、第2次調査を昭和63年度に財団法人和歌山県文化財センターが実施した。(延べ面積約 3,300m²)

第1次調査[註1]は、当初の計画面積約 1,800m² のところ、調査不可能地約 400m² があり、最終約 1,400 m² となった。調査地区は、調査対象地区の東半にあたり、第1から6区までの範囲である。

第2次調査[註2]は、当初の計画面積約 2,200m² のところ、調査不可能地約 300m² があり、最終約 1,900 m² となった。調査地区は、調査対象地区の西半、第7区の範囲である。

3　整理業務の実施

平成元年度事業として、発掘調査で得られた資料（写真・実測図・出土遺物）を整理し、調査報告書の作成を行った。

整理作業は、7月より開始し、遺物の洗浄・注記・接合・復元作業を中心とし、遺物の実測図作成・写真撮影を行い平成2年3月に作業を終了した。

第1図　吉原遺跡位置図

第2章　環　　境

本遺跡は、紀伊半島の中部、紀伊水道に面した日高郡美浜町煙樹ケ浜海岸に所在する。県下第2の遺跡数を誇る御坊市に隣接する。ＪＲ紀勢本線「御坊」駅より南南西約 2.4km（国土座標第Ⅵ座標系Ｘ＝－234,330、Ｙ＝－78,775）の地点、標高 8～9m の海岸砂丘に位置する。

第2図　煙樹ヶ浜遠景

1　地理的環境

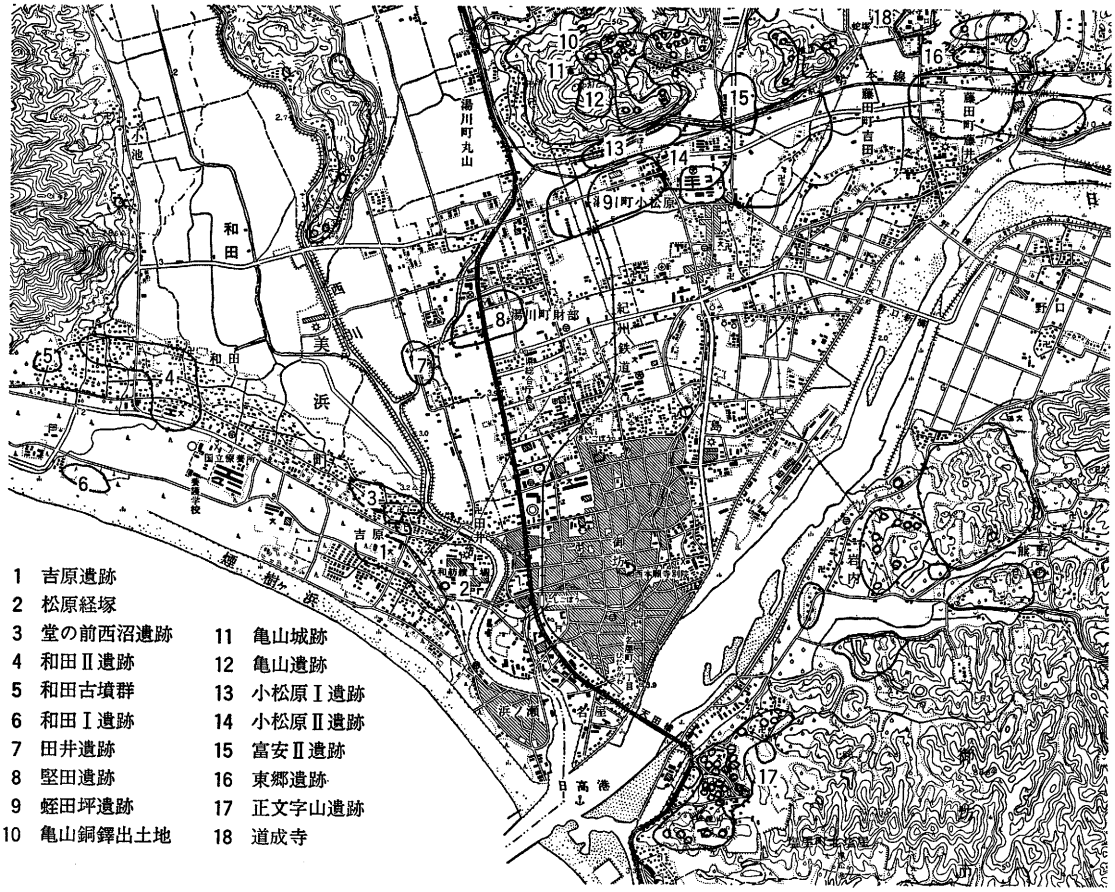
美浜町は、西北を日高町、北・南西を御坊市に接し、日ノ岬から日高川河口付近まで日高平野の海岸部を占める。海岸部の西半は、白馬山塊の先端が海に没し断崖を形成する。その西端が日ノ岬である。東半は、日高川の沖積地により形成された日高平野の海岸砂丘、煙樹ヶ浜である。煙樹ヶ浜は、西山の東麓から南東方向に弧状を呈しながら日高川河口に取り付く延長約 4km、幅約 0.8～1.0km の海岸砂丘（砂嘴）である。海岸砂丘は、古・新の2列があり現在の県道柏・御坊線を境界とする。古砂丘は、松見寺付近を最高所とし約 8.5m を測る。新砂丘は、砂丘全長の中間部付近が鞍部となり、大和紡績工場の南方で約 11.5m をはかる。砂丘後背地は、西川周辺で標高 1m 前後の低湿地となっている。

2　歴史的環境（第3図）

吉原遺跡の位置する日高平野は、日高川あるいは沿岸流の動きにより形成されたものである。煙樹ヶ浜は、縄文海進以後に土砂の堆積によって洲を生じ、後背地はラグーンとなり次第に陸化し、沖積平野となったものである。この日高平野は、御坊市を中心に日高町・美浜町を包括し県下第2の平地面積を誇っている。したがって、遺跡の数も和歌山市域に次いで多く、現在 236 箇所[註3]にのぼっている。

縄文時代の遺跡　この沖積平野にも3箇所の遺跡が確認されている。それらは、共に日高川の自然堤防上に占地している。自然堤防は、道成寺の南方から現日高川とわかれ八幡山・亀山の裾をめぐり西川に接し弧状を呈している。道成寺と御坊駅の中間に津井切遺跡があり中期の土器を出土している。御坊駅付近に広がる小松原Ⅰ遺跡（13）は、縄文時代晩期の土器が出土し、自然堤防末端部には田井遺跡が見られる。田井遺跡（7）は、宮滝式の土器を出土するところから遅くとも後期末には出現していた可能性がある。このように、中期には既に自然堤防が安定し、集落立地の基礎が築かれたといえよう。

弥生時代の遺跡　まず前期に日高川左岸河口付近の正文字山遺跡（17）、尾ノ崎遺跡などが現われ、



第3図　周辺遺跡分布図（縮尺 1：40,000）

中期以降，先の自然堤防上に10箇所余りの遺跡が見られるようになり、高地性的性格を与えられる亀山遺跡（12），また、銅鐸の埋納地（10）も周辺に位置している。海岸砂丘には、古砂丘上後背側に堂の前西沼遺跡（3）が進出するようになる。このように、日高平野の弥生時代は、日高川右岸の自然堤防および左岸河口付近を中心として展開するものと見られる。

古墳時代　日高川左岸丘陵および平野北方丘陵に古墳が築造されるようになる。特に、前者は、郡内唯一の前期古墳とされる岩内3号墳があり、中期末から後期にかけて築造された天田28号墳などがある。古墳の数を比較すれば、隣接する有田郡は28基、牟婁郡は44基で、日高郡は272基である。日高郡のうち半数以上が御坊市内にあり146基を数える。美浜町には、3箇所の古墳群があり、中でも和田古墳群（5）は、西山麓と砂丘の付け根部にあり、吉原遺跡と同一砂丘上に位置し一時期併行する関係にある。

奈良・平安時代　白鳳期の建立とされ、現在も法灯を保っている道成寺（18）が日高平野の北東部に建立され、この日高平野が前代に引き続き、郡内の中心地となる。その他、経塚や王子社などが営まれるようになり、熊野参詣に関連した史跡・遺跡も出現しはじめる。

以上のように、日高平野は郡内周辺に比し、弥生時代以降圧倒的な遺跡数をかぞえ、次第に中心地的位置を占めるようになる。勿論その背景には、紀ノ川流域に次ぐ広大な平地面積に基付くことは明らかである。本遺跡は、このような平野の海岸砂丘に位置するものである。

第3章　発掘調査

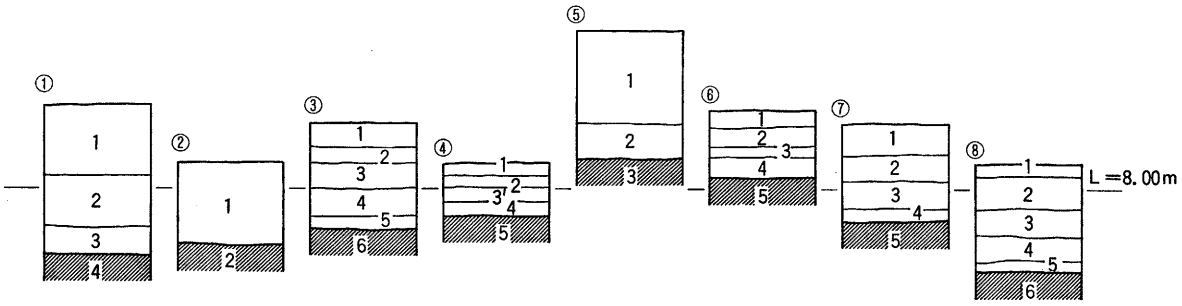
1　調査の方法

調査地点（第5図）　大和紡績和歌山工場の正門付近から松原小学校のプール西方約150mまでの東西に長い調査区間をもつ。延長約700mである。このうち、公園と幼稚園の校庭にかかる一部を除き松林となっている。

調査方法　調査対象地を横断する既設の道路を基準として、7区画に分割（第6図右上）し調査区を設定した。東から順次第1区とし、西端を第7区とした。第1次調査は第1区から第6区までとし、第2次調査は第7区を対象とした。表土剝ぎ・排土作業は、当初重機掘削を計画し実施に移ったが、松根が夥しく重機の機能を十分発揮できず、遺構への悪影響を考慮し、第5区を掘削したのに留めた。以後は、すべての人力による手掘り作業とした。第2次調査時に墓壙内・土器内部などの砂を分析し、リン・カルシウムの測定を行った。また、赤色系砂に対しX線回析分析[註5]を行った。

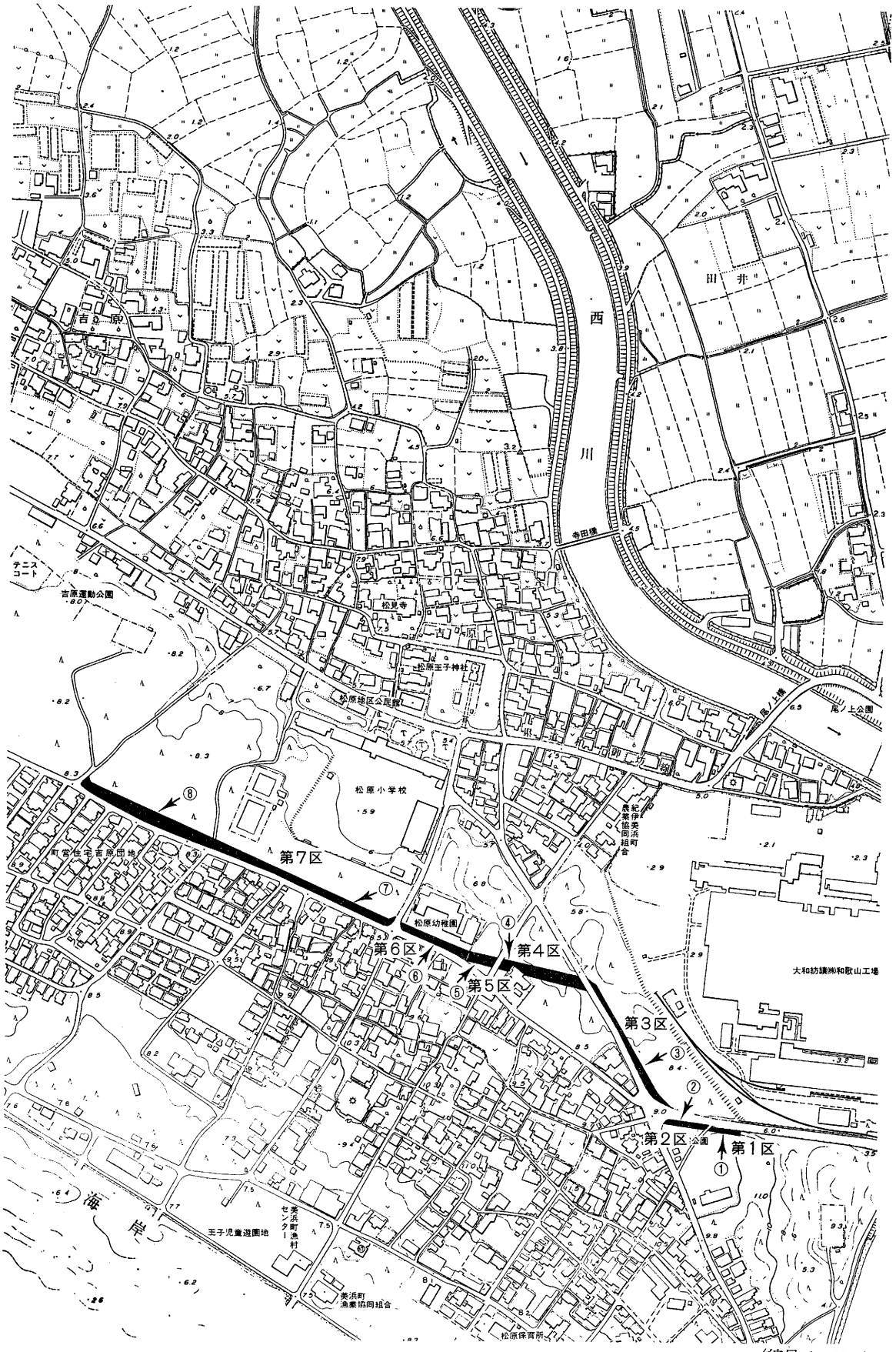
2　各調査区の土層（第4図）

各調査区の堆積土層は、下図のとおりである。各地区のベースは、土分を含まない2mm以下の砂粒で、かつ無遺物層である。第5区をピークとし東西方向に漸次下降する。表土とベースの間は、土分を含む黄褐色系砂と茶褐色系砂が介在し、第7区に茶褐色系砂が多く認められる。第3区から第7区にかけては、部分的に赤色を帯びた砂が検出される。遺構は、ベースおよびベース直上の砂層から掘り込ま



第4図　各調査区基本土層位

第1区	第2区	第3区	第4区	第5区	第6区	第7区(E)	第7区(W)
1表土	1表土	1表土	1表土	1表土	1幼稚園校庭	1表土	1表土
2暗黄褐色砂	（公園）	2暗黄褐色砂	2淡茶褐色砂	（旧公園）	2淡赤黄褐色砂	2褐色砂	2褐色砂
3暗灰色砂	2ベース	3淡赤黄褐色砂	3淡赤茶褐色砂	2明黄褐色砂	3暗黄褐色砂	3茶褐色砂	3茶褐色砂
（含赤色）		4黄褐色砂	4淡黄褐色砂	3ベース	4暗黄褐色砂	4黄褐色砂	（土分多）
4ベース		（含赤色）	5ベース		（3より黒い）	5ベース	4茶褐色砂
		5黄褐色砂			5ベース		（土分少）
		（土分少）					5黄茶褐色砂
		6ベース					6ベース



(縮尺 1：5000)

第５図　調査地点（矢印番号は第４図対照）

れる。赤色砂に関しては、本遺跡のみならず砂丘墓群を検出した南部町片山遺跡の調査においても確認されており、赤色砂が介在すれば遺構が検出されるという状況を呈したほどであり、今回の調査も片山遺跡ほどではないが部分的には顕著な堆積状況を示している。この赤色砂が遺構に伴う人為的なものか，あるいは、自然現象として堆積したものか、現状の土層観察などでは判断が付きにくく、したがって、今回は自然科学分析（X線回析分析）を試みた。分析は、①遺構（SD019）覆土の赤色砂、SD019のベース（土分を含まない)、③比較的全般に堆積している茶褐色系砂、の3点を採取し試料とした。分析の方法は略すが，分析の結果、各試料はそれぞれ石英・曹長石・微斜長石・白雲母・緑泥石の存在が認められ、各試料間に鉱物組成の違いは認められず、赤色を呈する物質が、ある単体の鉱物に由来しているとは考えにくく、X線回析からは赤色の原因を解明することは難しい。ただし、一般的に土壌の赤色は酸化鉄（Fe_2O_3）に由来することが多く、鉱物の孔隙などに酸化鉄が染み込み、赤色を呈しているのではないか。この成果は、明確ではないにしろ各試料概ね鉱物組成の違いが認められないことから自然現象を示唆するものであり、遺構にともない人為的なものとしての理解は払拭されるであろう。

3 遺　　構

遺構は、土壙墓（SK）156基、溝状遺構（SD）20条，小穴（SP）8穴、その他不明遺構（SZ）25基である。このうち SD の平面形状から方形周溝墓（SX）と考えられるものを4基検出している。

土壙墓は、径 0.5m 以上の円形もしくは楕円形状の平面プランをもち断面が舟底状を呈するものとし、墓としての不明確さもあるが一応土壙墓と表記する。溝状遺構のなかで直角にコーナーを有するものを方形周溝墓とした。小穴は径 0.5m 未満とし土壙と区別した。不明遺構は形状が不明確、あるいは遺構が調査区外に広がるため全容が不明確な掘り込みである。

(1) 第1区の遺構（第9図）

地形は東に下降する。調査区の東半分に偏し土壙墓のみ4基を検出、西半は遺構の空白地帯である。

土壙墓　SK004（第10図）は、平面プラン太めの楕円形を呈する。埋土に粉砕された中期中葉の弥生土器（第34図2）を含む。これらの土器片は、墓壙周辺に飛散し、そのうちの一片が SK005 の埋土中に出土している。出土状況を考慮すれば明らかに SK004 固有の遺物である。したがって、SK004 が SK005 に先行すると考えられる。

遺構以外の遺物として弥生土器（第34図1・3）・土師器（第34図5）・須恵器（第34図4）などが出土している。

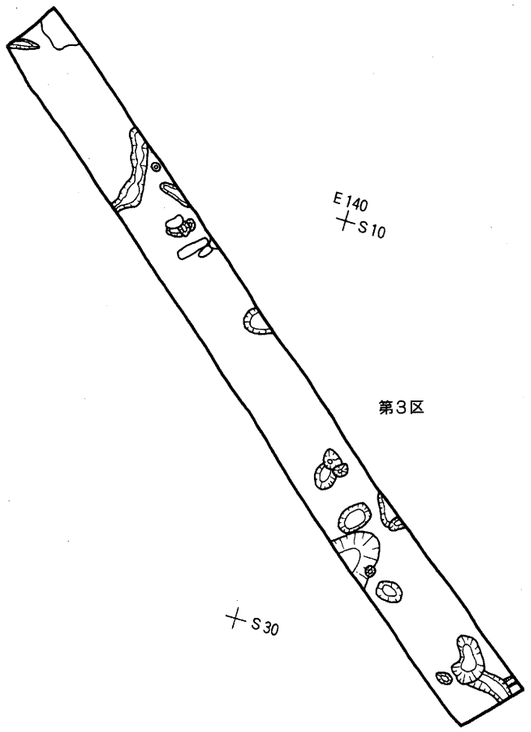
(2) 第2区の試掘

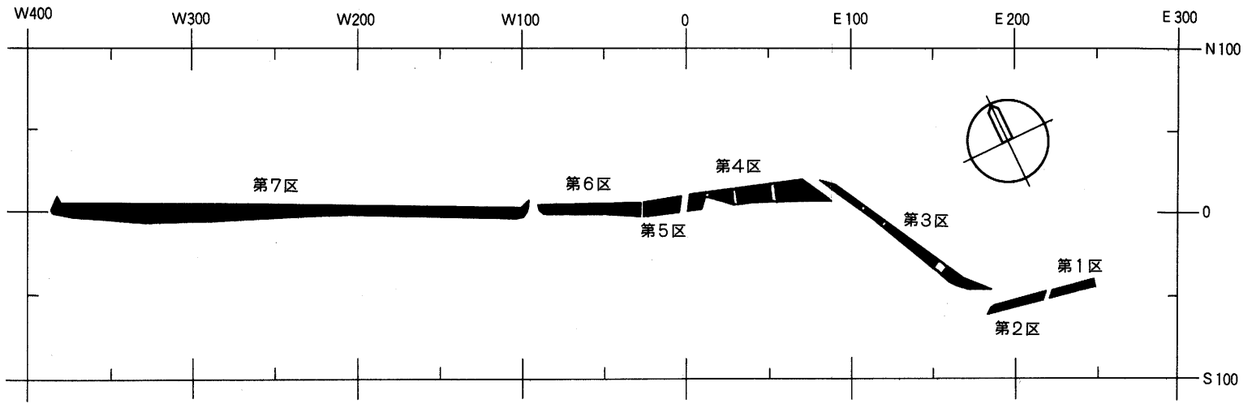
交差点に面した公園地内である。2箇所のトレンチを設定したが、現況が公園で花壇・道路擁壁などのため攪乱が著しく、試掘のみで放棄した。

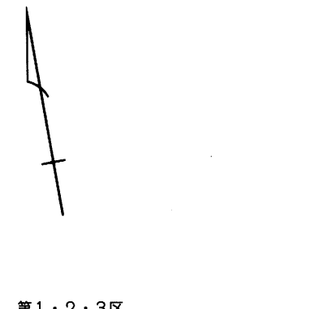
(3) 第3区の遺構（第13図）

大和紡績工場に西隣し、地形は南西方向に下降する。遺構は、調査区の中央部に集中し、両端は遺構の空白地帯である。土壙18基、溝状遺構4条、小穴2穴、不明遺構4基である。遺構検出範囲には礫が多量に伴うが、遺構との因果関係は明らかではない。

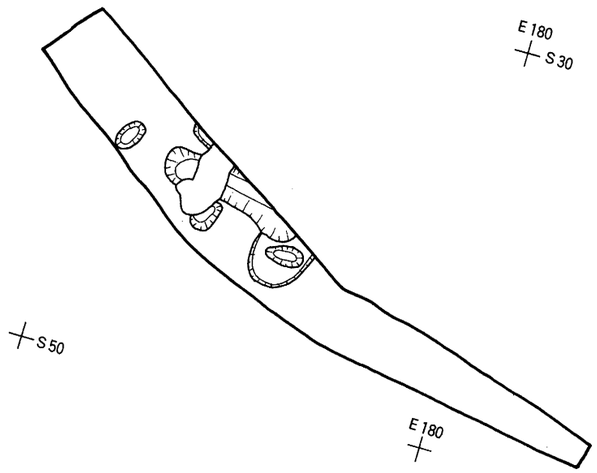
土壙墓　平面プランは、均整のとれた楕円形・不整楕円形・隅丸矩形あるいは円形などがあり、土壙

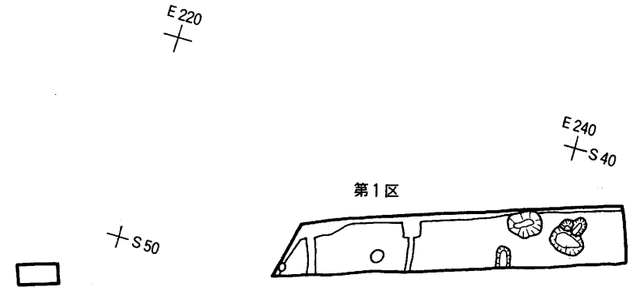


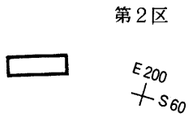




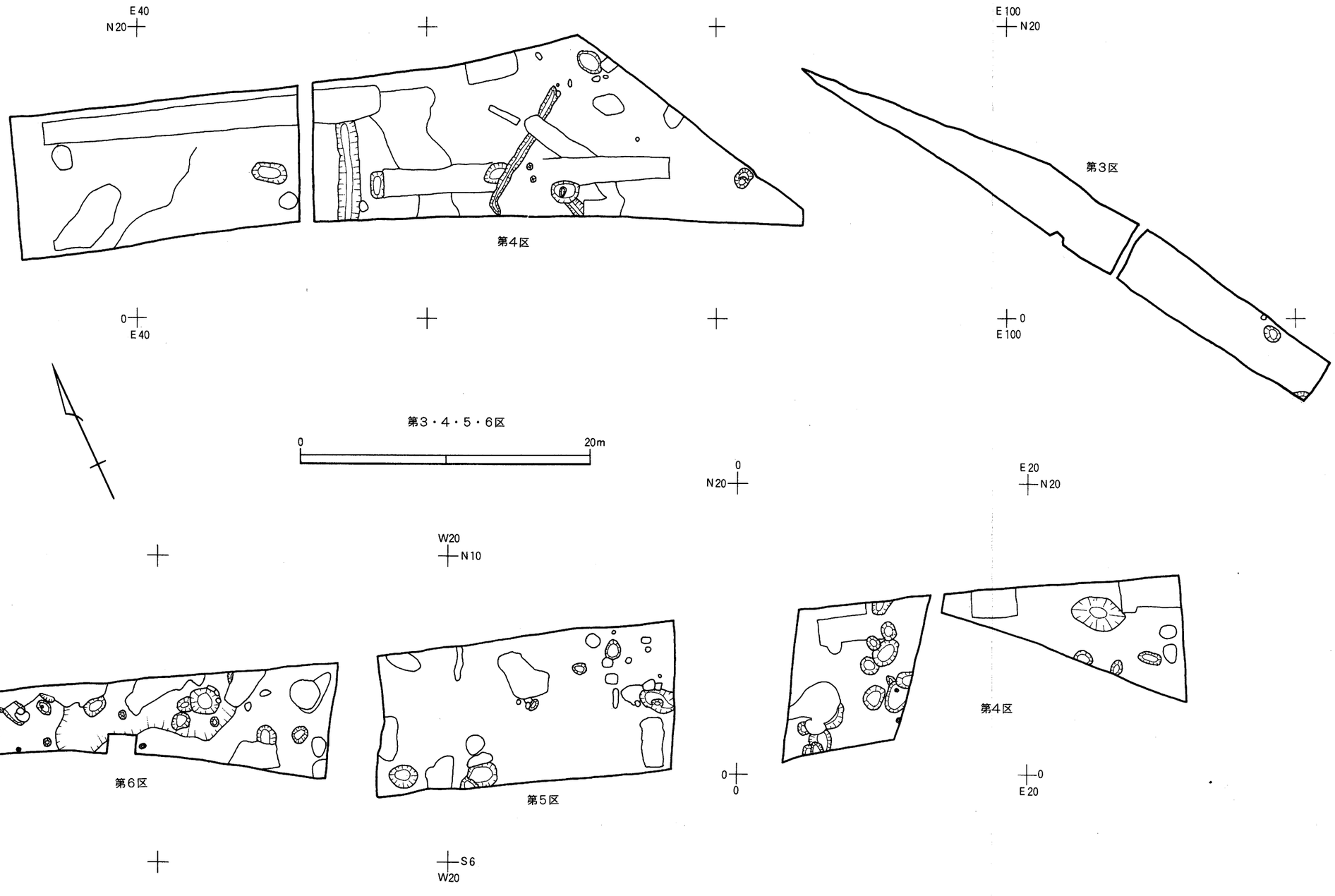
第6図　遺構位置関連図①



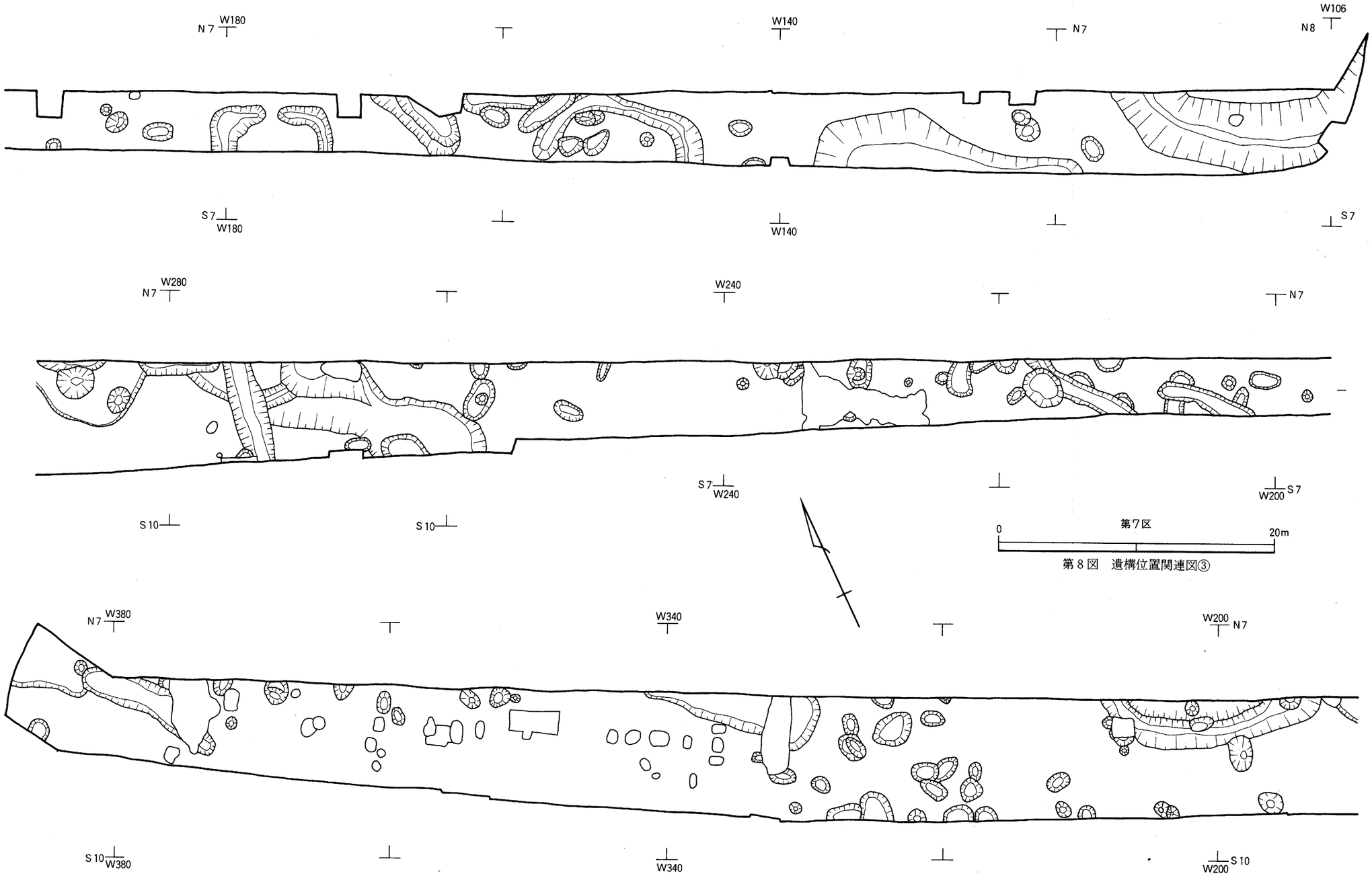




第6図　遺構位置関連図①第1・2・3区

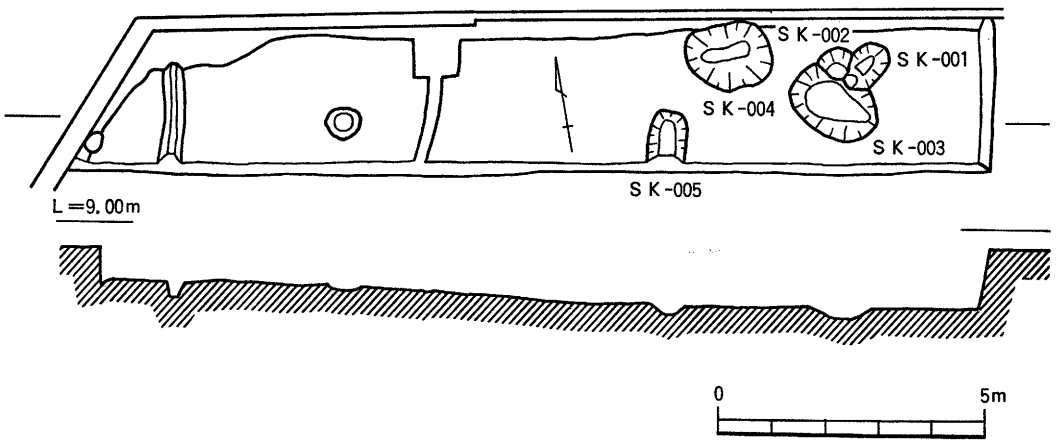


第７図　遺構位置関連図②第３・４・５・６区



第８図　遺構位置関連図③

第８図　遺構位置関連図③第７区



第9図　第1区平面図

の規模には大小がある。完形もしくは完形に近い土器を埋置する土壙墓が見られる。

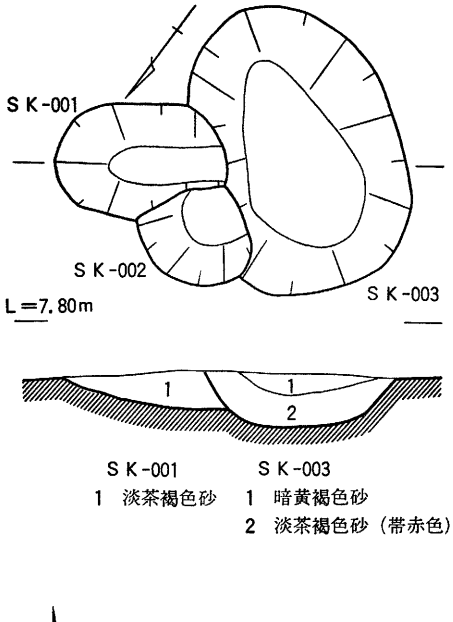
SK006 は、平面プラン楕円形状を呈する。擬似流水文を施す中期前葉の弥生土器（第35図8）が土壙西端に出土する。ただし、本遺構は SZ001 の上部に位置しており、同一破片が SZ001 にも認められるところから、本遺構固有の遺物ではないと考える。

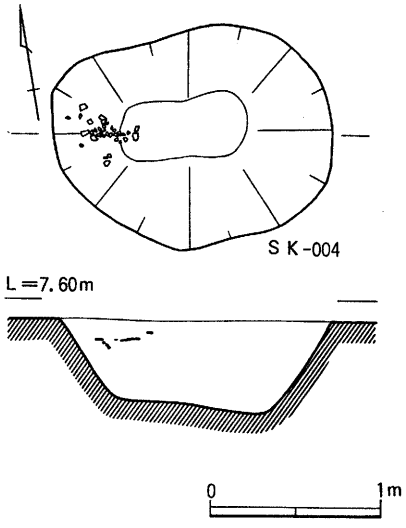
SK012（第11図）は，調査区外に広がるため全容は明らかでない。弥生土器（第35図10）を埋置する。土器は土壙長軸の西端の壁に持たせかけ正立して置かれている。時期は、この土器から弥生時代中期中葉が与えられる。

SK018（第12図）は、全容が明らかでないが、ほぼ西半を検出した。体部下半に穿孔を施した中期中葉の弥生土器が2個体埋置される。土器は、土壙の中央（第35図11）と西端（第35図12）に横転した状態で出土している。

溝状遺構　SD001は、全長7.64m以上、幅1.88m以上、深さ 0.60m 以上を測る。太く短い形状をもつ。東端の肩部は完全ではないが、底の立上りの状況からほぼ全容を知りえた。須恵器細片を出土する。この遺物の出土から、本遺構の時期は5世紀以降と考えられる。

SD002 は、全長2.04m以上、幅2.90m以上、深さ0.60m以上。この遺構は、大型の土壙とも考えられるが、底から肩部にかけての立上りの断面形状が、土壙は内湾気味に立上がるのに比べ、溝状遺構は地表面に露呈するのため肩部が徐々に後退する。従って、断面はV字状あるいは外





第10図　第1区遺構実測図（S K）

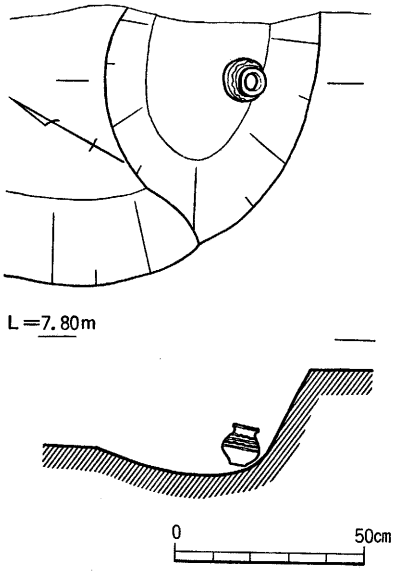
反気味になる。故に外反気味に立上がる本遺構を溝状遺構と判断した。遺物は庄内併行期の土器細片を出土する。SD003は、全長 4.00m 以上、幅 1.03m 以上、深さ 0.29m 以上。底は起伏をもち平面プランは鈍角に屈折する。瓦器・土師器を出土。中世以降の時期が考えられる。

不明遺構　SZ001は、全容は不明であるが、馬蹄形状に掘り込まれ重複する SK006 より古い。擬似流水文を施した弥生土器片を出土する。弥生時代中期前葉に属すか。

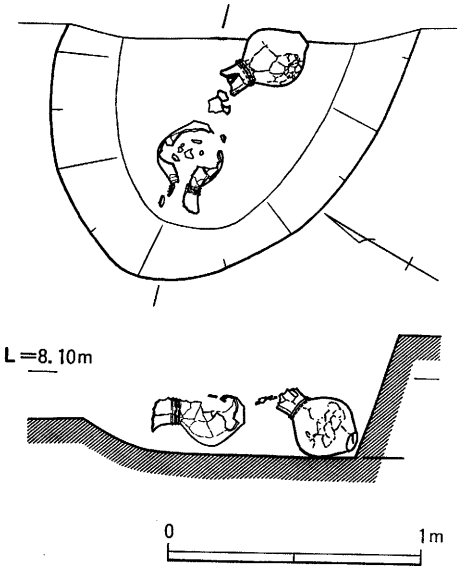
SZ005は、断面のみを検出。遺物は中期中葉の弥生土器の体部破片（図版17-13）など数点認める。

(4)　第4区の遺構（第15図）

本区は、道路予定地の全幅を調査対象とした。地形は北に下降気味である。遺構分布は、中央部が稀薄で両端に集中する。土壙墓24基、溝状遺構2条、小穴4穴、不明遺構1基を検出した。本区の西端付近には第3区ほどの量は見られないが、礫の出土が目立ち墓壙内に含まれているものもある。



第11図　第3区遺構実測図（S K—012）



第12図　第3区遺構実測図（S K—018）

土壙墓　SK024は、平面プラン長軸の短い楕円形を呈し、底は2段に掘り込む。上段に弥生土器（第37図26）が横転した状態で置かれる。土壙上部を攪乱されている。時期は、弥生時代中期中葉である。

SK026は，平面プラン隅丸矩形に近い形状をもち、長軸に直交し底部の一部が長楕円形に凹む。遺物を認められず。

SK028は、SD005に掘り込まれ全容が不明。ほぼ中央部に底面に横転した状態で弥生土器（第37図28）を出土。この土器から時期は、弥生時代中期中葉と考えられる。

SK030（第17図）は、平面プラン隅丸矩形の形状を呈する。遺物は認められず。

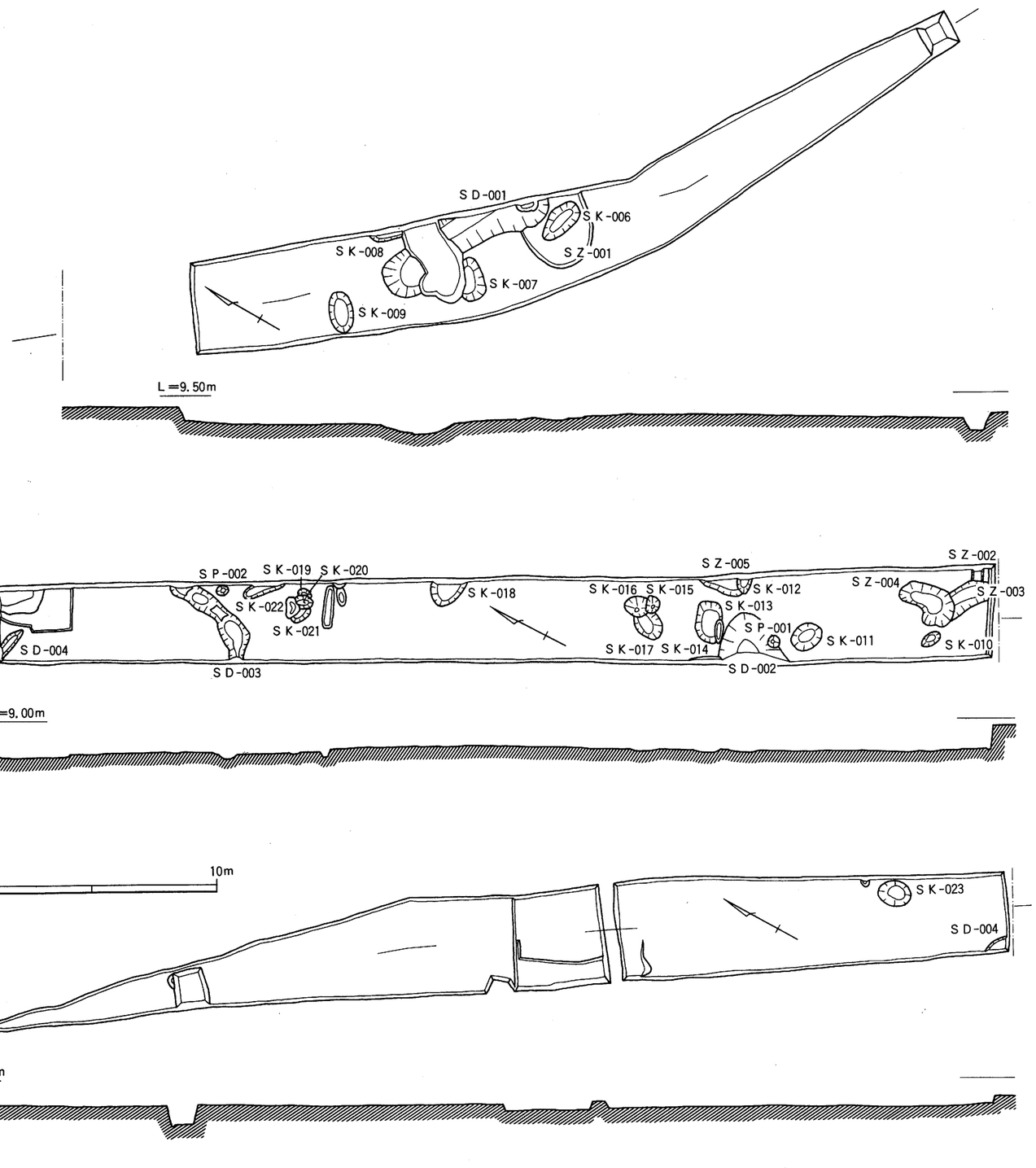
SK032（第17図）は、平面プラン隅丸菱形をした大型の土壙。細片化された中期の弥生土器（第37図27）を埋土に撒き散らす。上層に多いが底面にも認められる。この土器は体部下半に穿孔を施す。

SK038（第17図）は、長軸ラインよりやや北壁側に鉄刀を納める。直刀の先端を西に、刃部を北つまり土壙の外側に向け、底面より浮いた状態で出土している。

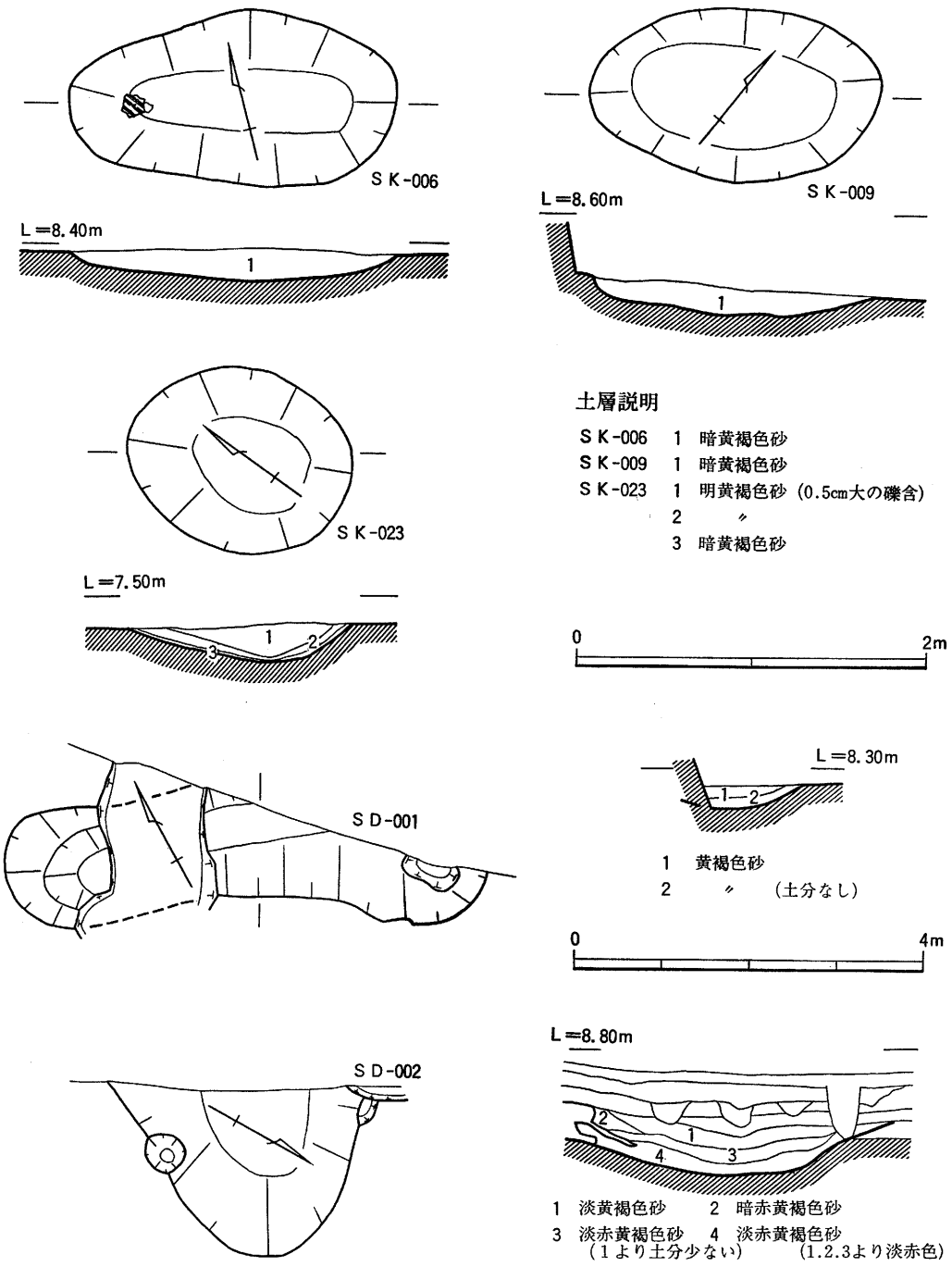
SK042（第17図）は、SK040に掘り込まれ、全容が不明。底面は東側に偏し SP005 が穿かれている。

溝状遺構　SD005（第17図）は、全長 10.04m、幅 0.72 m 以上、深さ 0.15m 以上。南西方向に軸をとり先端が鈍角に南に折れて終わる。SK028を掘り込む。SK028より新しいことから時期は弥生時代中期中葉以降が考えられる。

SD006（第17図）は、全長6.71m、幅 1.56m 以上、深さ 0.27m以上。ほぼ南北方向に掘り込まれる。底面の状態か


S D-001
S K-006
S K-008
S Z-001
S K-007
S K-009
L=9.50m
S P-002
S K-019
S K-020
S K-022
S K-021
S K-018
S Z-005
S K-016
S K-015
S K-012
S K-013
S P-001
S K-011
S K-017
S K-014
S D-002
S Z-004
S Z-002
S Z-003
S K-010
S D-004
S D-003
L=9.00m
0
10m
S K-023
S D-004
L=8.50m

第13図　第３区平面図



第14図　第３区遺構実測図（ＳＫ・ＳＤ）

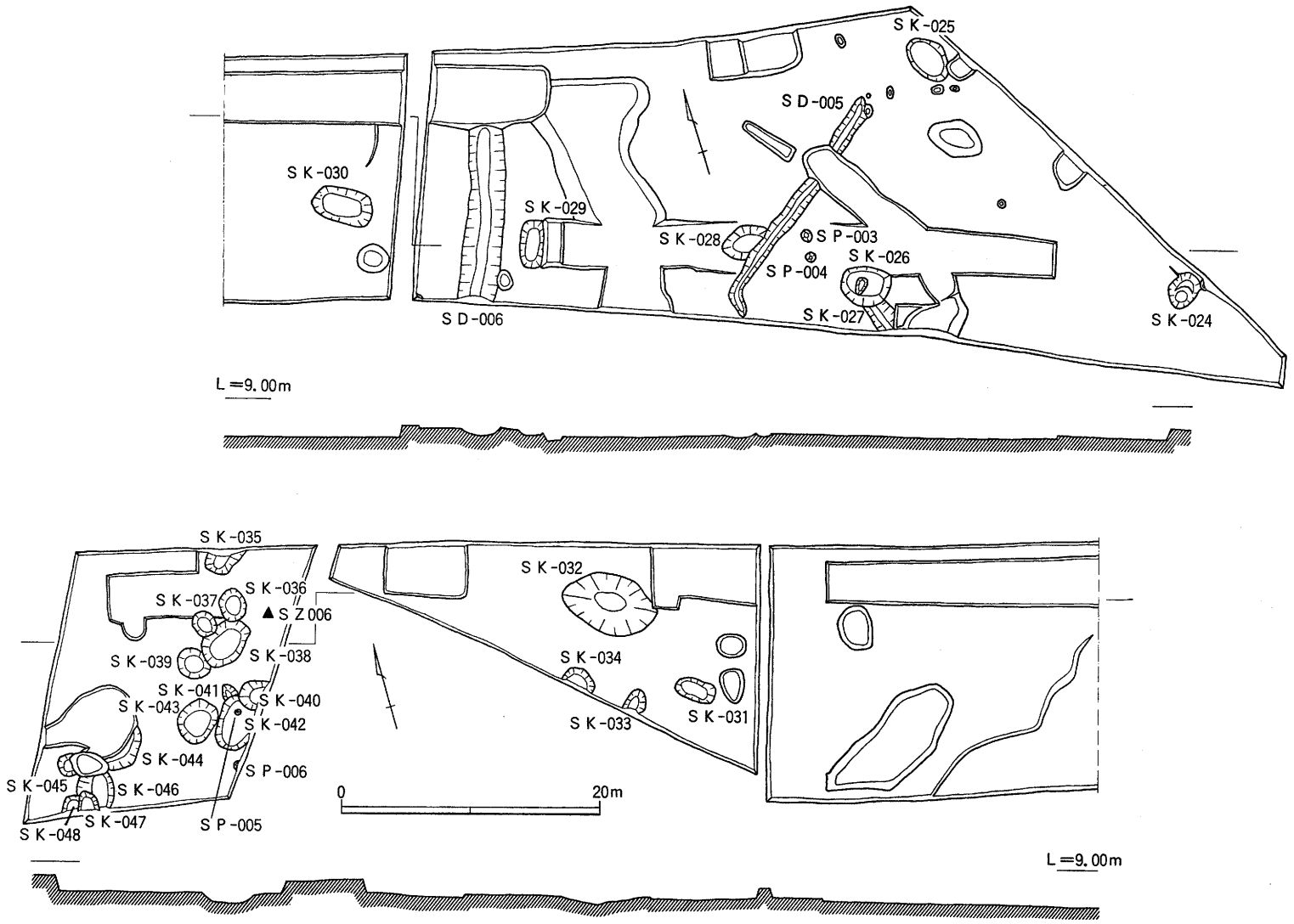
ら北端を認めるが、南端は調査区外へ延び全容不明。平面プランやや弧状を呈する。遺物は認められず。

不明遺構　第４区の西端付近 SK038 の東に位置し、土師器（第37図35）のみを出土する。

(5)　第５区の遺構（第18図）

調査地区内で最高所に位置する。旧公園のため山土を客土としている。塵芥処理坑のため攪乱が著しい。遺構は７基の土壙墓を検出する。本区の東端から第４区の西端に跨り礫が目立つ。

土壙墓　SK049 と SK055 は墓壙の掘り込みが深く、その他は浅く平面規模も小型である。


S K-025
S D-005
S K-030
S K-029
S K-028
S P-003
S K-026
S P-004
S D-006
S K-027
S K-024
L=9.00m
S K-035
S K-036
S K-037
▲S Z006
S K-039
S K-038
S K-041
S K-040
S K-043
S K-042
S K-044
S P-006
S K-045
S K-046
S K-047
S K-048
S P-005
S K-032
S K-034
S K-033
S K-031
0
20m
L=9.00m

第15図　第４区平面図

SK049は、土壙上部から周辺にかけて赤色系の土分を含む砂が覆い、10～20cm大の礫が多く、底面に凹みをもつ。中期の弥生土器細片をみとめる。

SK055（第19図）は、平面プラン長軸の短い楕円を呈する。長軸端よりやや北に偏して弥生土器（第38図）を横転した状態で埋置する。時期は遺物から弥生時代中期前葉と考えられる。

(6) 第6区の遺構（第20図）

幼稚園の旧校庭で遊具施設などの基礎掘り込みのため攪乱が著しい。特に、西半は遺構検出面が大きく破壊されており，したがって、比較的被害の少ない地域を選び調査区とした。ほぼ全面に土壙墓13基、小穴3穴、不明遺構5基などの遺構を検出する。本区も礫の出土が顕著である。

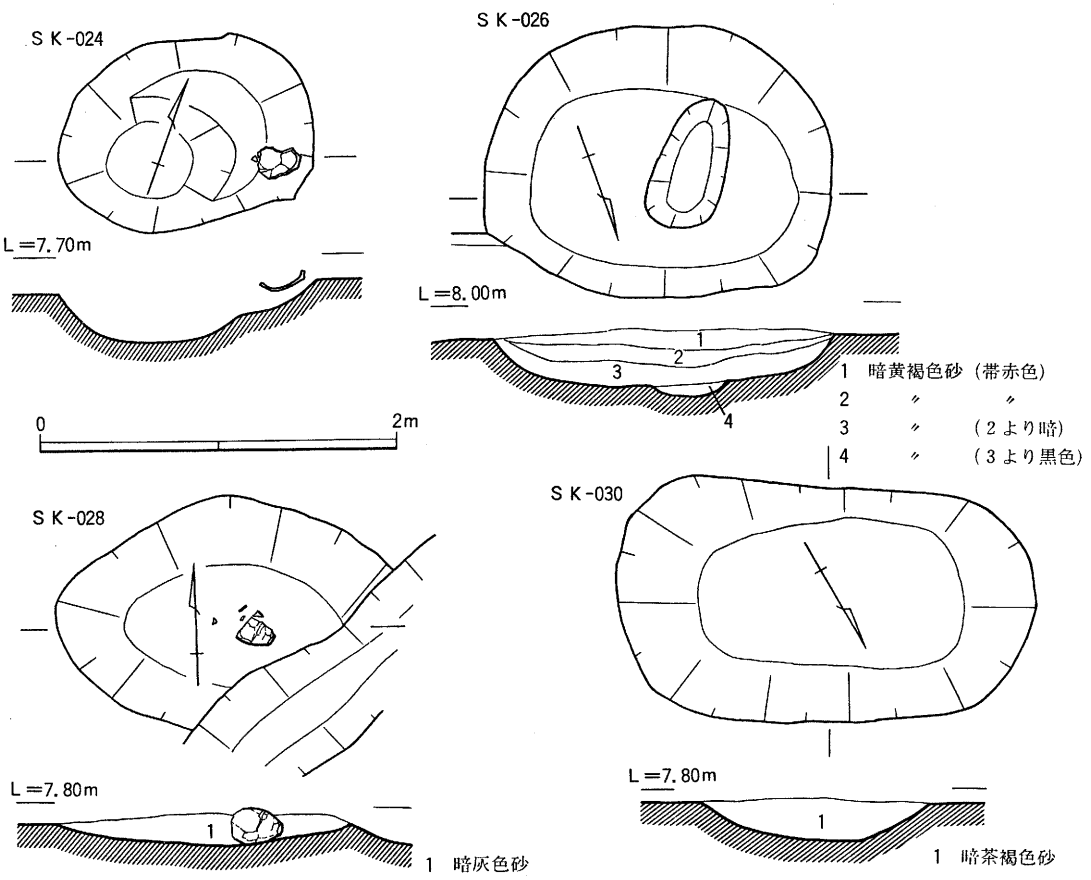
土壙墓　この区の土壙は，上部が既に削平され、底付近が遺存しているため規模が小さい。

SK057は，攪乱のため南半が不明。底北端に横転した中期中葉の弥生土器（第39図47）を埋納する。体部に豆粒大の穿孔を施す。

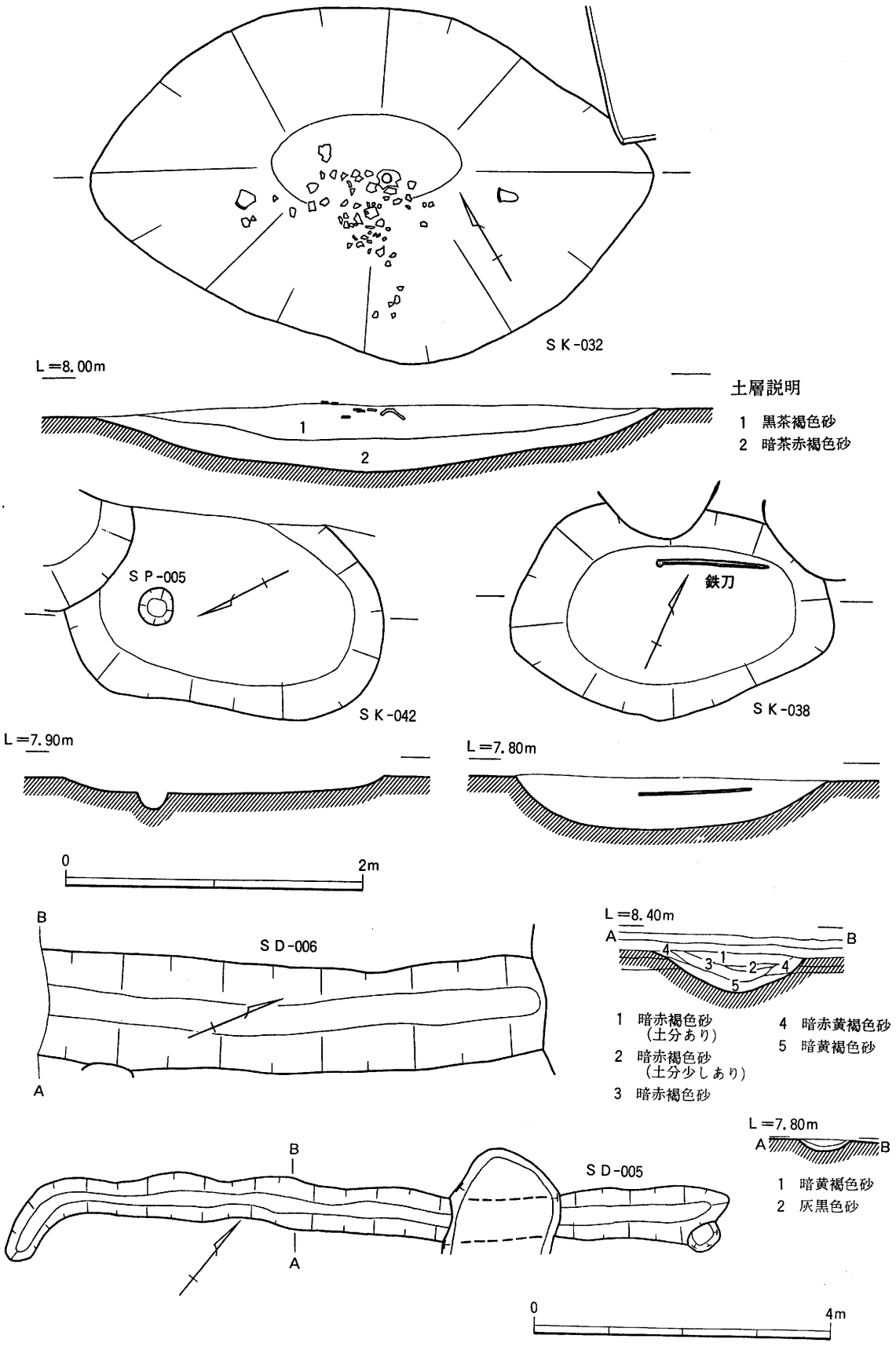
SK058（第21図）は、隅丸の方形かあるいは円形を呈する土壙である。この区の中では、規模の大きい方である。SZ008が埋土を掘り込み重複する。遺物は認められない。

SK066（第21図）は、攪乱が顕著で全容不明。中央部やや西壁に偏し底面より浮いて鉇が埋置されている。鉇に付着し鉄片が認められる。

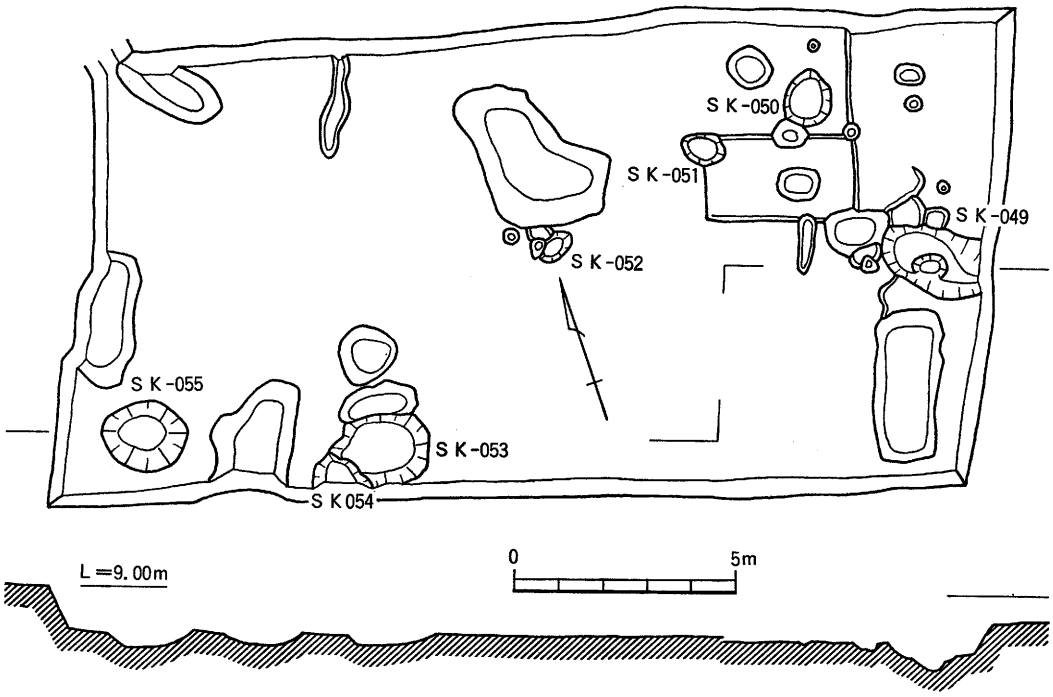
不明遺構　SZ009は東西に広がり北方に下降する不整形な落ち込みである。礫の出土も多く、大型の



第16図　第4区遺構実測図（S K）



第17図　第４区遺構実測図（ＳＫ・ＳＤ）



第18図　第５区平面図

底部を含む弥生土器片・土師器片を出土する。重複する遺構はすべて本遺構より新しい。このような平面形状を呈する遺構は、調査区東半の第１区から第５区には見当らず西半に多い。

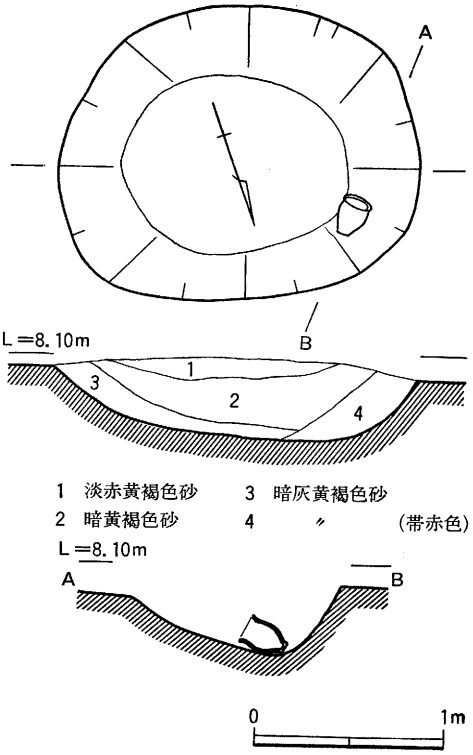
(7)　第７区の遺構（第22・23図）

松原小学校の南方にあたる。かつて小学校グラウンドからは，弥生時代中期前葉の直口壺・須恵器・土師器などが出土している。

今回は、土壙墓87基、溝状遺構13条、不明遺構12基、方形周溝墓４基などが検出された。

土壙墓　SK069（第24図）は、楕円形の墓壙である。上層に粉砕された中期前葉の弥生土器・甕（図版28-125）が出土。土器片の出土状況は、南側より押し流したように北下がりに出土する。SK070・071は、円形の墓壙である。重複関係から071が新しい。

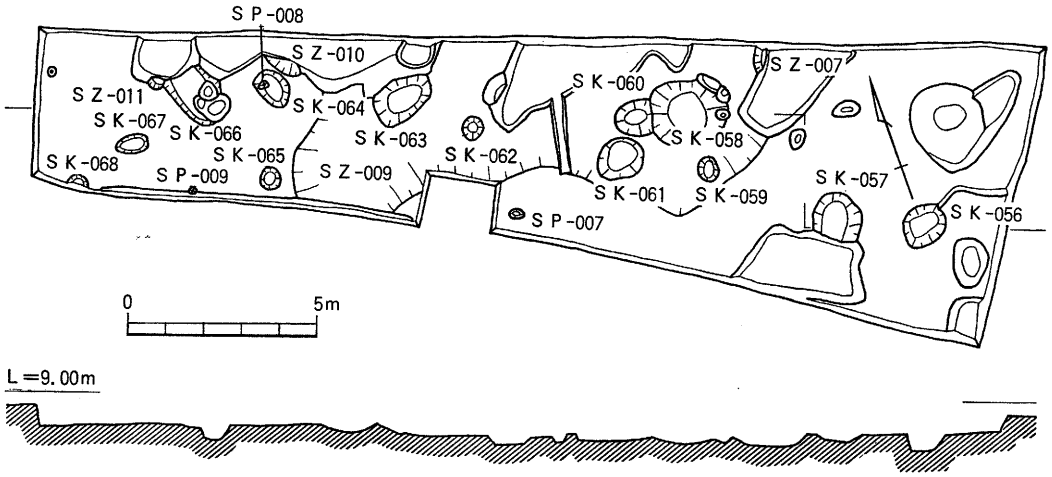
SK073は、長軸の短い幅広の墓壙である。弥生土器片を認める。



第19図　第５区遺構実測図（SK―055）

SK075は、長楕円形を呈する東端の底が高い。SD008より新しい。

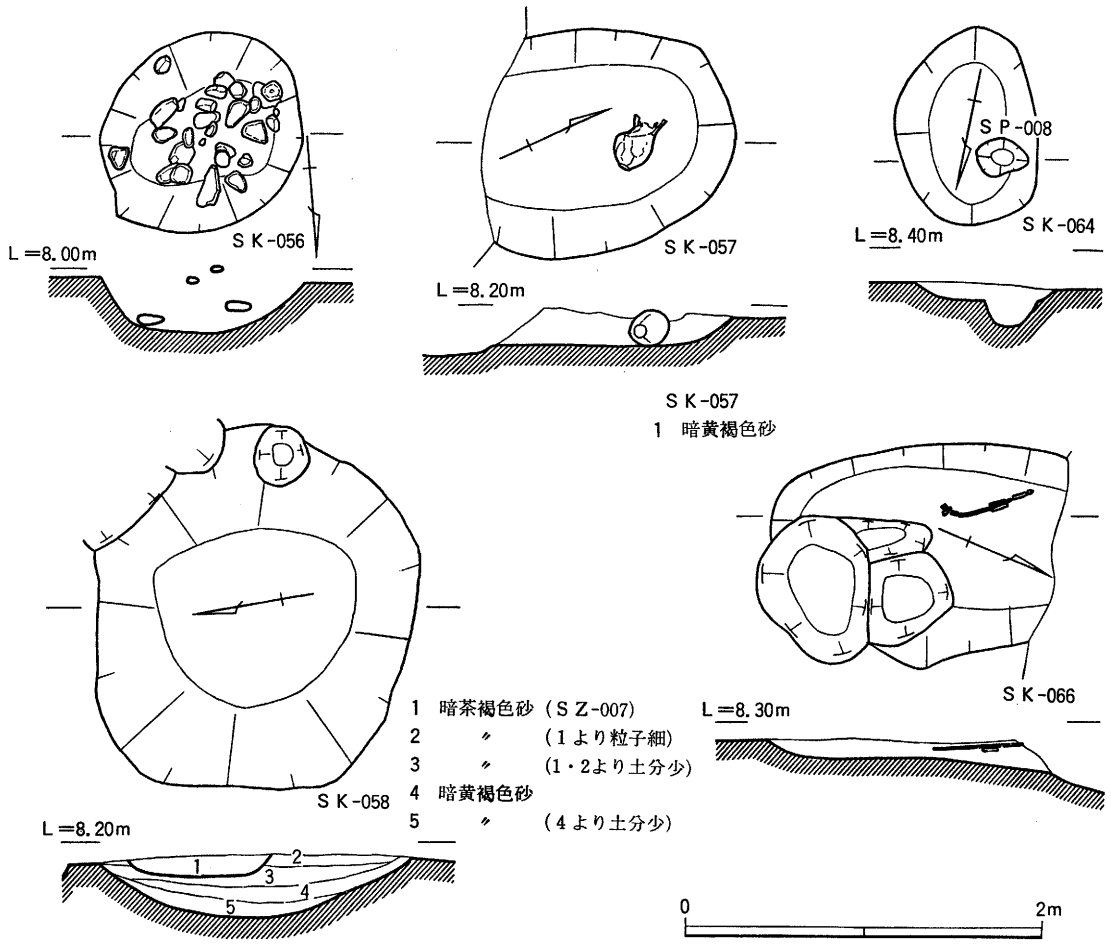
SK077は、SK076に接し、中期の弥生土器片を出土する。SD008より古い。



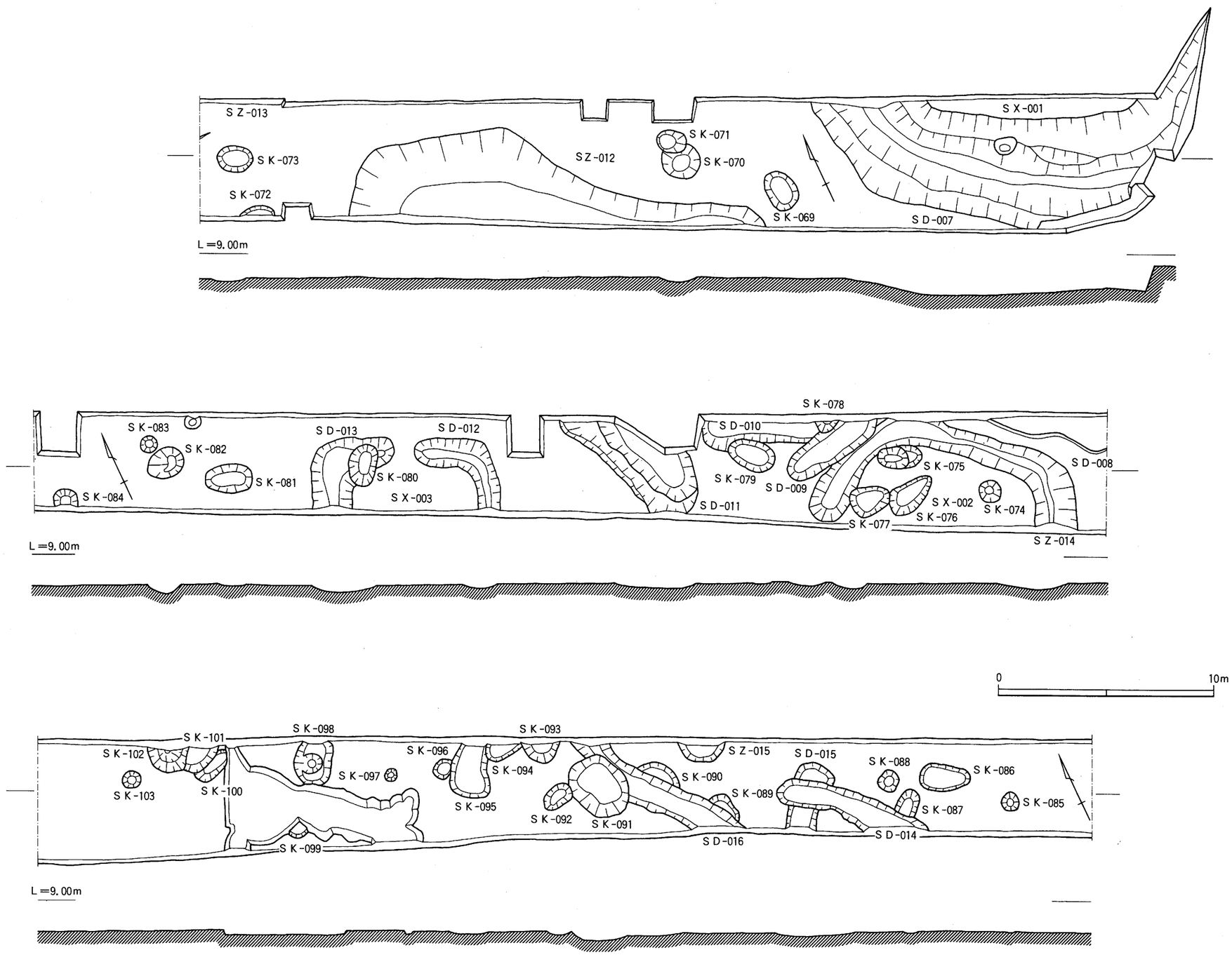
第20図　第６区平面図

SK080は、SD013埋土を掘り込む。庄内併行期の遺物を出土するが埋土の観察では次のSK081と同一で茶褐色系の土分を含む砂が検出され、安平時代前後に比定される。出土遺物は、SD013の埋土を掘り込んでいるところから013に伴う可能性がある。

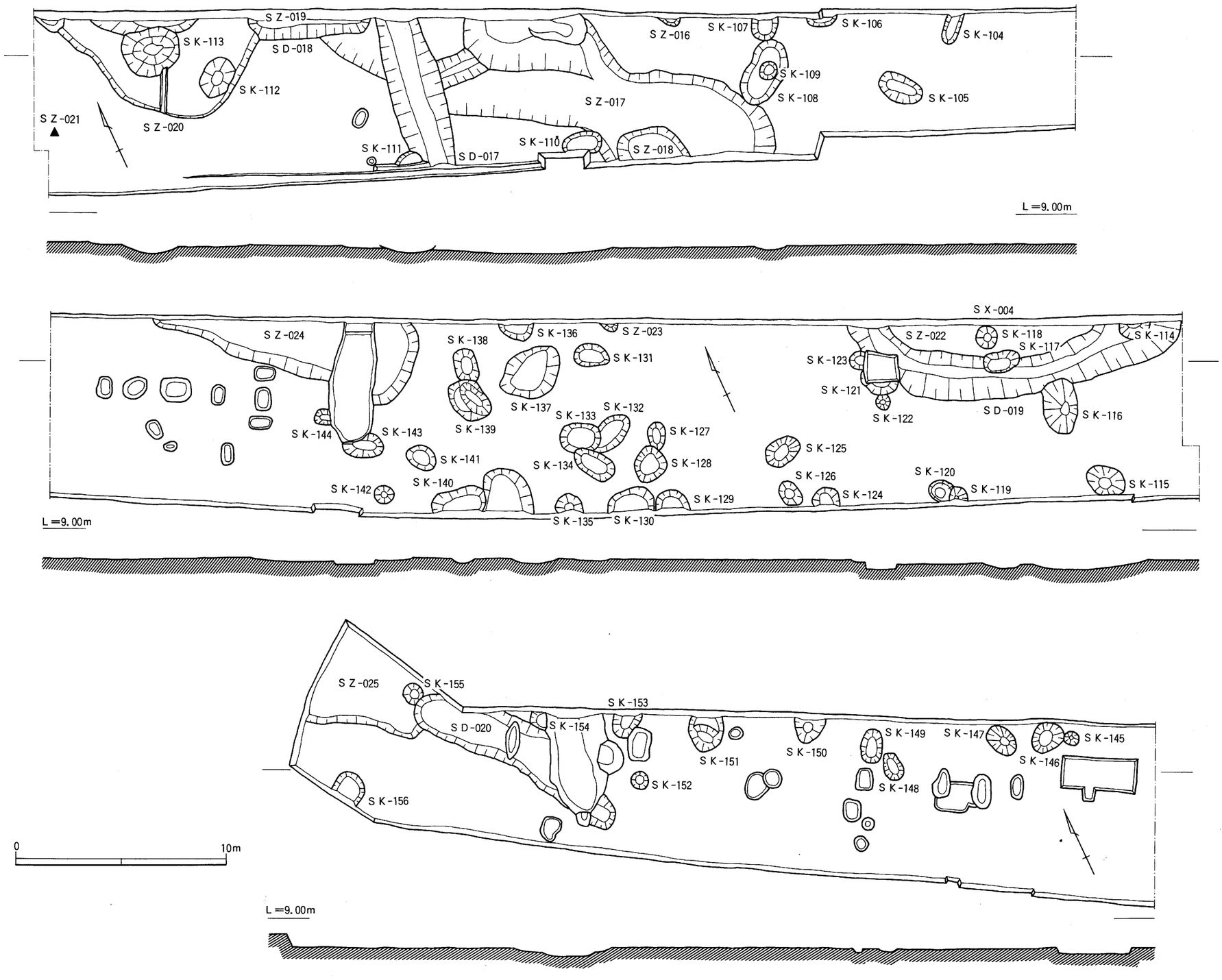
SK081（第24図）は、楕円形状を呈す墓壙である。第１・２層に底部を掻き取りかつ粉砕された平



第21図　第６区遺構実測図（S K）



第22図　第７区①平面図



第23図　第７区②平面図

安時代の甕（第42図-166）が出土する。

SK082（第24図）は、不整円形を呈す墓壙である。第一層の茶褐色秒は SK081 の第1層と同質である。第4・5層には炭・溶解物の混入が見られる。

SK083（第24図）は、円形を呈す墓壙である。第1層の茶褐色系の砂は、SK082 の第1層とほぼ同質で，第2層に炭・溶解物の混入が見られる。本遺構と SK082 は、規模の大小に違いがあるが同じ平面プランをもち、炭・溶解物など同じような遺物が見られる。

SK091（第25図）は、幅広の隅丸矩形を呈す大型の墓壙である。SD016 を掘り込む。庄内併行期土器片と釘片が出土している。

SK093 は、全容は不明。底部に穿孔を施した庄内併行期土器（図版27-117）を出土する。

SK094（第25図）は、遺構が調査区外におよぶため全容は不明。庄内併行期土器片（図版27-118）を出土する。遺構の重複関係から SK093 より本遺構の方が古い。

SK095 は、平面プラン隅丸矩形か。遺構が調査区外におよぶため全容は不明。中期の弥生土器（第26図-59）を出土する。遺構の重複関係から SK094 より本遺構の方が古い。

SK097・137・139 は、不整形な形状をもつ土壙である。平安時代の土師器片が出土している。

SK098（第24図）は隅丸矩形を呈す。底中央部に円形の掘り込みを認める。庄内併行期土器片を出土する。SK104（第25図）は、細長い隅丸矩形を呈す土壙である。後期の弥生土器（第40図-74）が、底より浮いた状態で第1層に出土。

SK107 は、遺構が調査区外におよぶため全容は不明。底中央部側壁際に横転した状態で庄内併行期土器が埋納されている。

SK109（第25図）は、円形の深い土壙である。平安時代の須恵器（第43図-173）・炭・釘・骨粉を出土する。土壙の平・断面から SK082・083 と類似点が見られるが、本遺構には骨粉の出土があり、現在、人骨か否かの判断を持たないが火葬墓の可能性がある。SK108 の上面に位置する。

SK113 は、不整楕円形を呈する土壙である。庄内併行期土器片が出土している。

SK133（第26図）は、楕円あるいは隅丸矩形を呈する土壙である。土壙の底より浮いた状態で庄内併行期の土器（第42図-140）が出土している。

SK143 は、楕円形状を呈する土壙である。一部攪乱される。庄内併行期土器片が出土している。

SK151（第26図）は、幅広の楕円形状を呈する。南半を深く掘り込む。SK024 に類似する。

SK154 は、全容が不明である。中期の弥生土器を出土する。SD020 に掘り込まれる。

溝状遺構　13条を検出している。このうち、5条は方形周溝墓の周溝部と考えられる。

SD009 は，全長 4.80m 以上、幅約 1.64m、深さ約 0.30m を測る。中期の弥生土器片と庄内併行期の土器片を出土する。遺構の重複関係から本遺構は SD008・010・SK078 より新しい。

SD010 は、調査区外に北半がかかり、東は SD009 に掘り込まれるため全容は不明。全長 6.27m 以上、幅 1.08m 以上、深さ 0.20m 以上。庄内併行期の土器片と溶解物を出土する。

SD011は、全長7.50m以上、幅3.08m以上、深さ0.37m以上。幅広の溝状遺構である。SD009とは、長軸がほぼ直交し、南西隅に陸橋部を残す方形周溝墓の可能性を持つ。庄内併行期の土器片を出土する。

SD014 は、全長 7.30m 以上、幅 1.55m 以上、深さ 0.24 m 以上。南端は調査区外にのびるが、肩

部の曲がり具合からほどなく完結するか、もしくはコーナー部にあたるかのいずれかである。

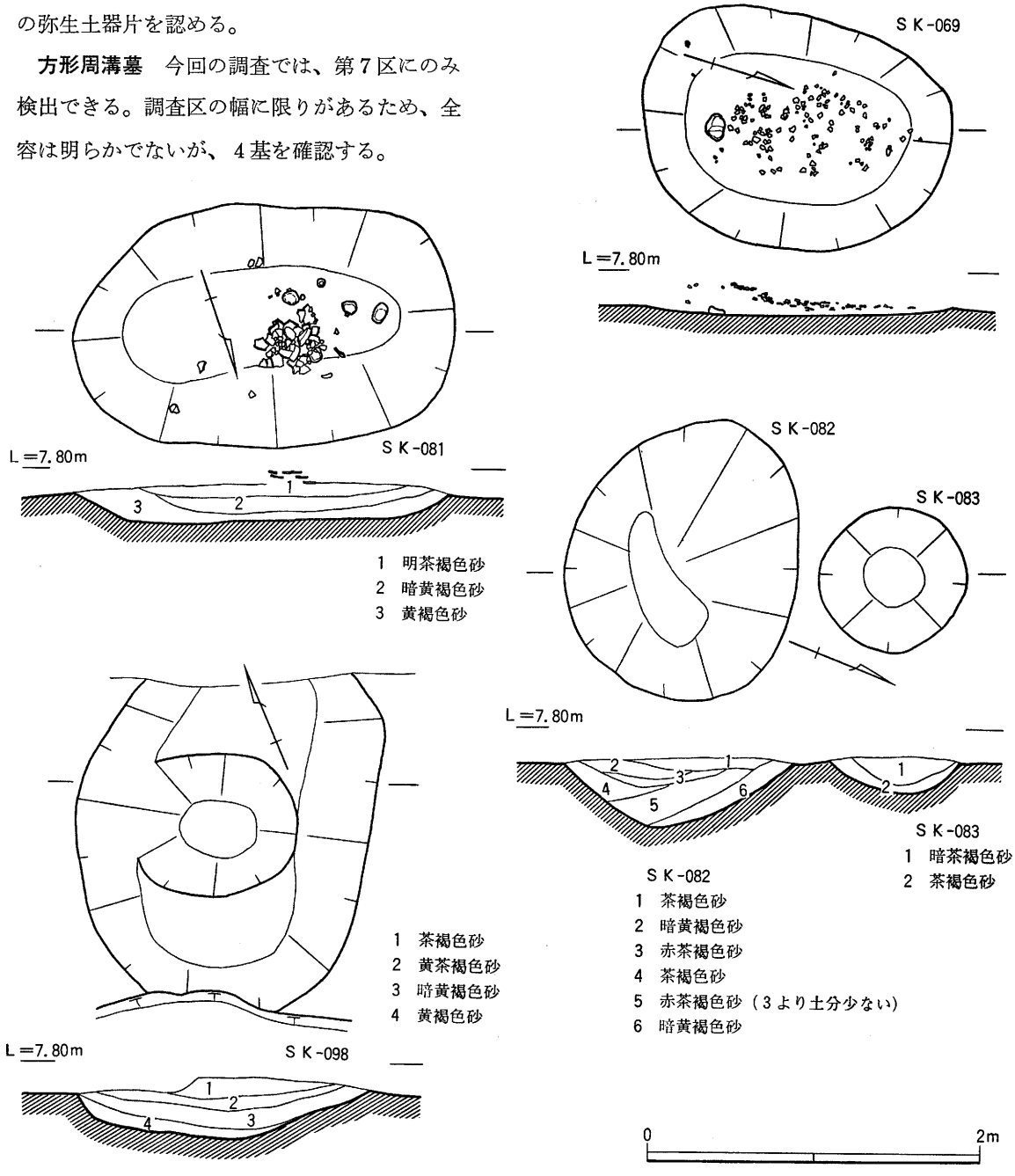
SD016は，全長8.85m以上、幅1.58m以上、深さ0.29m以上。南北に伸びる。両端とも調査区外に伸びるため全容は不明。北側で、やや東方向に曲がる。SK091に掘り込まれる。土師器の細片を認める。

SD017は、全長7.40m以上、幅2.57m以上、深さ0.30m以上。南北に延び、両端が調査区外に至るため全容不明。庄内併行期の壺（第40図-70）・高杯（第41図-86）出土。

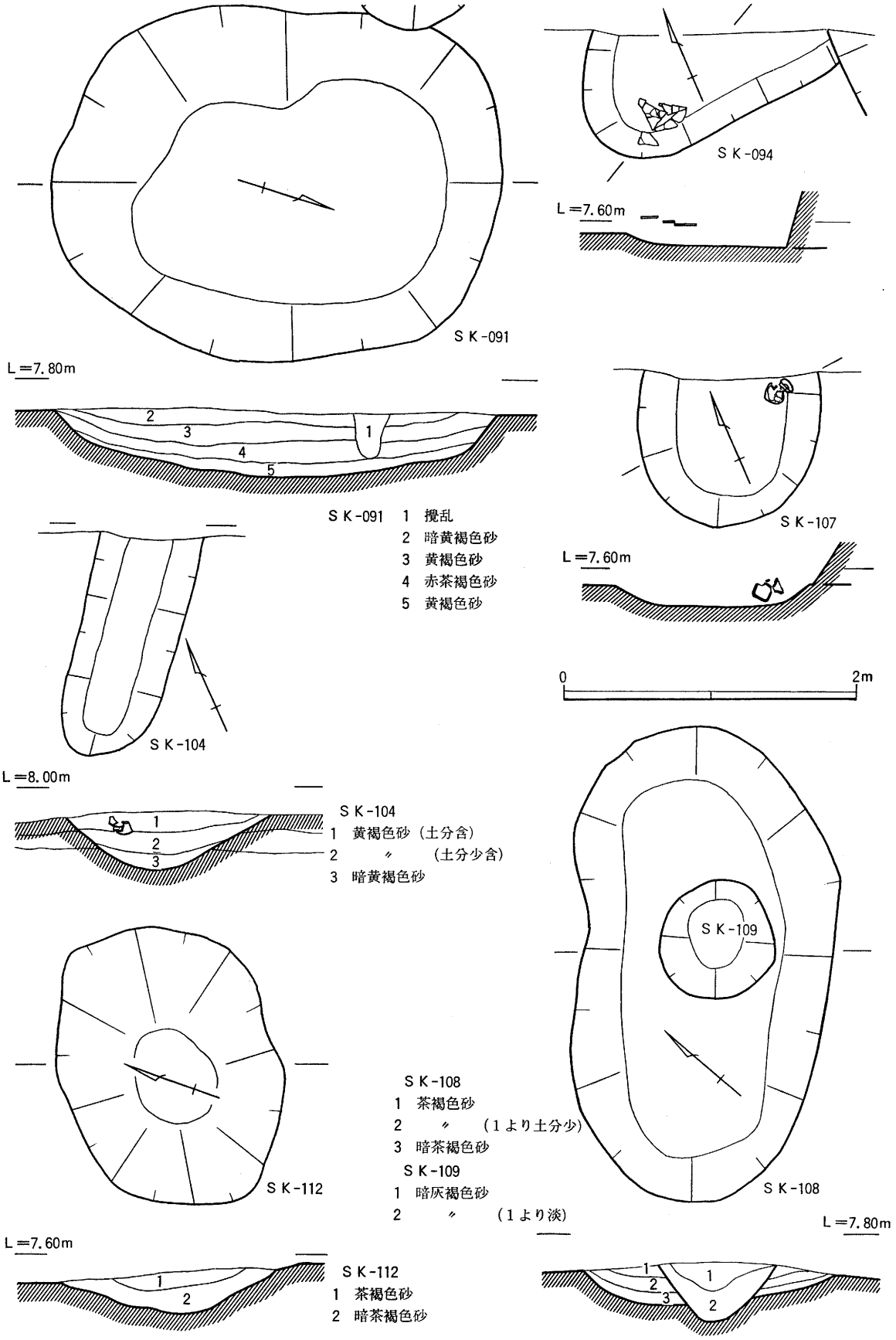
SD018は、全長5.79m以上、幅1.00m以上、深さ0.29m以上。長軸に沿い北半が調査区外である。庄内併行期の壺片が出土している。

SD020は、調査区西端に位置する。全長11.60m以上、幅2.40m以上、深さ0.27m以上。中期の弥生土器片を認める。

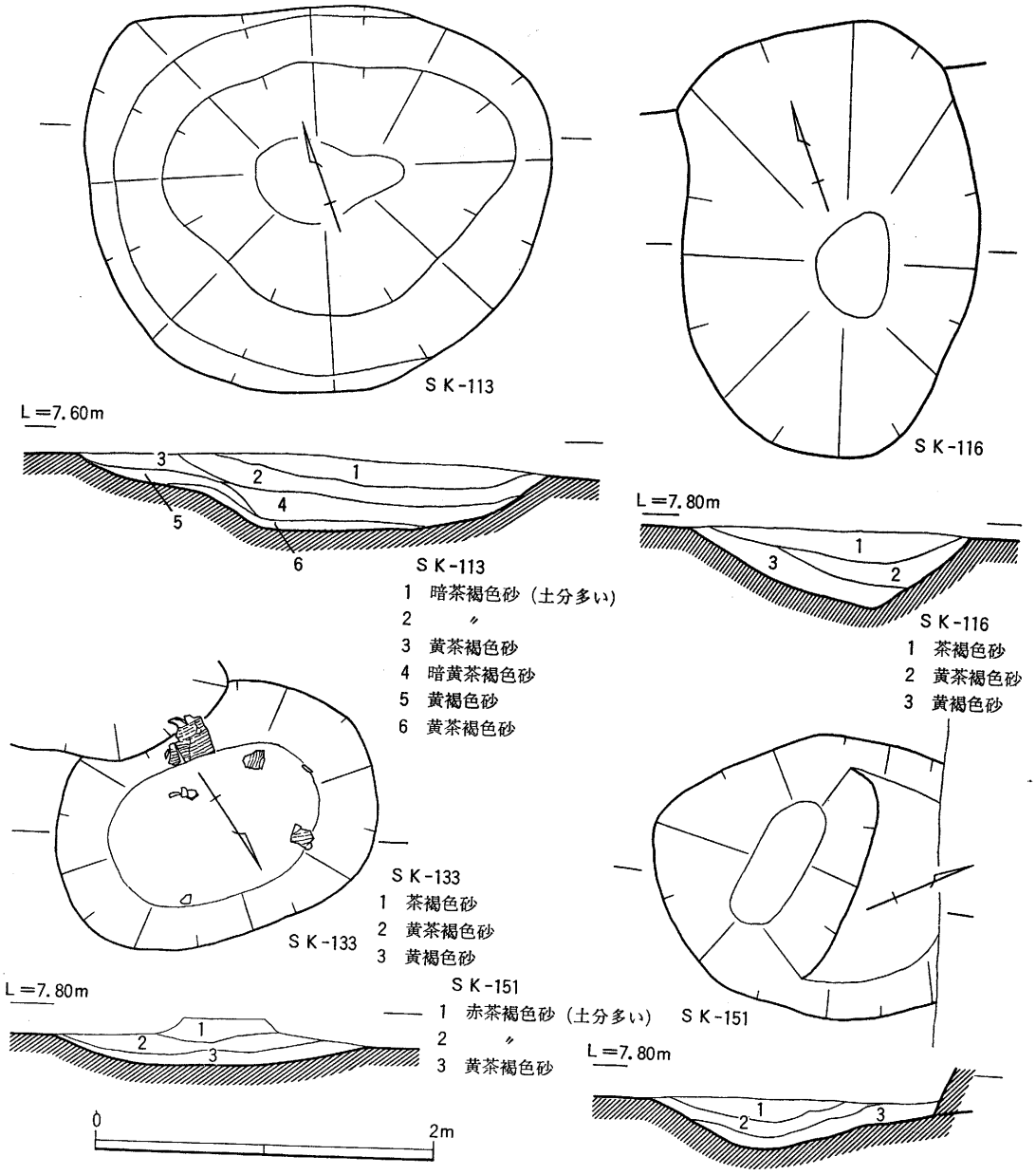
方形周溝墓　今回の調査では、第7区にのみ検出できる。調査区の幅に限りがあるため、全容は明らかでないが、4基を確認する。



第24図　第7区遺構実測図①（S K）



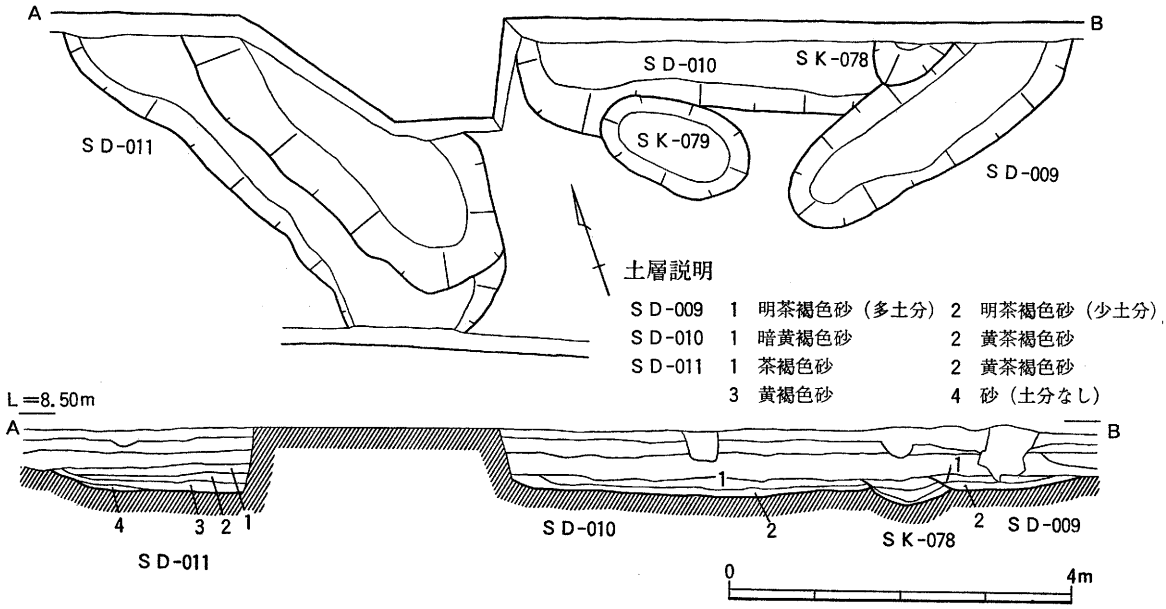
第25図　第7区遺構実測図②（S K）



第26図　第７区遺構実測図③（ＳＫ）

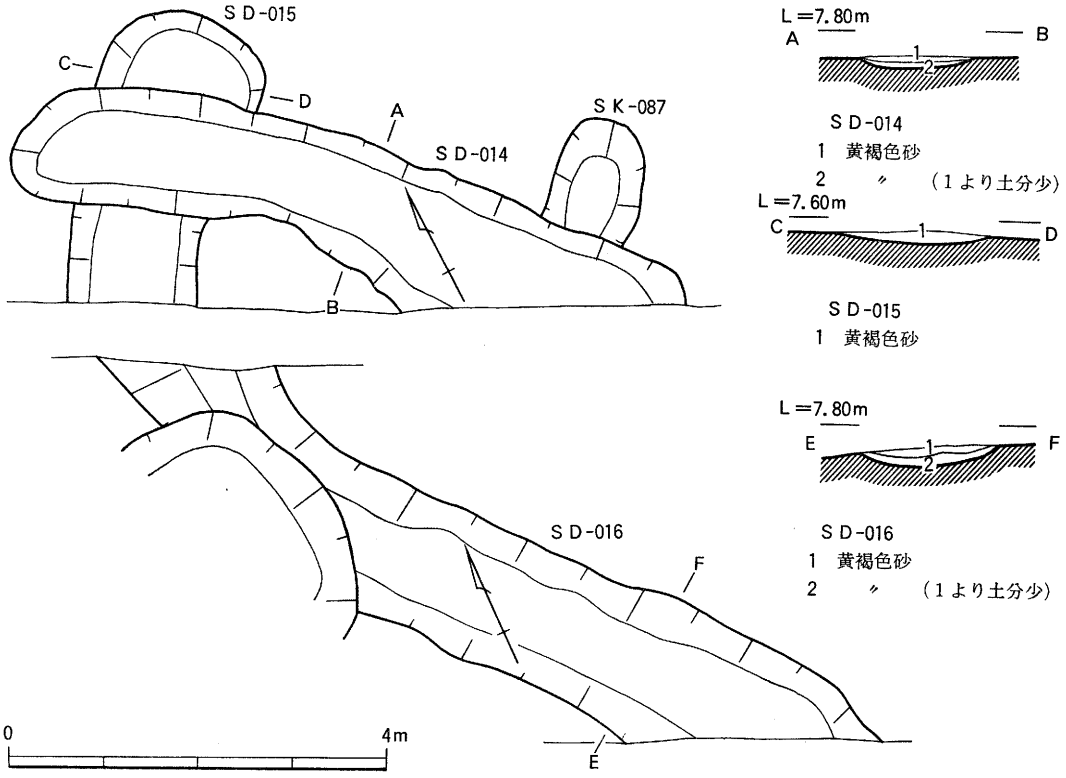
SX001 は、第７区の東端に位置する。SD007 を周溝部とし、南辺と南西・南東部のコーナーを検出する。周溝部を含めた東西の規模は 18.5m 以上、周溝部の幅は 5.15m 前後を測り、深さは 0.75m である。本遺跡中最大規模である。内陸部は大半が調査区外に出るため全容が不明。周溝部南東コーナーに底より約 0.2m ほどのところに、横転した状態で完形の弥生土器（第40図-56）を検出。その他埋土中に、弥生土器（図版26-64, 28-131・134）および溶解物などを出土する。

SX002 は、SD008 を周溝部とする。北西辺に陸橋部を掘り残すと考えられる。周溝部を含めた最大規模は、12.5m 以上である。周溝部の幅は 1.90m 前後、深さ 0.43m 前後を測る。内陸部には、土壙４基を認めるが、その内の２基（075・077）は周溝部を切り込み本遺構より新しく、ほかの２基は（074・076）時期が不明で SX002 に伴うかどうか明らかでない。

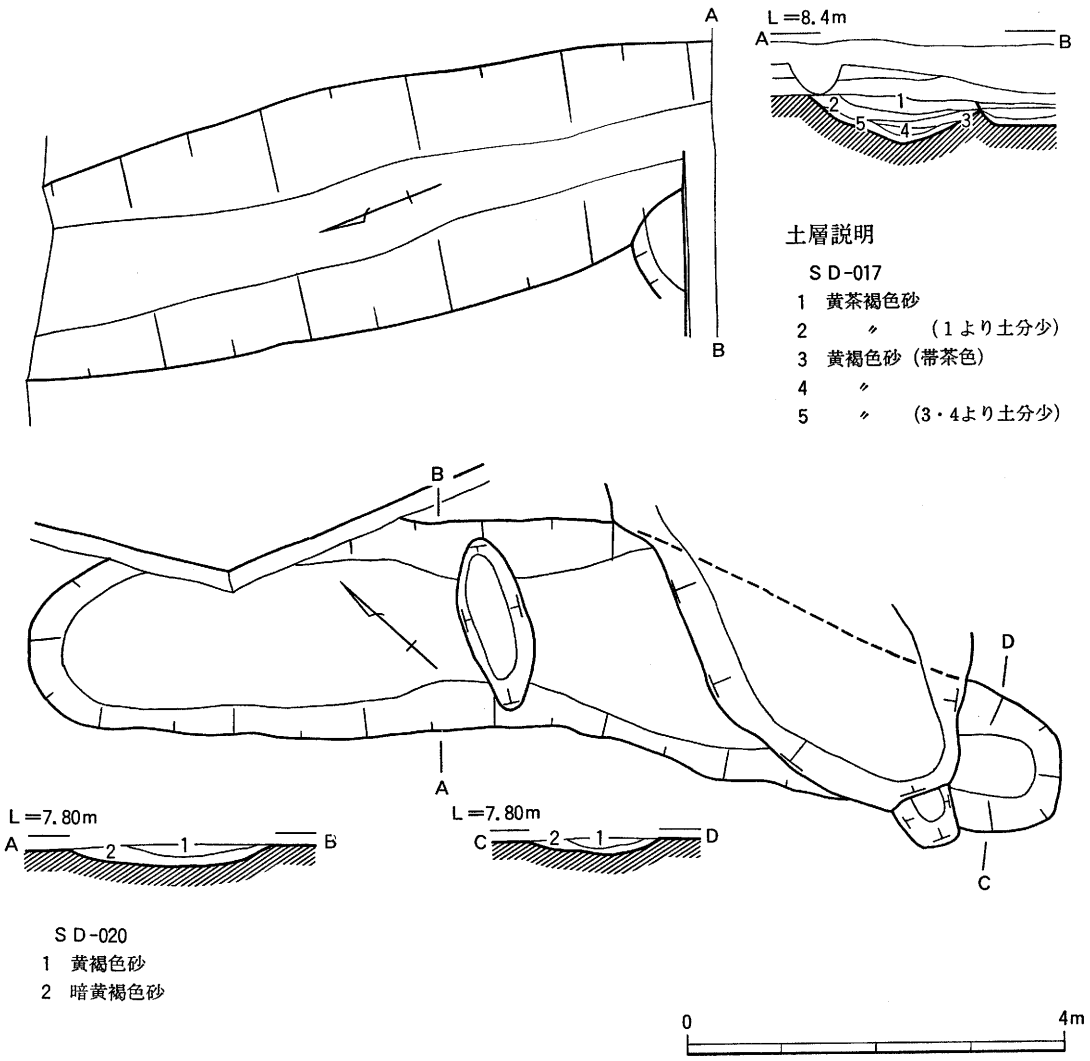


第27図　第７区遺構実測図④（ＳＤ）

SX003は、SD012と013を周溝部とする。北東辺中央に幅0.91mの陸橋部をもつ。最大規模約8.80m、周溝部幅1.40～1.64m、深さ0.35m前後を測る。墳丘部は削平されている。SD012の南西辺中央部付近に庄内併行期にかかる小型甕（第42図-146）が、SD013には同じ庄内併行期の小型鉢（第42図-147）が、出土している。またSD012のコーナー部に、中期の弥生土器（第40図-57）壺上半部が底面に食い込んだ状態で出土している。土壙の遺物ではないかと考えられるが、遺構は検出できなかった。



第28図　第７区遺構実測図⑤（ＳＤ）



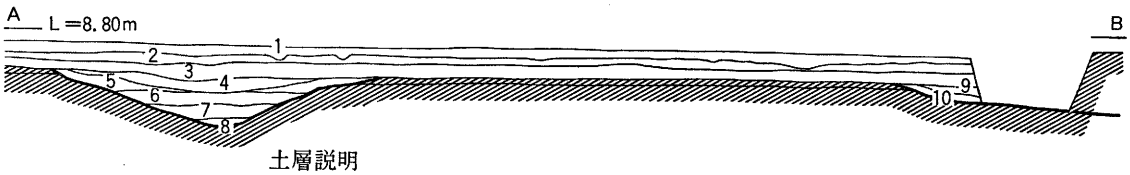
第29図　第7区遺構実測図⑥（SD）

SX004は、SD019を周溝部とする。墳丘部に当たるところがSZ022に削り込まれている。墳丘部での遺構の重複関係は、まずSK117とSK118が先行し、この両者の前後関係は不明。次に、SD019が掘り込まれ、最後がSZ022である。いずれも遺物が乏しいため時期の決定ができない。しいて言えば、SD019の周溝部に弥生時代後期から最終末にかけてが多く、弥生時代後期末になるか。

不明遺構　SZ012は、全長19.5m以上、幅4.4m以上、深さ0.26m以上。SZ017は、蛇行気味に北に下降しながら調査区を斜めに横断する。全長22.20m以上、幅5.80m以上、北壁最深部で深さ0.54m以上。遺構の内部は東西方向に延びる溝状遺構、あるいは一部に深い部分があり底面は一様でない。遺物は、弥生時代後期から最終末にかけてのものである。本遺構の埋土には、SD017・019、SK110、SZ018が掘り込まれている。

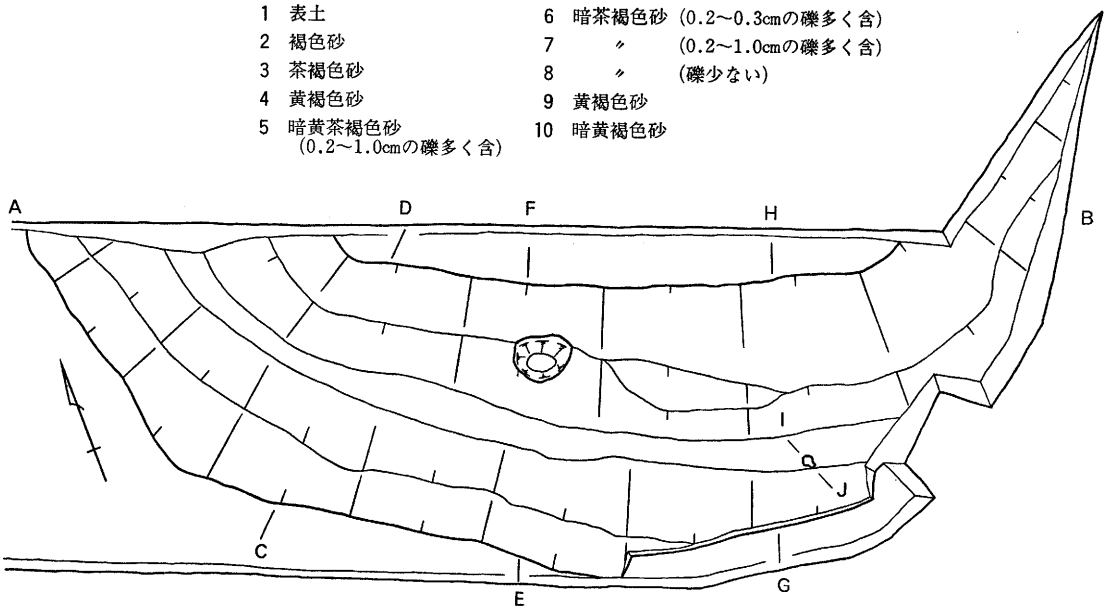
SZ018は、調査区外に延びるため全容不明。土壙の底面が舟底状をもつのに比べ、本遺構は平坦である。南壁に沿って3.61m、南壁からの幅は1.50m以上、深さ0.19mである。

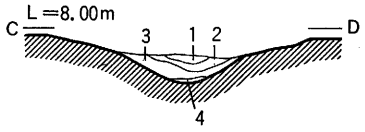
SZ019は、SD018の上位に位置し調査区北壁面に検出できた。壁面での幅約1.95m、深さ0.30mで



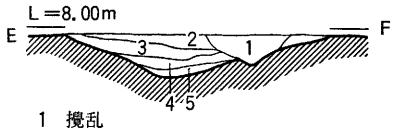
土層説明

1 表土
2 褐色砂
3 茶褐色砂
4 黄褐色砂
5 暗黄茶褐色砂 (0.2～1.0cmの礫多く含)
6 暗茶褐色砂 (0.2～0.3cmの礫多く含)
7 〃 (0.2～1.0cmの礫多く含)
8 〃 (礫少ない)
9 黄褐色砂
10 暗黄褐色砂

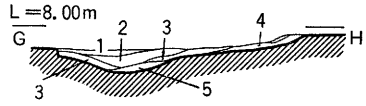




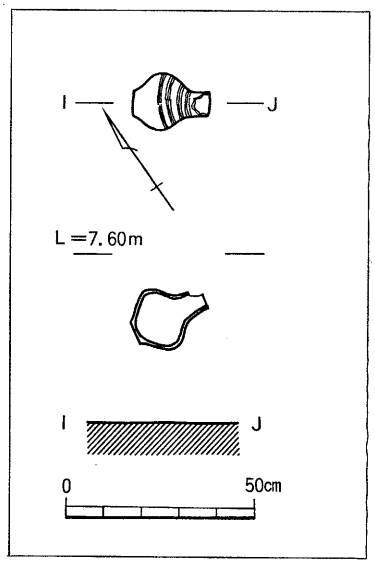
1 黄茶褐色砂 (0.2～0.3cmの礫多く含・土分少しあり)
2 〃 (0.2～0.3cmの礫多く含)
3 〃 (0.2～1.0cmの礫多く含)
4 〃 (礫少ない)

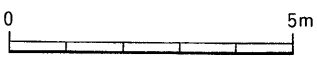


1 攪乱
2 暗黄褐色砂 (1.0～2.0cmの礫多く含・土分あり)
3 〃 (1.0～3.0cmの礫多く含・土分少しあり)
4 黄茶褐色砂 (0.2～1.0cmの礫多く含)
5 〃 (礫少ない)

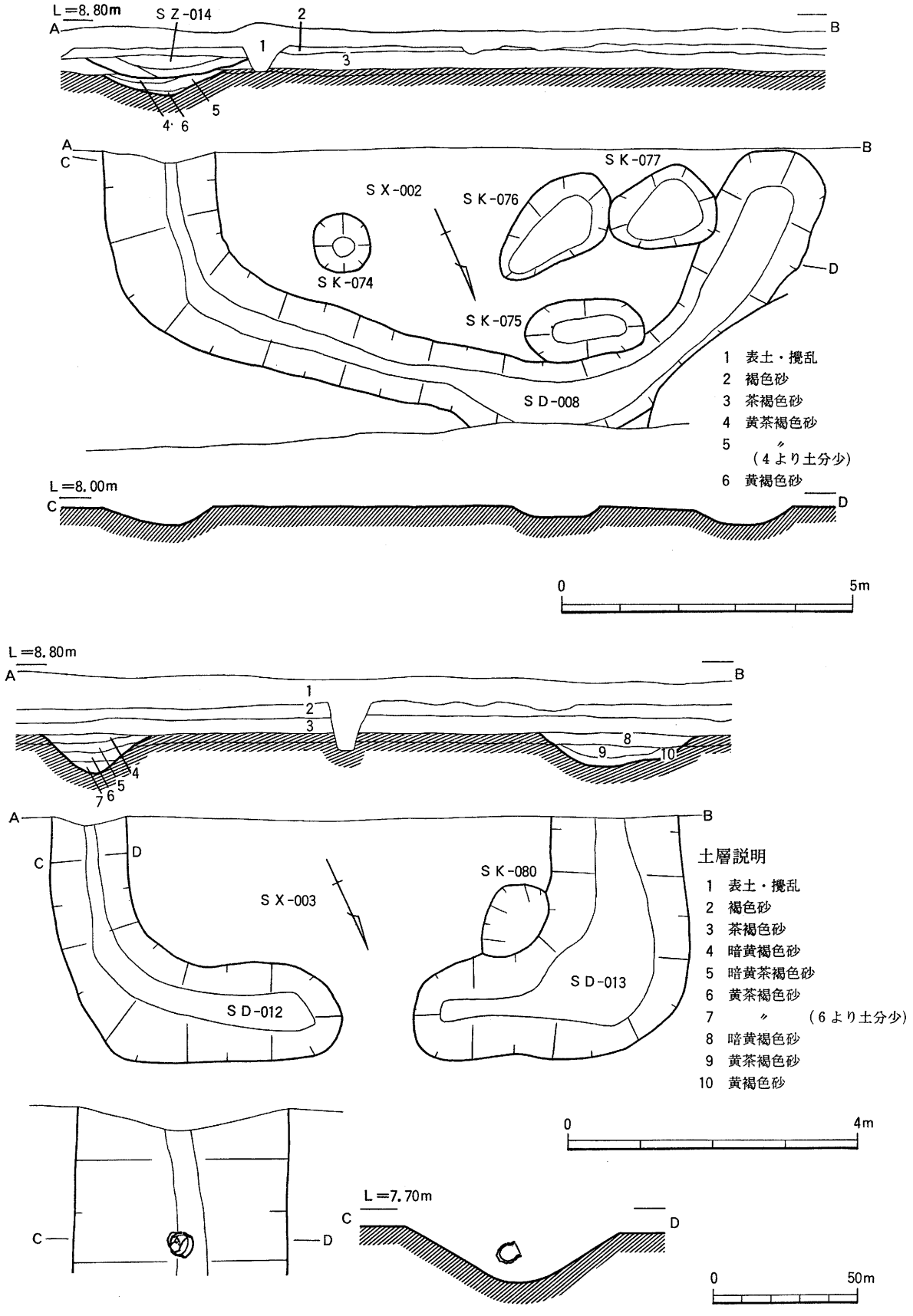


1 暗黄褐色砂 (0.2～1.0cmの礫含・土分少しあり)
2 〃 (0.2～1.0cmの礫多く含)
3 〃 (0.2～1.0cmの礫含)
4 黄褐色砂 (土分少しあり)
5 黄茶褐色砂 (礫少ない)

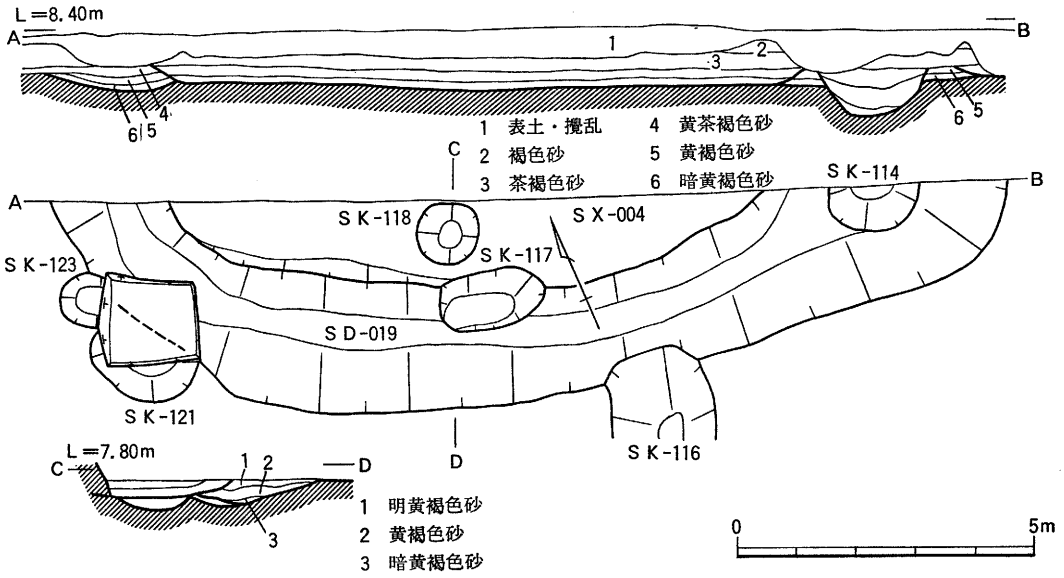




第30図　第７区遺構実測図⑦（ＳＸ—001）



第31図　第７区遺構実測図⑧（ＳＸ）



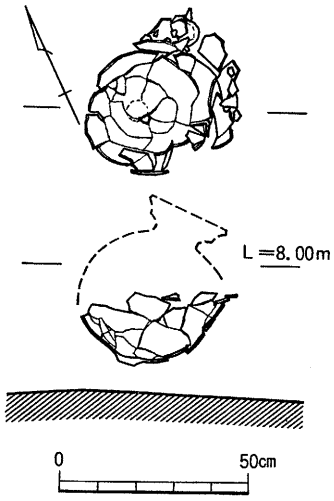
第32図　第７区遺構実測図⑨（ＳＸ—004）

ある。SZ020は、SZ012に平面プランが類似する。調査区外に延びるため全容は不明。北壁に向かい下降するが、壁際が一段と低い。規模は、壁面での幅が 9.50m、壁面までが 4.70m。最深部が 0.45mである。庄内併行期の壺片（第41図-88）が出土している。この遺物は SZ021 と同一個体片である。

SZ021は、遺構が不明確で庄内併行期の遺物のみ検出。同一個体片が東に位置しSZ020から出土する。

SZ022 は、平面プラン円形状の一端を検出、大半は調査区外に広がる。SX004 が埋まった段階でその上部に重なる。規模は、調査区北壁に沿って 9.92m、北壁からは 1.48m 以上、深さ 0.19m を測る。

SZ024は、調査区北壁にかかり全容が不明。底面は、平坦であり、やや中央に向かい下降する。全長12.3m、幅4.25m、深さ0.19mを測る。弥生土器・庄内併行期の高杯片・溶解物などを出土する。SZ025は、SK155、SD020に先行する遺構である。調査区西端に位置し、大半が調査区外に広がる。



第33図　ＳＺ—021遺物出土実測図

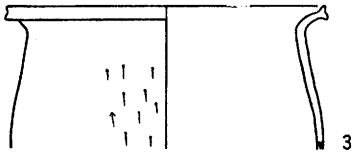
以上の遺構の中で、土壙墓と考えられるもののうち８基（表２・３）SX001周溝部出土の弥生土器をそれぞれ選び、人骨埋葬の痕跡を確認するためリン、カルシウム分析を行った。試料は24点を数えたが、結果は、各遺構においてリン，カルシウム成分の高い人骨などが埋葬された可能性は低いという所見を得た。ただし、分析に供した試料がいずれも粒径の粗い砂質土壌で、水の移動による土壌中の化学成分の流亡が粘土質土壌などに比べてはるかに大きいということである。つまり、このような土壌で覆われている土壙墓あるいは土器に人骨が埋葬されていたとしても、時間の経過にともない溶解したリン、カルシウム成分は、雨水などの影響によって容易に下層へ流亡し、その含量が著しく少なくなる可能性が考えられる。

4 遺　　物

(1) 第1区の遺物（第34図）

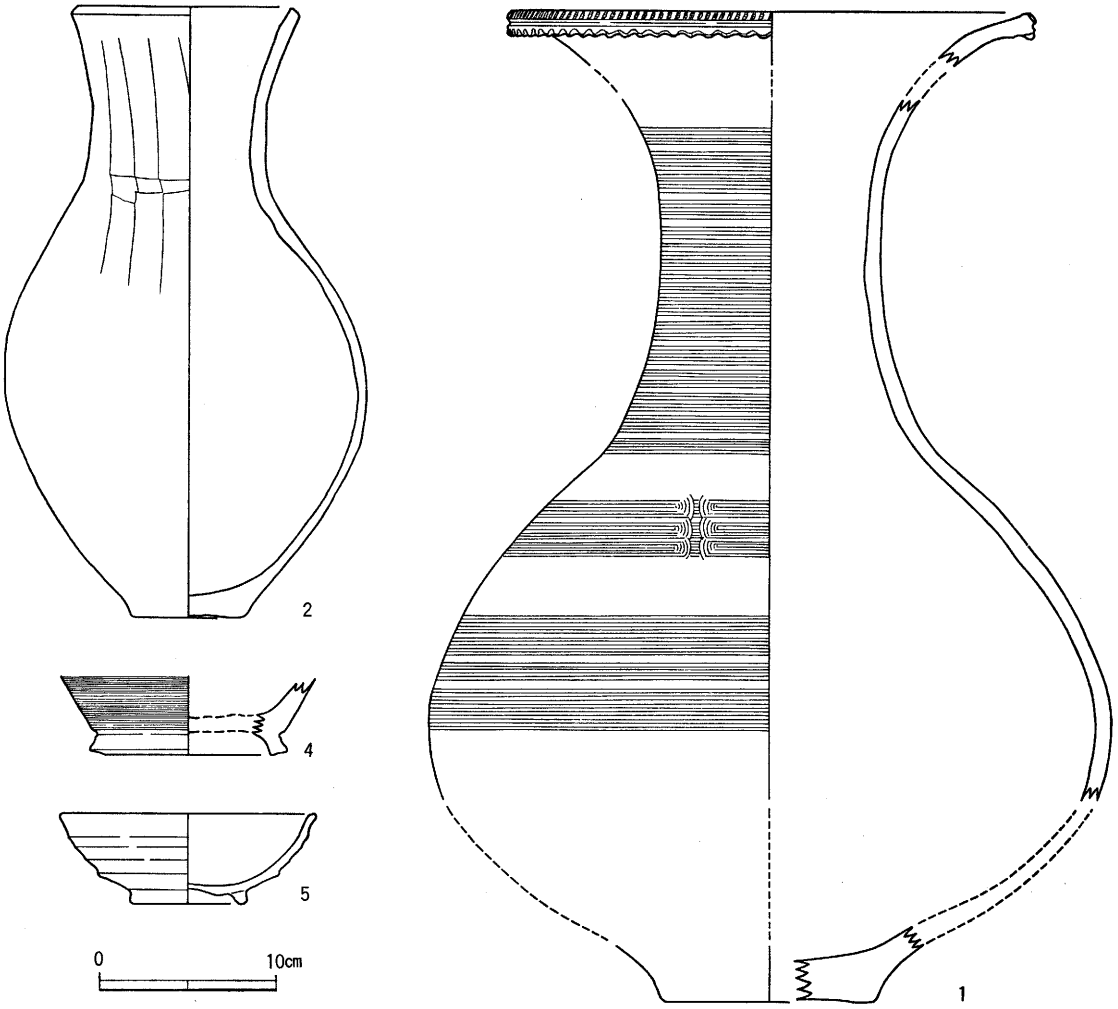
SK004の遺物 (2) 弥生土器直口壺。中期中葉。やや長い球形の体部に上方が開き気味の口頸部を付ける。口縁直下から板状工具による刷毛調整を施す。口縁部は平坦におさめる。

その他の遺物（1・3～5） 遺構以外の遺物である。1は、弥生土器の広口壺。中期前葉。口縁部が大きく外反し、体部下半に最大径をもつ。口縁端面は、中央に1条の沈線をもうけ上下に分割する。上は、連続刺突文下位は、棒状押捺圧痕文を一巡させる。頸部に14条、肩部に2条、体部上半に5条の櫛描直線文を施す。肩部の直線文には櫛描による扇形文が見られる。3は、弥生土器甕。中期。口頸部は、丸みをもって外反し、端面は横撫でにより上下に拡張する。体部外面は、上方向の箆削りを施す。最大径は口縁部にあり、胎土には結晶片岩が見られる。4は、須恵器の壺体部下半である。高台は外側にしっかり踏ん張り、体部はカキ目調整を施す。5は、土師器椀。平安時代。体部外面は、強い横撫でにより明瞭な段を形成する。



(2) 第3区の遺物（第35・36図）

SK006の遺物（8） 頸部から底部にかけての土器である。体部



第34図　第1区出土遺物実測図

上半に5条の櫛描直線文を施す。

SK012の遺物（10）　弥生土器壺。中期中葉。器高は、10.4cmである。やや扁平の球形に頸部から丸く外反する口縁部をもつ。端面は、平滑に仕上げ刻目を施す。内外面ともに粗い刷毛目が目立つ。体部上半は稚拙な櫛描文を4条施す。

SK018の遺物（11・12）　11は、弥生土器壺。中期中葉。無文で頸部に2条の突帯を付ける。体部下半に穿孔を施す。口縁部は打ち掻いたものか遺存しない。12は、頸部に3条の突帯をもつ広口壺である。中期中葉。体部上半に、直線文2条、波状文3条、直線文2条を施す。体部下半に穿孔を有する。

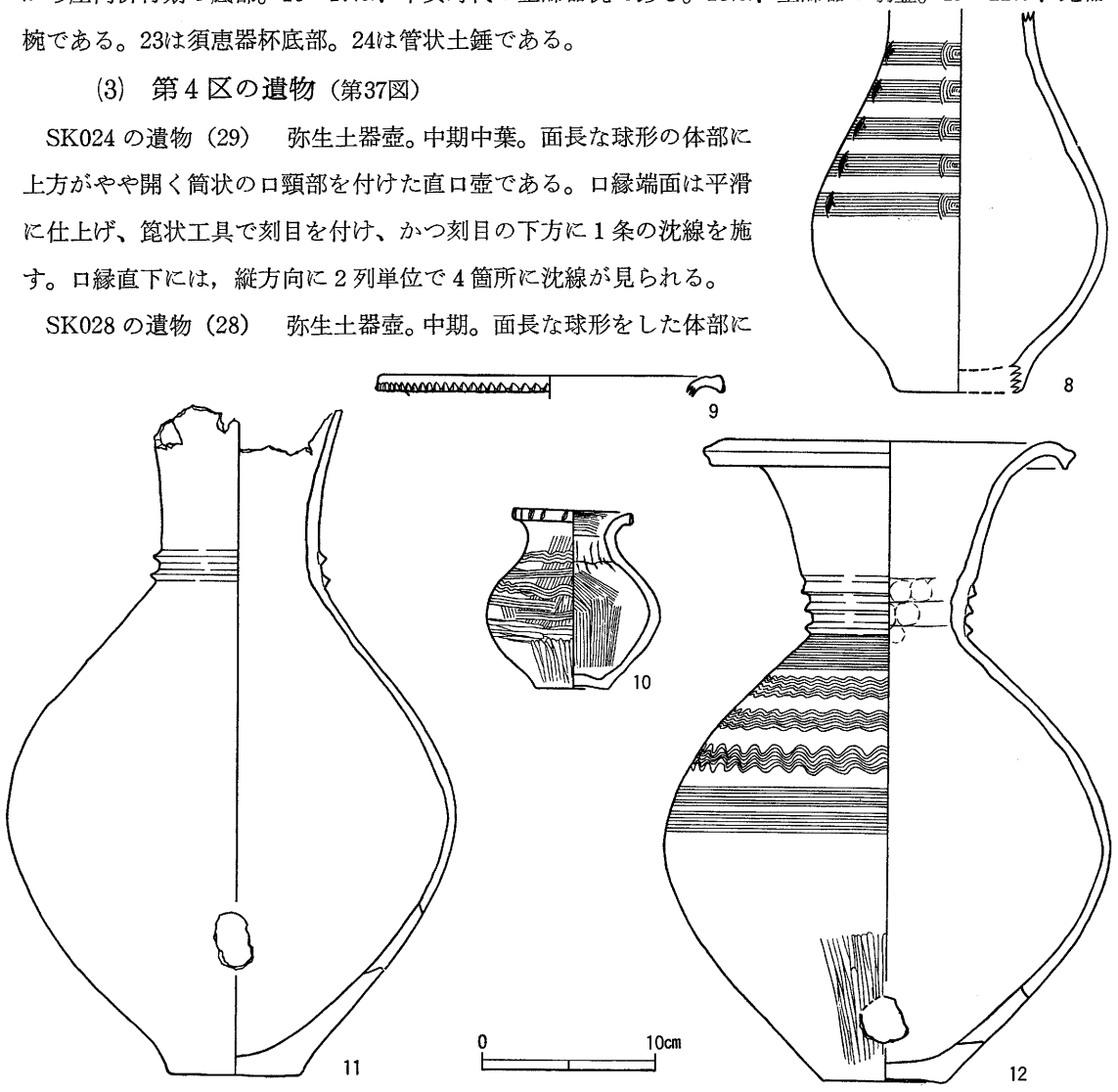
SZ001の遺物（13）　弥生土器の底部。

その他の遺物（6・7・9・14～24）　6・7は、ともに小片であるが縄文土器の特徴をもつものである。口縁部外面に扁平な突帯を巡らす。刻目は施さない。縄文晩期の長原式に後出するもので、紀南地方に類例が見られる所謂瀬戸式の範疇にはいるものか。本遺跡，今回の調査では最古の遺物である。9は、弥生土器広口壺の口縁部である。平滑におさめた口縁端面の下方に刻目を施す。14・15は、弥生から庄内併行期の底部。16・17は、平安時代の土師器椀である。18は、土師器の羽釜。19～22は、瓦器椀である。23は須恵器杯底部。24は管状土錘である。

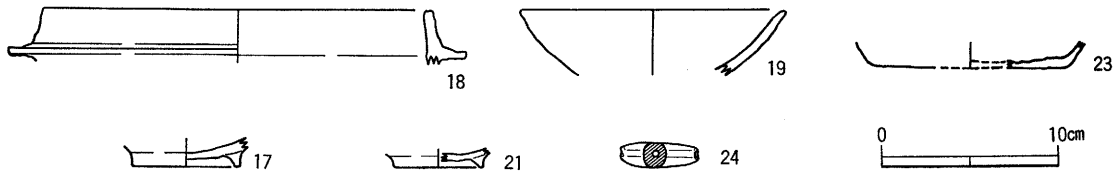
(3)　第4区の遺物（第37図）

SK024の遺物（29）　弥生土器壺。中期中葉。面長な球形の体部に上方がやや開く筒状の口頸部を付けた直口壺である。口縁端面は平滑に仕上げ、篦状工具で刻目を付け、かつ刻目の下方に1条の沈線を施す。口縁直下には，縦方向に2列単位で4箇所に沈線が見られる。

SK028の遺物（28）　弥生土器壺。中期。面長な球形をした体部に



第35図　第3区出土遺物実測図①



第36図　第３区出土遺物実測図②

直立した口頸部を付ける。口縁部は遺存しない。体部上半から口頸部にかけて８条以上の櫛描直線文が施される。

SK027 の遺物（26）　弥生土器直口壺。中期中葉。口縁端面は撫で調整のため内面に肥厚する。

SK032 の遺物（27）　弥生土器直口壺。中期中葉。細片化し墓壙内に散在していた。面長な球形をした体部に上方が開く筒状の口頸部を付け、底部は僅かに上げ底になる。体部下半に穿孔が見られる。

SK038の遺物（44）鉄刀（直刀）。全長76.7cm。刃身長63.5cm、身幅2.6cm、身（背）厚さ0.8cm、茎長13.2cm、茎幅2.0cmをそれぞれ計測する。全長の割りに細身であるが厚手の刀身である。茎部に確認できる限りにおいて、目釘孔１個が認められる。刃身長の３分の１程度に鞘部の木質が付着している。

SZ006 の遺物（35）　土師器小型丸底壺。５世紀代。球形の体部に内湾しながら短く上方に延びる。全体的に粗い刷毛目調整が目立つ。

その他の遺物（25・30～34・36～43）　遺構以外の遺物である。25は、SK033 と034の中間点付近に出土。縄文晩期の突帯を施した深鉢片である。30は、櫛描直線文を施した弥生土器壺口縁部片である。口縁端面は平滑に納める。器壁の傾きから細頸壺になるか。31は、櫛描直線文を施した弥生土器壺口縁部片である。32は、櫛描直線文を施した弥生土器壺体部片である。33は、丸みをもって短く外反する口頸部をもつ弥生土器甕片である。口縁端面は丸く納める。34は、短く開く口縁部をもつ土師器甕の口頸部である。口縁端面は丸く納める。口縁内面に横方向の粗い刷毛目調整を施している。36～38は、土師器椀である。36は、高台部を失う。口縁部は内外面ともに横撫で調整を施す。37は、高台部である。高台の断面は逆台形で、やや外に踏ん張る。39・40は弥生土器片。41～43は、奈良・平安時代にかけての製塩土器である。指頭圧痕のついた指押さえ調整、あるいは撫で調整を施すものが見られる。

(4)　第５区の遺物（第38図）

SK055 の遺物（45）　弥生土器紀伊形甕。中期前葉。張り気味の体部に丸く外反する短い口頸部をもつ。口縁部端面は平滑に納める。外面頸部以下は縦方向の刷毛目を施したあと、底部から肩部にかけて篦削りを行う。底部は上げ底。

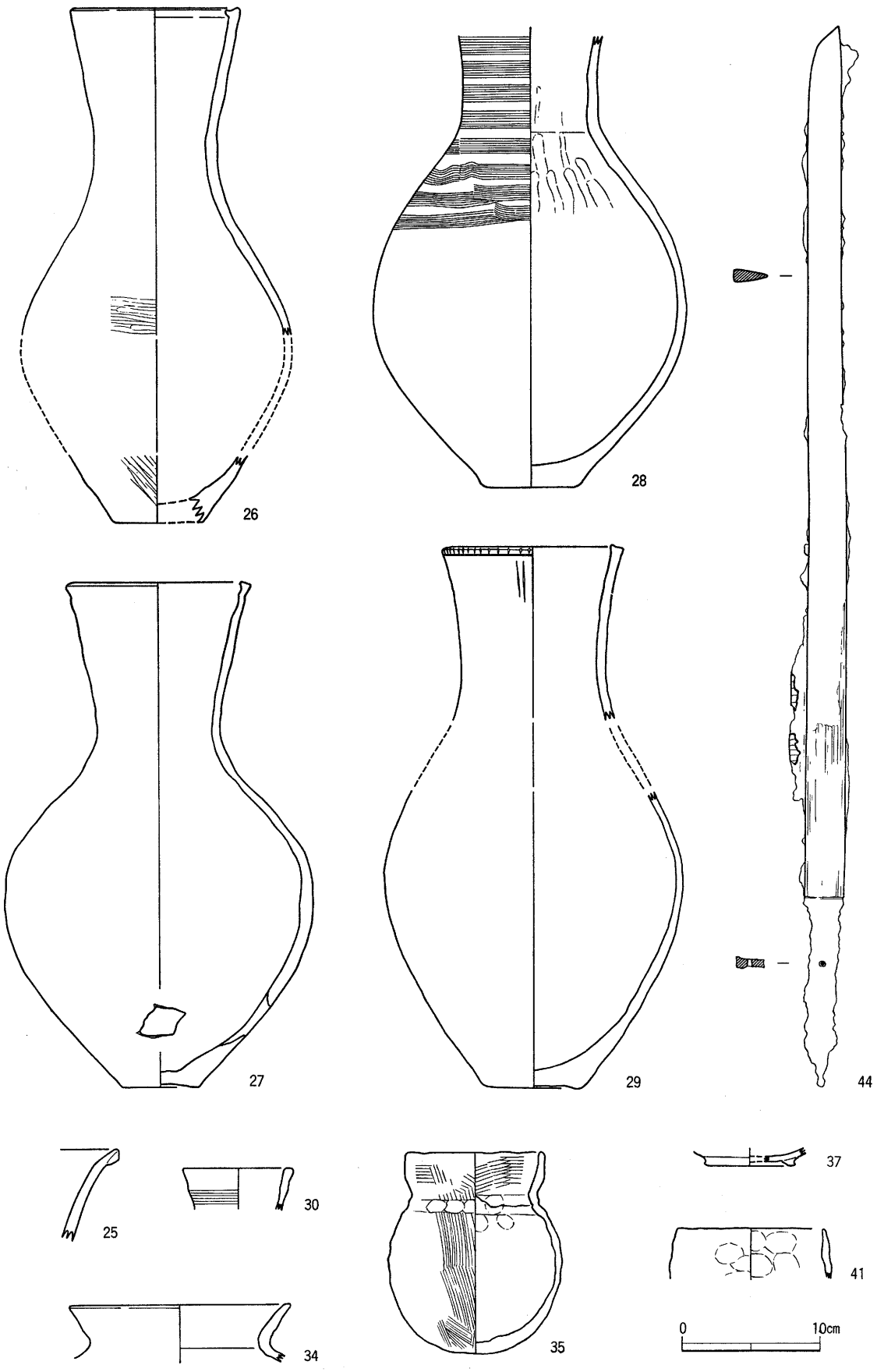
その他の遺物（46）　ハ字状に裾が開く土器である。弥生土器の蓋あるいは高杯の裾部かと考えるが器形不祥。横方向の篦磨きを施すが、器面は平滑でなく弱い起伏が見られる。

(5)　第６区の遺物（第39図）

SK057 の遺物（47）　弥生土器直口壺。中期中葉。体部は面長な球形をもち筒状の口頸部をつける。器面の調整は横あるいは縦方向の篦磨きを施す。体部最大径付近に穿孔が見られる。

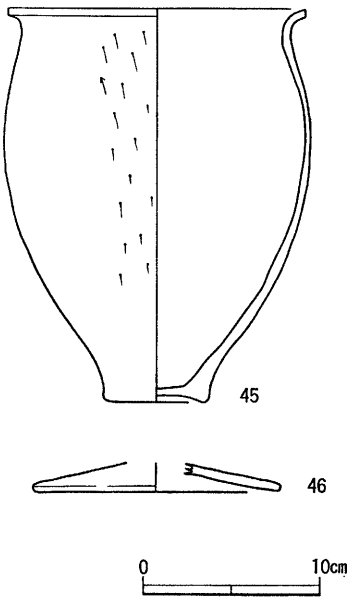
SK066 の遺物（54・55）　54は鉈。全長 49.6cm、刃幅 1.2cm 茎部幅 1.0cm の大型品である。55は鉄片。錆付き原形を認めない。

SZ009 の遺物（50）　弥生土器壺底部。心持ち上げ底を呈する。



第37図　第４区出土遺物実測図

その他の遺物（48・49・51～53）　48は、弥生土器壺。櫛描直線文・波状文を施す。49は、弥生土器甕。丸みをもち外反する口頸部をもつ。51は、弥生土器。突出するやや上げ底の底部をもつ。胎土に結晶片岩を含む。52は、弥生土器壺底部。心持ち上げ底を呈する。胎土に結晶片岩を含む。53は、須恵器杯蓋。天井部と体部を分ける稜線がなく1条の沈線が施され、内面には同心円文がみられる。



第38図　第5区出土遺物実測図

(6)　第7区の遺物（第40・41・42・43図）

SK069 の遺物（125）　弥生土器甕。丸く緩やかに外反する口頸部をもつ。口縁端面は窪み加減で平滑に仕上げる。体部は底部付近から篦削りを施す。底部は僅かな上げ底を呈する。最大径は口縁部にある。

SK077 の遺物（126）　弥生土器甕。中期前葉。直立する体部に丸く短く外反する口頸部をつける。

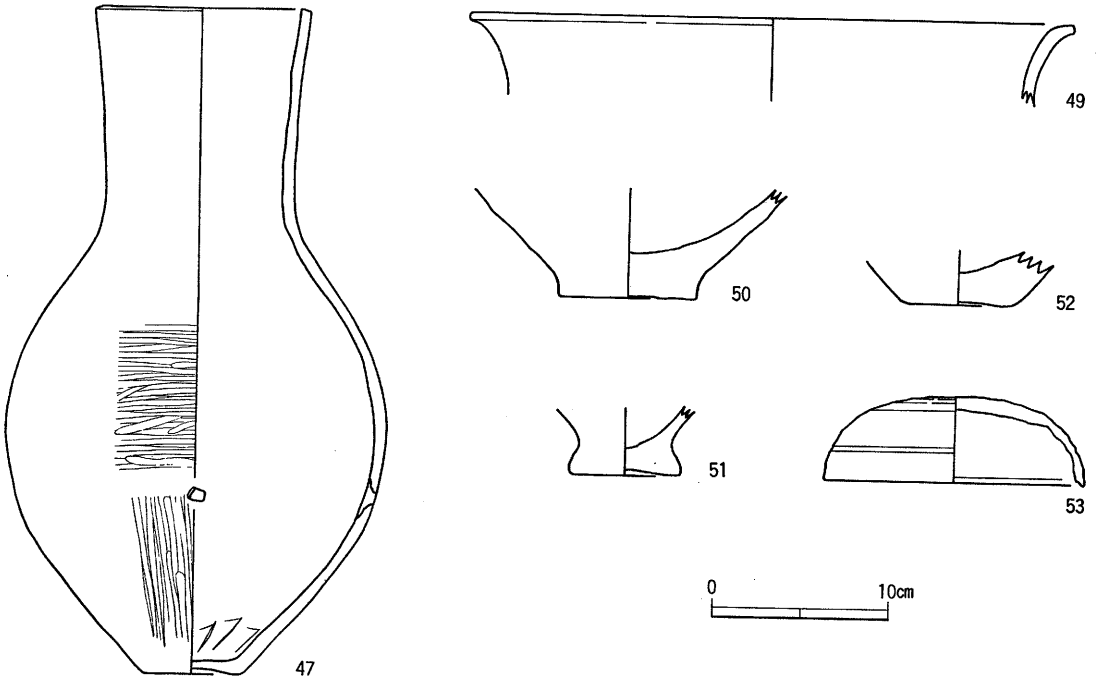
SK080 の遺物（147）　庄内併行期台付鉢。体部の割りにはしっかりした台が付く。

SK081 の遺物（166）　土師器甕。平安時代。口頸部がくの字状に折れ曲がる長胴の甕である。底部は打ち欠かれている。

SK094 の遺物（118）　庄内併行期から布留併行期の壺。粗い叩き目痕をもつ。

SK093 の遺物（117）　弥生土器壺。後期末。分割された叩き目を施す。体部はやや面長な球形を呈する。底部に穿孔がみられる。

SK095 の遺物（59）　弥生土器壺。後期。口縁部が開く直口壺の口頸部である。口縁端面は平滑でや



第39図　第6区出土遺物実測図

や内側に拡張される。

SK104 の遺物（74）　弥生土器壺。後期。底部を失うが球形の体部に緩く外反する口頸部を付ける。口縁端面は平滑に納めやや下方に拡張する。篦磨きの顕著な土器である。

SK107 の遺物（78）　庄内併行期壺。扁平な球形の体部、細い頸部に大きく開く口縁部をもつ。口縁端部は外面が肥厚し、4条の偽凹線を施し、その上から4個の竹管文を縦1列一単位、竹管文を付す貼付文が縦3個2列一単位が等間隔に施される。底部は小さく突出している。

SK108 の遺物（114）　庄内併行期壺底部。突出する底部は中央部が窪み上げ底を呈する。

SK109 の遺物（173）　須恵器小型瓶。平安時代。体部は丸くふくらみ口頸部は外上方に開き、全体的に歪な感がある。口縁端部は外面が肥厚する。底部は回転糸切りを行う。

SK112 の遺物（96・112）　96は、庄内併行期壺口縁部。112は、庄内併行期壺下半部。上げ底の底部。

SK130 の遺物（62・138）　62は、弥生土器壺。中期。頸部に1条の突帯を巡らし刻みを付ける。体部は、細かい刷毛目の調整を施す。138は、弥生甕上半部。中期後葉。口頸部は短く外上方に開く。口縁端部は、上方に肥厚し凹線文を施す。体部は、上半左上がりの叩き目を、下半上がりの篦削りを施す。

SK133 の遺物（140）　庄内併行期甕。外上方に開く口縁部は粗雑なつくりである。体部の叩きは右上がりに施される。

SK154 の遺物（58）　弥生土器壺。中期後葉。口縁部直下に凹線文をもち、その下位に刻目の突帯を施す。肩部に右上がりの叩き目痕が見られる。

SK156 の遺物（85）　庄内併行期壺。逆ハ字状に開く口縁部は、外面に1条の粘土帯を付け二重口縁に偽せている。文様は、外面に山形をした2条の櫛描波状文と粘土帯に竹管文を施した貼付文を付し、内面に山形をした3条の櫛描波状文を付ける。

SD007 の遺物（56・64・131・134・135・136）　56は、弥生土器壺。中期前葉。体部の中心に最大径をもち、直立する口頸部は口縁部にいたりやや外反する。体部下半器壁が厚く鈍重な感を与える。口縁端面は平滑に納める。体部上半から口縁部直下まで5条の櫛描直線文を施す。穿孔の有無は不明。64は、弥生土器広口壺口縁部。口縁端部はやや下方に肥厚する。131・134～136は、弥生土器紀伊形甕。胎土に結晶片岩をもち篦削りを施す。

SD012 の遺物（57）　弥生土器壺。中期中葉。細身の体部に上方が開く筒状の口頸部を付ける。口縁端面は、撫でにより内外に肥厚する。現存部は、全体に粗い縦方向の刷毛目が目立ち、頸部には、2条の突帯文を付す。体部には、広い間隔をもち櫛描波状文が2条施される。

SD019 の遺物（69）　弥生土器壺。頸部から直線的に開きながらのび、口縁部に至って外に折れ曲がる。口縁端面は上下に肥厚し、2条の凹線文を施す。

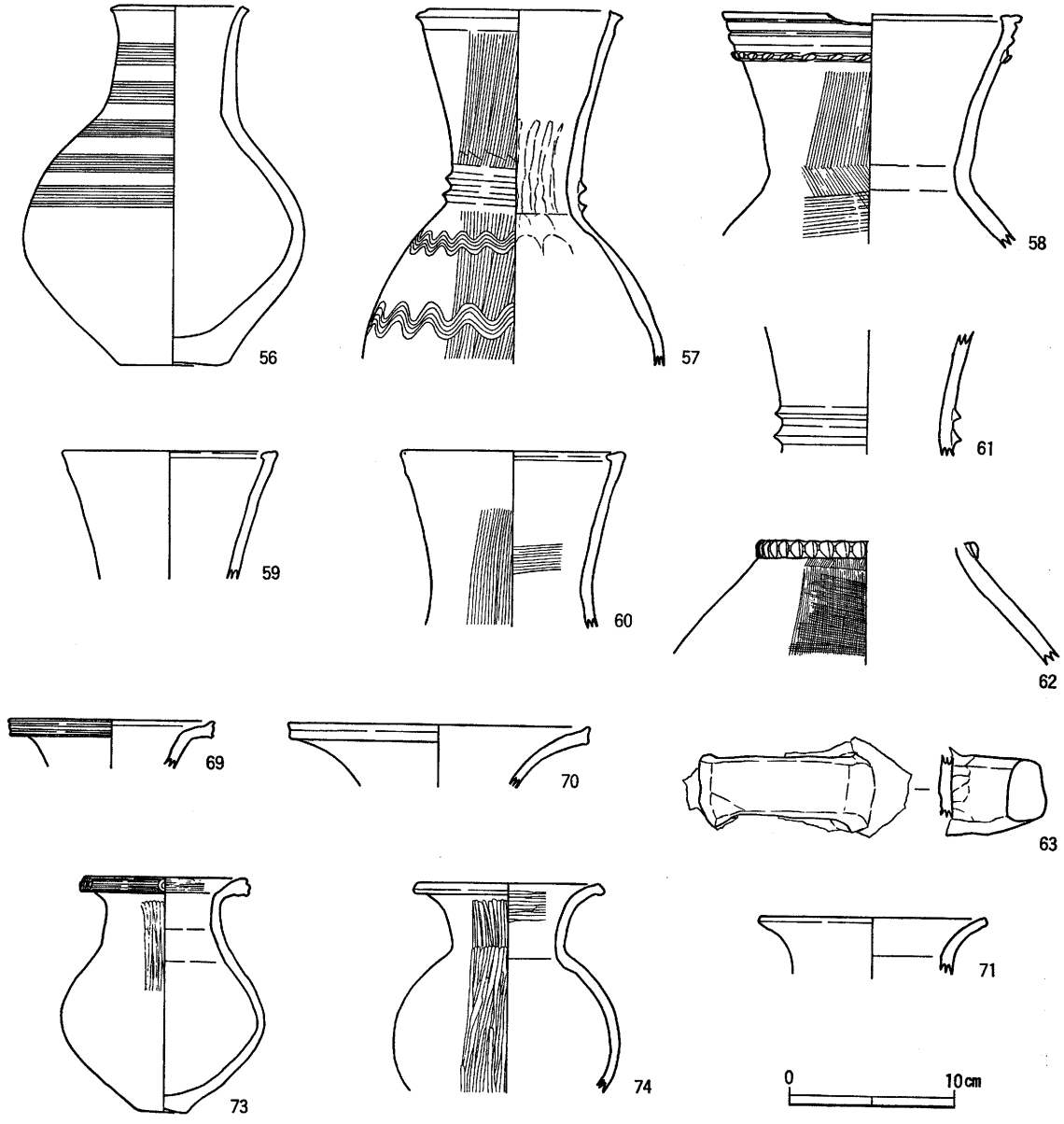
SD018 の遺物（70）　弥生土器壺。頸部から丸く外反する口縁部をもつ。口縁端面は丸く納める。

SZ017 の遺物（76・77・81・89・92・93・95・101・105・110・141・142・150）　76・77は、弥生土器壺。外反する口頸部をもつ。口縁端部は、平滑に納めやや下方に肥厚する。81は、庄内併行期壺。外反する口頸部をもち、口縁端部は平滑で下方に肥厚し、竹管文を施す。外面縦、内面横方向の緻密な篦磨きで器面調整をする。89は、庄内併行期壺。二重口縁の可能性をもつ。外面縦方向の篦磨きを施す。92・93は、庄内併行期壺。頸部から外上方に直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部は丸く納める。95は、

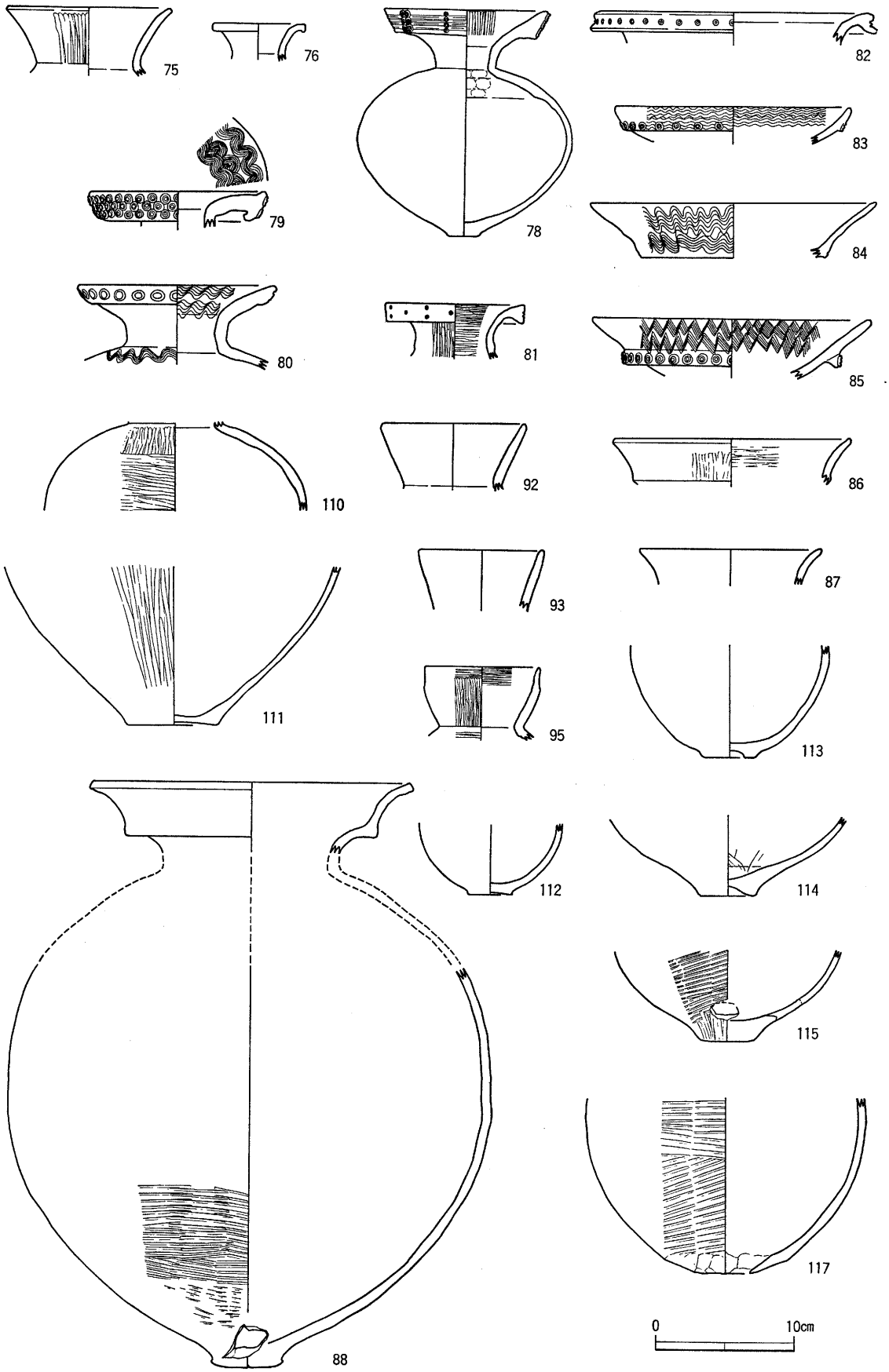
庄内併行期壺。頸部からやや内湾しながら立ち上がる。内外面ともに緻密な篦磨きを施す。101は、弥生土器壺。口縁端部が下方に肥厚する広口壺である。105は、庄内併行期壺。頸部に櫛状工具による連続刺突文を施す。110は、庄内併行期壺。球形の体部に緻密な篦磨きを施す。141・142は、弥生土器甕。頸部から外に折れ曲がる口縁部をもつ。口縁端面は平滑に仕上げる。150は、土師器小型丸底壺。やや扁平な体部をもつ。

SZ018の遺物（94・99）　94は、庄内併行期壺。頸部から外上方に直線的に開く口縁部をもつ。99は、壺。SZ021の遺物（88）　庄内併行期壺。球形の体部に二重口縁をつける。口縁端面は平滑に納める。体部下半に叩き目を施し小さく突出する底部を付ける。

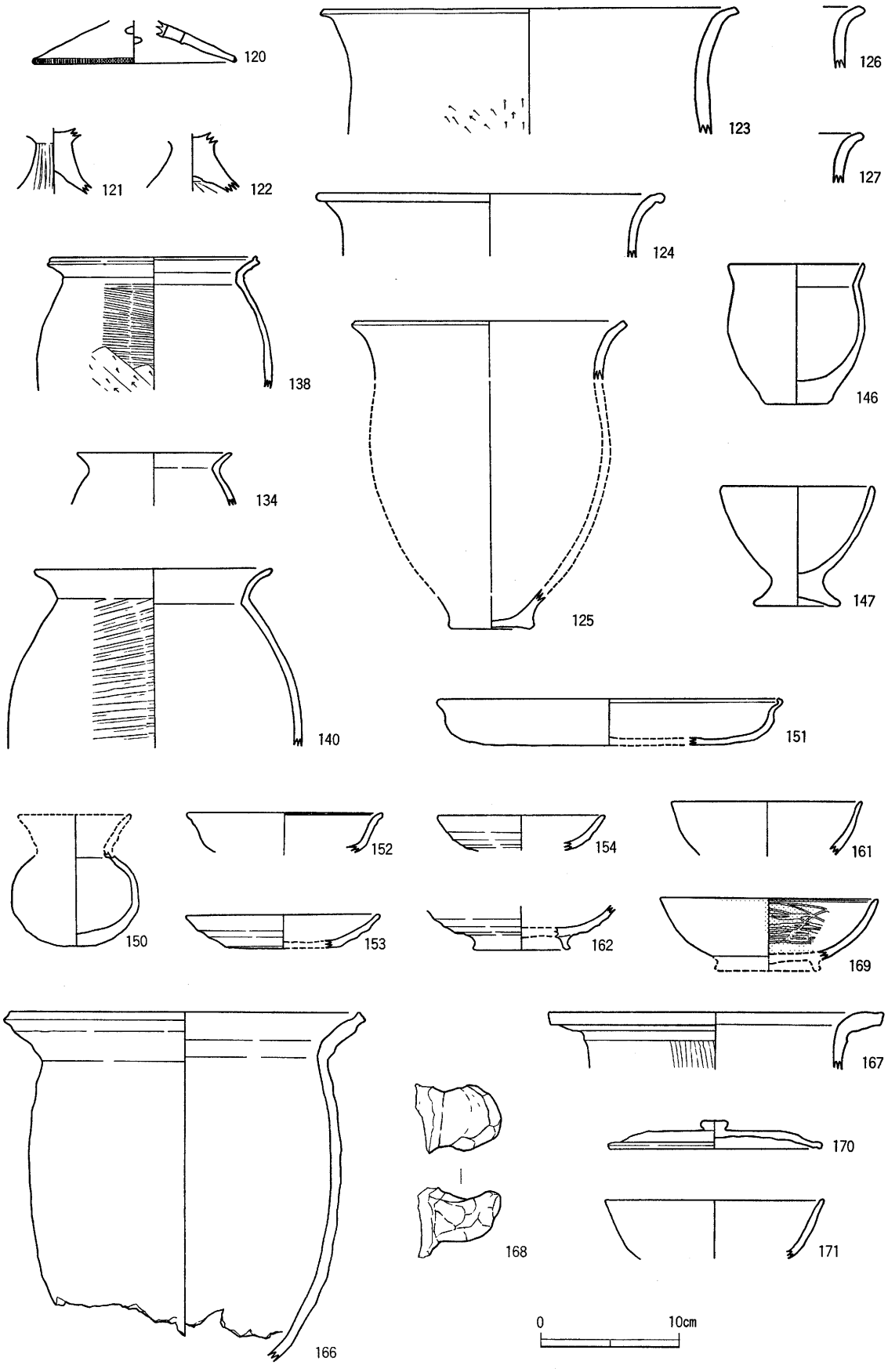
SZ022の遺物（106・107・143・144）　106・107は、庄内併行期壺。体部上半に櫛描直線文、波状文を施す。143は、庄内併行期壺。頸部より外上方に折れ曲がる口縁部をもつ。144は、庄内併行期甕。口縁部は粘土紐の継ぎ目を残す。



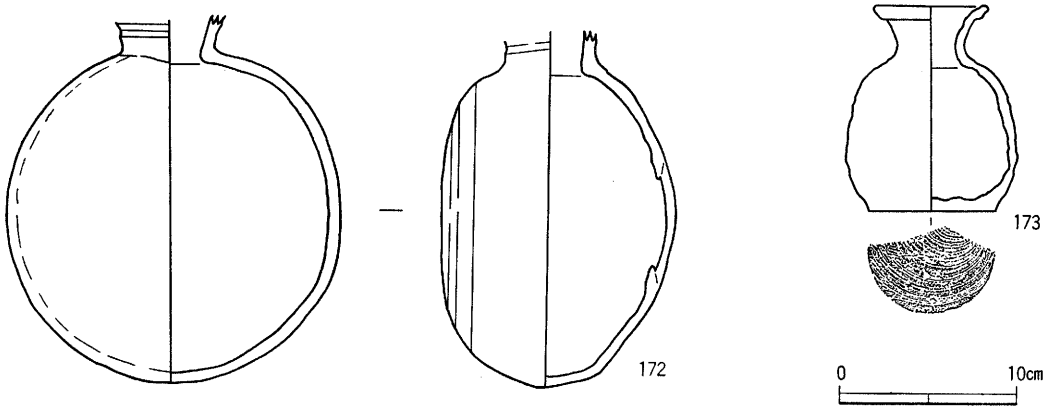
第40図　第７区出土遺物実測図①



第41図　第７区出土遺物実測図②



第42図　第７区出土遺物実測図③



第43図　第７区出土遺物実測図④

SZ024の遺物（84）　庄内併行期壺。二重口縁をもつ。外面に２条の稚拙な櫛描波状文を施す。

その他の遺物（60・61・63・65～68・71～73・75・79・80・82・83・90・91・97・98・102～104・108・109・111～113・115・116・119～124・127～130・132・133・137・139・148・149・151～165・167～172）

60は、弥生土器壺。外反しながら直立する筒状の口頸部をもつ。外面は縦方向の、内面は部分的な刷毛目調整を施す。口縁端部は面をもち内面に肥厚する。61は、弥生土器壺。外反しながら直立する筒状の口頸部。頸部に２条の突帯文を施す。63は、弥生土器水差形土器把手。65は、弥生土器壺。頸部に櫛描直線文を認める。66は、弥生土器壺口縁部。67は、弥生土器壺。突帯文と微かに櫛描文が残る。68は、弥生土器壺。櫛描直線文を認める。71は、弥生土器壺。口縁部は外反し、端部は丸く納める。72は、弥生土器壺。外反しながら開く口縁部をもつ。端部は面をもち僅かに上方に肥厚する。73は、弥生土器壺。体部が張り、太い頸部に外へ折れ曲がった口縁部をもつ。口縁端部は下方に肥厚し、端面に４条の偽凹線を施し、２個一単位の竹管文を５箇所に付す。底部は僅かながら上げ底を呈する。外面縦方向の篦磨きを施す。75は、弥生土器壺。外反し外上方に開く口頸部をもつ。口縁端部は平滑に納める。外面縦方向の篦磨きを施す。79は、庄内併行期壺。径の小さな筒状の頸部は、横方向へ大きく折れ曲がり口縁部を形成する。端部は上下に肥厚し竹管文を付した貼付文を密に施す。内面に櫛描波状文を３条施す。この波状文は、櫛先の一端を中心として回転させている。80は、庄内併行期壺。頸部は短く直立し、口縁部は大きく外へ折れ曲がり、端部が下方に肥厚し面をつくる。端面には竹管文が施される。口縁部内面には２条の櫛描波状文が、肩部現存部に１条の櫛描波状文がそれぞれ施される。82は、弥生土器壺。口縁端部は垂下し竹管文を施す。83は庄内併行期壺。口縁部は内湾しながら外上方に開く。口縁部外面直下に２条の櫛描波状文と竹管文を付した貼付文を施す。内面にも２条の櫛描波状文が見られる。90は、庄内併行期壺。２重口縁と考えられる。口縁部は外反し端部は丸く納める。91は庄内併行期壺。頸部から外反しながら大きく外に開き折れ曲がって上方に立ち上がる。97は庄内併行期壺。やや上方に開き加減で筒状の口頸部を付ける。端部は丸く納める。98は、庄内併行期壺。上方に開く口縁部をもつ。102は、庄内併行期壺。口縁端面に竹管文を付した貼付文を施す。103は庄内併行期壺か。104は庄内併行期鉢。内湾しながら開く体部に短く外上方へ折れる口縁部をもつ。108・109は、庄内併行期壺。２重口縁をもち、櫛描波状文が認められる。111は、弥生土器壺。体部下半に縦方向の篦磨きを施す。底部は僅かな上げ底を呈する。122は、庄内併行期壺。球形の体部に上げ底の底部をもつ。113は庄内併行期壺。球形の体部に、ド

ーナツ状の上げ底を呈する。115は、庄内併行期壺。球形の体部に突出した底部を付ける。体部は右上がりの叩き目を施し底部との境に縦方向の篦磨きが見られる。穿孔が見られる。116は、弥生土器壺あるいは甕の体部である。119は庄内併行期底部。120は庄内併行期高杯。裾端部に刻目を施す。121・122は庄内併行期高杯。123・124・127・128・129・130・132・133・137は、弥生土器甕。ゆるく外反する口縁部をもつ。体部は下からの篦削りを施す。破片によって篦削りの有無を確認できないものもあるが、器形はすべて紀伊形である。128は胎土に結晶片岩を含む。139・148は庄内併行期甕。149は台部。151・152は土師器杯。153・154は土師器皿。155～160は土師器杯。161は土師器椀。内湾しながら立上り口縁端部を丸く納める。口縁部は内外面ともに横撫で調整、体部外面に横方向の篦磨きが施される。162～165土師器椀。167は、土師器甕。口縁部が体部より大きく外反し、端部は平滑に納め面をもつ。体部は粗い縦方向の刷毛目調整が施される。168は土師器把手。169は、黒色土器椀。内外面粗い篦磨きを施す。口縁端部内面に1条の沈線が見られる。170は、須恵器杯蓋。天井部は膨らみがなく平らである。天井部と口縁部の境界は段をなし、端部は短く屈曲する。171は、須恵器杯身。172は、須恵器提瓶。円形の体部をもち頸部直上に凹線が見られる。体部全面の膨らみは少ない。

第4章　考　　察

今回の調査で検出した遺構・遺物の状況は、以上のとおりである。次にこれらを踏まえ、主として遺構に関し若干の考察を試みる。

1　考　　察

今回の調査で検出した全遺構数は、約 3,300m^2 に対し209基に及ぶ。既に述べてきたように、これらの遺構がすべて墓址としての性格に基付くものであるか否か、厳密な意味では疑問視せざるをえない。しかし、個々の遺構の墓址としての当否はともかく、土器あるいは鉄刀などの埋納状況を総体的に見れば墓址群として捉えることは妥当と考える。

墓址群の範囲は、調査の関係上南北方向を不明とするが、砂丘の稜線方向、つまり、東西方向は約700m以上に及ぶものである。勿論、同時期としての広がりを意味するものではないが、広大な面積を有していることは明らかである。墓地としての時間的空間を考えると、弥生時代前期に併行する縄文時代最終末の土器片が出土していながら、遺構として検出できなかった前期は別として、中期以後平安時代中期あるいは後期にかかるまでのあいだ、ほぼ継続的に使用されたと考えられる。

墓址（土壙墓・方形周溝墓）の中で時期が判明するのは、全体の17%にあたる27基であり、残る133基は時期不祥である。27基の内訳は、弥生時代中期が14基、後期から古墳時代初頭にかけてが9基、古墳時代2基、平安時代2基の構成になる。古墳時代以降は、遺構数が激減する傾向をもつ。ただし、このことは次ぎに述べるように、時期により墓域を異にするため、調査範囲での傾向であって、絶対的なものとして吉原遺跡の傾向を示唆するものではない。

墓址群の分布状況は、弥生時代中期にかかる遺構がほぼ全域に広がる傾向を示す。この中で古手に属する遺構はSK069（7区東端）以東に、つまり調査区東半に偏る。後期から古墳時代初頭にかけては、

SK番号	長径×短径×深さ(m)	時　期	遺　　物	軸方位	備　　考
001	1.00以上×0.96　×0.35			N56E	
002	0.40以上×0.68以上×0.29				
003	1.70　×1.20　×0.39		弥生土器片	N54W	
004	1.65　×0.90　×0.47	弥生時代中期	弥生土器壺(2)	N84E	粉砕された土器片混入
005	1.00以上×0.75　×0.28		002と同一片	N14E	
006	1.93　×0.93　×0.19	弥生時代中期	弥生土器壺(8)	N75W	SZ001の上位(遺物はSZ001の可能性)
007	1.70　×1.10以上×0.26			N52E	
008	1.30以上×0.31以上×0.11			N41W	
009	1.66　×0.99　×0.42		弥生土器片	N50E	
010	0.85　×0.48　×0.26			N59W	
011	1.28　×1.00　×0.10			N56W	
012	0.60以上×0.55以上×0.50	弥生時代中期	弥生土器壺(10)	N75E	
013	1.64以上×0.68以上×0.36			N12W	
014	1.68　×1.06　×0.08			N63E	
015	0.72以上×0.58　×0.21				
016	0.86以上×0.80　×0.19		弥生土器片		
017	1.07以上×1.04　×0.07			N27W	
018	1.10以上×1.30　×0.33	弥生時代中期	弥生土器壺(11)有穿孔 弥生土器壺(12)有穿孔	N80E	
019	0.54　×0.40　×0.12			N22E	
020	0.68　×0.54　×0.18			N28W	
021	0.85以上×0.42以上×0.07		弥生土器片	N72W	
022	1.46以上×0.50　×0.14			N53W	
023	1.27　×1.05　×0.20			N17W	
024	1.42　×1.02　×0.45	弥生時代中期	弥生土器壺(29)	N39E	墓壙床面二段掘
025	2.00　×1.32　×(0.21)			N25W	
026	1.93　×1.50　×0.37			N63W	墓壙床面小穴
027	1.18以上×0.92　×(0.28)	弥生時代中期	弥生土器壺(26)	N15W	SK026より古
028	1.66　×1.30　×0.18	弥生時代中期	弥生土器壺(28)	N76W	SD005より古
029	1.82　×0.90以上×(0.27)			N23E	
030	2.34　×1.30　×0.24			N58W	
031	1.56　×0.82　×(0.28)			N51W	
032	3.76　×2.26　×0.44	弥生時代中期	弥生土器壺(28)有穿孔	N56W	大型墓壙　粉砕された土器片
033	0.80　×0.73　×0.17		弥生土器片	N39E	
034	0.60以上×1.26以上×(0.34)		土師器片？		
035	1.40以上×1.05　×(0.36)			N42E	
036	1.30　×1.05　×(0.30)			N17E	SD008より新
037	1.05　×0.85　×(0.30)			N26W	SD008より新
038	2.16　×1.40　×0.43		鉄刀(44)	N62E	古墳時代か
039	1.28　×1.10　×(0.34)			N22W	
040	0.86　×1.23以上×(0.38)			N72W	
041	0.59以上×0.54　×0.14			N04W	
042	2.12以上×1.49以上×0.10			N36E	墓壙床面小穴
043	1.66　×1.36　×0.18			N51E	
044	2.03以上×0.65以上×0.27			N56E	
045	0.90　×0.50以上×(0.12)				
046	1.28以上×1.50　×0.37			N14E	
047	0.76以上×0.80　×0.36			N16E	
048	0.63以上×0.60以上×(0.40)			N23E	
049	2.41以上×1.72　×0.60		弥生土器片・中期	N52W	墓壙床面小穴
050	1.46以上×0.98　×(0.15)		弥生土器片	N33E	
051	1.02　×0.63　×(0.20)			N52W	
052	1.00×　0.61　×(0.18)				

表1　土壙墓一覧表①

SK番号	長径×短径×深さ(m)	時　期	遺　　物	軸方位	備　　考
053	1.20以上×1.38以上×(0.28)		庄内併行期土器片・壺	N78W	
054	0.79　×1.12　×(0.48)			N02W	
055	1.93　×1.56　×0.44	弥生時代中期	弥生土器甕(45)	N66W	
056	1.23　×1.06　×0.40			N78E	墓壙内円礫多い
057	1.42以上×1.28　×0.20	弥生時代中期	弥生土器壺(47)有穿孔	N25E	
058	2.03　×1.76　×0.51			N31W	上位にSZ007
059	0.72　×0.55　×0.17			N18E	
060	1.00以上×0.94　×0.15			N76W	
061	1.32　×1.09　×0.22			N58E	
062	0.60　×0.52　×0.15				
063	1.70　×1.10以上×0.31			N73E	
064	1.10　×0.79　×0.21			N11W	墓壙床面小穴
065	0.60　×0.57　×0.07				
066	1.58以上×1.23　×0.21		鈍(54) 鉄片(55)	N20W	古墳時代か
067	0.88　×0.48　×0.05			N85W	
068	0.30以上×0.64　×(0.18)				
069	1.02以上×0.63　×(0.20)	弥生時代中期	弥生土器甕(125)	N05W	粉砕された土器片
070	1.90　×1.40　×……				
071	1.40　×0.99　×0.293		溶解物	N57W	
072	1.60以上×0.50以上×0.26				
073	1.65　×1.20　×0.15		弥生土器片・壺	N64W	
074	1.00　×1.00　×0.35				
075	2.05　×1.05　×0.20			N69W	
076	2.30　×1.35　×0.20		弥生土器片・壺	N69E	
077	1.80　×1.45　×0.15		弥生土器甕(126)	N90E	
078	1.33以上×0.65以上×0.41				
079	2.18　×1.35　×0.15			N41W	
080	1.90　×1.30　×0.20	庄内併行期	庄内併行期土器台付鉢(147)		SD013の上位(遺物はSD013の可能性)
081	2.20　×1.35　×0.25	平安時代	土師器甕(166)	N68W	土器粉砕　底部人為的に打ち欠く
082	1.70　×1.40　×0.40		溶解物		
083	0.90　×0.87　×0.18				
084	0.80以上×1.01　×……			N23E	
085	0.86　×0.73　×0.22				
086	2.32　×1.22　×0.10			N60W	
087	1.25以上×0.98　×0.14			N45E	
088	1.03　×0.99　×0.15				
089	1.75以上×0.90以上×0.50				
090	2.24以上×1.10以上×0.15				
091	3.05　×2.42　×0.49		庄内併行期土器片・壺 釘	N13W	大型墓壙
092	1.48　×0.96　×0.21			N70E	
093	2.26　×0.96以上×0.40	庄内併行期	庄内併行期土器壺(111)有穿孔		
094	1.75以上×1.03以上×0.35		庄内併行期土器壺(118)		
095	2.55以上×1.92　×0.36	弥生時代中期	弥生土器壺(59)	N33E	
096	1.07　×1.92以上×0.18				SK095より新
097	0.60　×0.54　×0.14		土師器片・椀・平安時代		SK096より新
098	2.00以上×1.77　×0.30		庄内併行期土器片・壺	N30E	墓壙床面円形掘り込み
099	0.85以上×0.65以上×0.12				
100	1.85以上×0.95　×0.21			N75E	
101	1.90以上×1.05以上×0.31				
102	2.53　×1.15以上×0.57				
103	0.87　×0.78　×0.13				

表2　土壙墓一覧表②

SK番号	長径×短径×深さ(m)	時期	遺物	軸方位	備考
104	1.55 ×1.45 ×0.42	弥生時代後期	弥生土器・壺(74)	N40E	
105	2.23 ×1.30 ×0.25			N46W	
106	1.49 ×0.56以上×0.24		庄内併行期土器片・壺		
107	1.10以上×1.26 ×0.147	庄内併行期	庄内併行期土器壺(78)	N23E	
108	3.23 ×1.72 ×0.17	庄内併行期	庄内併行期土器壺(114)	N48E	大型墓壙
109	0.82 ×0.79 ×0.325	平安時代	須恵器瓶(173) 釘，その他・炭・骨粉		火葬墓の可能性 SK108の上位
110	1.86 ×1.02 ×(0.24)		弥生土器片・甕		
111	1.40以上×1.15 ×0.19				
112	1.92 ×1.46 ×0.32	庄内併行期	庄内併行期土器壺(96・112)	N51E	SZ020の上位
113	2.74 ×2.27 ×0.44以上		庄内併行期土器片・壺	N75W	SZ020の上位
114	1.50 ×0.76以上×0.658				
115	1.94 ×1.50 ×0.344			N39W	
116	2.41以上×1.72 ×0.432			N21E	
117	2.26 ×1.32 ×0.507			N75W	
118	1.07 ×1.05 ×0.524				
119	0.66以上×0.90以上×0.429				
120	1.10以上×1.06 ×0.479			N37W	
121	1.84 ×1.10以上×0.17				
122	0.70 ×0.65以上×0.24				
123	0.70以上×0.90以上×0.105				
124	0.88以上×1.26以上×0.08				
125	1.79 ×1.18 ×0.239			N77E	
126	1.34 ×0.95 ×0.217			N06W	
127	1.77以上×0.87 ×0.15			N21E	
128	1.76 ×1.53 ×0.171				
129	1.62以上×0.95以上×0.127				
130	2.32 ×1.16 ×0.162	弥生時代中期	弥生土器甕(138) 弥生土器壺(62)		
131	1.69 ×1.08 ×0.096			N52W	
132	2.20以上×1.31 ×0.303			N69E	
133	1.87 ×1.50以上×0.32	庄内併行期	庄内併行期土器甕(140)	N63W	SK132より新
134	2.08 ×1.09 ×0.313		140の破片	N33W	SK133より新
135	1.28以上×1.20 ×0.269				
136	1.65以上×1.15以上×0.11				
137	3.25 ×2.35 ×0.218		土師器片・椀・平安時代	N61E	大型墓壙
138	1.63以上×1.09 ×0.25			N11E	
139	2.22 ×1.65 ×0.424		土師器片・椀・平安時代	N19W	
140	2.58 ×1.27 ×0.188				
141	1.45 ×1.11 ×0.125			N30W	
142	0.90 ×0.84 ×0.20				
143	1.97 ×1.15以上×0.323		庄内併行期土器片・壺	N56W	
144	0.83以上×0.74 ×0.174			N63W	
145	0.71 ×0.57 ×0.193				
146	1.60 ×1.32 ×0.312			N47E	
147	1.63 ×1.10 ×0.194			N27W	
148	1.29 ×0.82 ×0.114			N00E	
149	1.62 ×1.04 ×0.251			N29E	
150	1.20以上×1.48 ×0.145			N28E	
151	1.77以上×1.70 ×0.303			N38E	墓壙床面二段掘り
152	0.86 ×0.82 ×0.175				
153	1.15以上×1.25 ×0.181			N45E	
154	0.90以上×0.78以上×0.08	弥生時代中期	弥生土器壺(58)		SD020より古
155	0.92 ×0.90 ×0.255		溶解物・木炭		SZ025より新
156	1.30以上×1.48 ×0.121		庄内併行期土器壺(85)	N49E	

表3 土壙墓一覧表⑧

4区西端から7区に限られる。古墳時代後期から平安時代にかけては、各区に遺物が少量認められるが、7区 SD011 と 012 に挟まれた地帯から SX004 付近にかけてが比較的多い（SK081・109）。このようにみると、背景に集落立地の変遷があるものか、時期により墓地の範囲に差異が見られる。

個々の墓壙を平面的に観察すれば、基本形を楕円形とし、長方形、円形を呈するものが見られる。長軸の断面を見れば、舟底状を呈するものが多い。楕円形は、より楕円形に近いものから太身あるいは細身の楕円形を呈するものが見られる。また、隅丸を呈した長方形が見られるが、砂丘地の墓壙の確認が困難なため、楕円形との判別がつきにくく楕円形に含めた。それらは計117基に及ぶ。全体の75パーセントである。円形は、直径 0.5m 以上の掘り込みをもつものを土壙墓と認めたため、必ずしもすべてが土壙墓とは限らない要素をもっている。片山遺跡[註6]では、径1m前後の円形墓壙が見られ、床面中央部に完形の土器を伴う例がある。また、墓壙の床面を段掘りした「足元掘り込[註7]」、あるいは墓壙内床面に小穴を穿ったものも見られる。これらの特殊な墓壙は、県下では小穴を穿つものが船岡山遺跡[註8]などに見られるが、「足元掘り込」は類例がない。

墓壙の規模は、当時の掘り込み面が既に失われ、数値にばらつきが見られるが、長軸の全長 1〜2m の規模をもつものが多数を占める。しかし、中には大型の墓壙が見られる。墓壙の平均全長が約1.89mであるのに対して、それらは 3.2m 以上を測り、4基認められる。中でも SK032 は、3.76m の規模をもつ。しかし、大型の SK032 と通例規模の SK069 は、規模の違いのみで双方ともに墓壙埋土に粉砕した土器片が混入している事実は、大型の墓壙をもつ遺構が他に比し、特別な意味合いをもつか否かは明らかにはできない。大型墓壙の類例として、南部町・片山遺跡B地点[註9] SK-14（4世紀初頭・長軸 4.35 m）が見られる。

これらの土壙墓は、棺の有無の別が考えられるが今回の調査では識別は不可能であった。

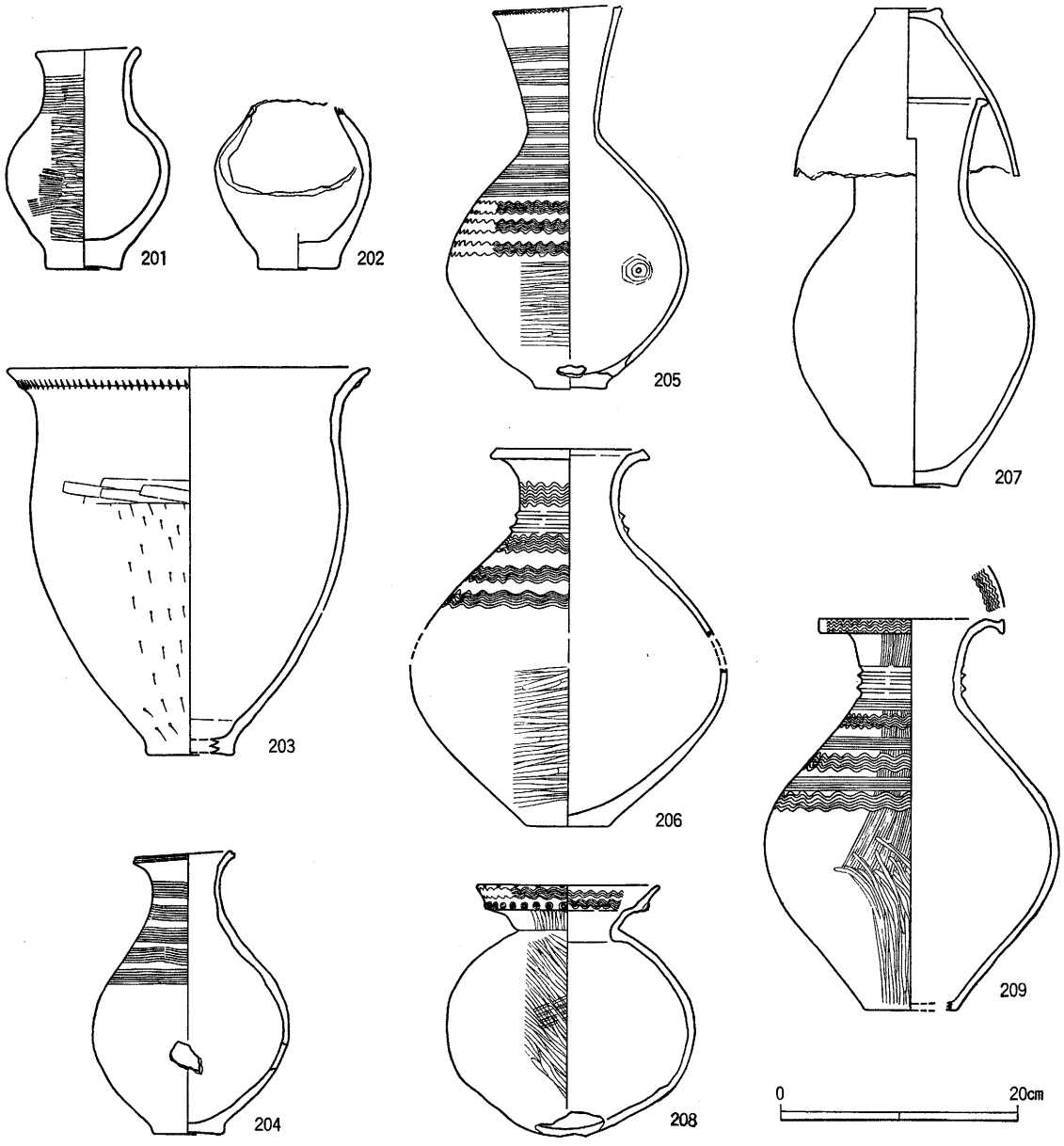
和歌山県下の方形周溝墓は現在、和歌山・菖蒲谷地区[註10]の方形周溝墓1（畿内第Ⅲ様式古）を最古とし、約45基ほど検出されている。日高平野でも、御坊市の富安Ⅰ・蛭田坪・尾ノ崎遺跡を合わせて24基[註11]の方形周溝墓が確認されている。本遺跡の SX001 は、遺構の全容が明らかではないが、周溝部出土の遺物から中期前葉の時期が与えられ県下最古のグループに属するものである。和歌山県の方形周溝墓の出現は、中期後葉まで下がるとする説もあるが、既にそれを遡る遺構が2基確認され、今後検出数が増加する傾向にあることは必至であると考えられる。

墓壙内に供献・副葬された遺物は、土器と鉄製の武器・工具類に分けられる。遺物は、時期により差が見られ、弥生時代から庄内期にかけては壺・甕で、古墳時代には提瓶あるいは鉄刀・鉇などが見られる。平安時代にはいると墓壙からの明確な出土ではないが、土師器の椀が見られるようになる。完形のまま埋納する場合、体部に穿孔を施す場合、おそらく人為的に粉砕し墓壙内にほり込む場合などがある。これらの場合，葬送儀礼の相違に起因するものか、あるいは、別の要素を含んでいるのかは直ちに明らかにできない。遺物は、通常墓壙の壁際に置かれることが多く、SK018 のように2個体が墓壙内に置かれることがあるが、通例は1個体を供献の基本としている。このように、本遺跡の墓は、土器・武器・工具の供献・副葬の有無が見られる、鉄刀を副葬した SK038 なども他の土壙墓との差違は見られず、全体的に弥生時代とそれ以降の土壙墓にはあまり変化が見られない。唯一方形周溝墓に差を見出すのみである。

遺跡名	所在地	種類	立地	遺物	時期	報告書・文献
堂本	橋本市	甕棺墓	平地	甕・壺（櫛描波状文を施す）	弥生時代 中期	『和歌山県史（考古資料）』和歌山県・1983
船岡山	かつらぎ町	土壙墓				『船岡山遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会・1986
吉田	岩出町	方形周溝墓 溝状遺構 壺棺墓	平地	壺・水差・他 壺 壺・鉢	弥生時代中期 弥生時代中期 弥生時代中期	『吉田遺跡第2次調査概報』和歌山県教育委員会・1971
宇田森	和歌山市	土壙墓	平地	弥生土器片	弥生時代後期？	『和歌山市宇田森遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会・1968
楠見	和歌山市	——		壺	弥生時代前期	
鳴神V	和歌山市	方形周溝墓 円墳？ 円形周溝墓	平地	土師器・陶質土器・韓式系土器・須恵器（壺・甕）・土師器・馬歯土師器	5C中葉 5C中葉 庄内期～布留期	『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会・1974
太田黒田	和歌山市	土壙墓	平地		弥生時代～古墳時代	『和歌山県史（考古資料）』和歌山県・1983
木広町	和歌山市	——	砂丘	壺	弥生時代中期	「和歌山市木広町出土の弥生式土器」『熊野路考古4』1964
秋月	和歌山市	方形周溝墓	平地	庄内布留式土器須恵器	庄内期～5C	『秋月遺跡発掘調査現地説明会資料』和歌山県教育委員会・1985・1986
信愛	和歌山市	方形周溝墓 土壙墓 方形台状墓 壺棺墓	丘陵 尾根 	弥生土器 壺 壺	弥生時代中期 弥生時代中期 	『(財)和歌山県文化財センター年報』(財)和歌山県文化財センター・1988
岡村	海南市	——	平地	壺	弥生時代中期	『岡村遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会・1983
亀川	海南市	方形周溝墓 土壙墓	平地	壺・甕・鉢 壺・甕・把手付土器	弥生時代中～後期	『亀川遺跡発掘調査概報』海南市教育委員会・1973 『亀川遺跡V』海南市教育委員会・1985
椒浜	有田市	箱式石棺	砂丘			『有田市誌』有田市・1974
地ノ島	有田市	箱式石棺	島		弥生時代末～古墳時代	『有田市誌』有田市・1974
里	由良町	土壙墓	砂丘	弥生土器，須恵器	弥生時代前期，5C後	『和歌山県文化財学術調査報告第一冊』和歌山県教育委員会・1966
富安I	御坊市	方形周溝墓	平地	把手付壺・把手付台付鉢・壺	弥生時代中期	『富安I遺跡発掘調査概報』御坊市教育委員会・1982
蛭田坪	御坊市	方形周溝墓	平地		弥生時代中期	『富安I遺跡他発掘調査概報』御坊市教育委員会・1985
尾ノ崎	御坊市	方形周溝墓	段丘	18基	庄内期～布留期	『尾ノ崎遺跡』御坊市教育委員会・1981
吉原	美浜町	方形周溝墓 土壙墓	砂丘	4基・壺・甕等 156基・壺・甕等	弥生時代中期～庄内期	『吉原遺跡』(財)和歌山県文化財センター・1988 『(財)和歌山県文化財センター年報』(財)和歌山県文化財センター・1988 『(財)和歌山県文化財センター年報』(財)和歌山県文化財センター・1989
片山	南部町	方形周溝墓 土壙墓	砂丘	4基 壺・甕・鉢・勾玉・管玉等 122基 壺・甕・高杯・台付き鉢・複合土器等	庄内期 弥生前期～中世	『片山遺跡A地点発掘調査概報』南部町教育委員会・1978 『片山遺跡B地点発掘調査概報』和歌山県教育委員会・1979 『片山遺跡C・D地点発掘調査概報』和歌山県教育委員会・1981 『片山遺跡G地点発掘調査概報』和歌山県教育委員会・1983
片町	南部町	——	砂丘	壺・器台	庄内期	
高見	南部町	——	砂丘	壺・水差（含む関東搬入品）	弥生時代中期	『紀伊日高郡南部町北道出土の弥生式土器』『熊野路考古2』・1962
古目良岩陰	田辺市	——	砂丘	人骨・庄内式土器・青磁等	庄内期～中世	「古目良遺跡」『田辺文化財(8号)』田辺市教育委員会・1964
立戸岩陰	田辺市	土壙墓	岩陰	銅環1対	6C末～7C初	『立戸岩陰遺跡発掘調査概要』田辺市教育委員会・帝塚山大学・1985
宮路通I	田辺市	——	砂丘	壺	弥生時代中期	『田辺文化財(10号)』田辺市教育委員会・1966
宮路通II	田辺市	——	砂丘	須恵器	5C後～6C	『田辺文化財(6号)』田辺市教育委員会・1962
下屋敷I	田辺市	——	砂丘	弥生土器・須恵器		
下屋敷II	田辺市	——	砂丘	土師器		
下屋敷III	田辺市	——	砂丘	須恵器(杯)		
下屋敷IV	田辺市	——	砂丘	須恵器(杯)		
下屋敷V	田辺市	——	砂丘	須恵器(杯)		
小関通	田辺市	——	砂丘	須恵器・土師器	6C前半	『田辺文化財(5号)』田辺市教育委員会・1961
新屋敷	田辺市	——	砂丘	須恵器・土師器		
神田	田辺市	—— —— ——	砂丘 砂丘 砂丘	弥生土器(壺) 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)・銅鏃	弥生時代中期 弥生時代中期 弥生時代中期	『田辺文化財(9号)』田辺市教育委員会・1965 『田辺文化財(27号)』田辺市教育委員会・1984 田辺市立歴史民俗資料館保管
中屋敷I	田辺市	——	砂丘	須恵器		
中屋敷II	田辺市	——	砂丘	土師器		
新庄	田辺市	箱式石棺	砂丘	弥生土器片・女性人骨2体	弥生時代～古墳時代	「和歌山県の地名」『日本歴史地名体系31』平凡社・1983
磯間岩陰	田辺市	岩陰墓	岩陰	須恵器・土師器・鹿角製品・鉄器他	古墳時代	『磯間岩陰遺跡調査概報』田辺市教育委員会・1972
綱不知岩陰	白浜町	岩陰墓	岩陰	須恵器・土師器・鉄器・人骨	古墳時代	『和歌山県遺跡地名表』和歌山県教育委員会・1983
瀬戸	白浜町	土壙墓 配石墓	砂丘	女性人骨 深鉢(縄文晩期末)，壺(弥生土器)	縄文時代晩期 弥生時代前期	『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学構内遺跡調査会・1978 『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学埋蔵文化財研究センター・1982

表4　県内弥生・古墳時代墓址一覧表

本遺跡を砂丘上の墓址群と考えた場合、被葬者たちの生活基盤をどこに求めたらよいであろうか。現在、周辺を見渡すと本砂丘上には5箇所の遺跡[註12]が認められる。このうち弥生時代の散布地が1箇所、古墳古墳群が1箇所、古墳時代以降の散布地が2箇所、平安時代後期の経塚跡が1箇所である。弥生時代の散布地は、北方 400～500m にある古砂丘上に位置するもので最も近い遺跡といえよう。現在砂丘墓が明らかにされている片山遺跡（第44図203～208）あるいは田辺市神田遺跡[註13]（第44図209）を中心とした墓址群は、砂丘部からは集落跡の存在が確認されておらず、遺物の出土・散布状況から砂丘部では見出しにくく、むしろ、砂丘地以外に求められる傾向にあり、したがって、本砂丘も周辺遺跡の実態が判明していない現状の中では、古砂丘上の遺跡が本遺跡に絡んだ集落として推考することは、現時点では控えたい。



第44図　砂丘墓址出土土器実測図
由良町里遺跡 201・202　南部町片山遺跡 203～208　田辺市神田遺跡 209

紀南地方の砂丘墓址を見ると、壺棺（第44図201・202）が出土した由良町の里遺跡[註14]は別として、片山遺跡・神田遺跡は、300m～数百mの広がりをもち、いたるところの砂地から遺物が出土する傾向がある。調査以外で出土したものも含め、出土地は包含層を伴わず、かつ穿孔を施された壺などが単独的に出土し明らかに墓址として認めることができるものである。いずれにしても、紀南地方の遺跡の在り方を考慮すれば、あまりにも広大な範囲を墓地としているようである。これは、砂丘地帯が利用価値の少ない有閑地であることに起因するものであろうか。あるいは、海を観念的な対象物とした形而上的な意味合いをもつのか、現状の中では直ぐ様明らかにすることはできない。

第5章　総　　括

発掘調査の成果と若干の考察を述べてみた。あらためて次に周辺遺跡あるいは関連遺跡にも含めて要点を列記する。

1　吉原遺跡は、日高平野をひかえた海岸砂丘に位置する。墓地が営まれたのは、砂丘の稜線よりやや後背側に面し、稜線に対し帯状に平行している。帯状の長軸は少なくとも全長700m以上に達する。

2　調査区内で検出した遺構は、土壙墓・方形周溝墓・溝状遺構・小穴・その他不明遺構などである。このうち、時期の明確なものは、弥生時代中期前葉・中葉・後期・古墳時代前期・奈良時代・平安時代などの土壙墓、弥生時代中期前葉・庄内期などの方形周溝墓である。したがって墓地が営まれた時期は、土壙墓を中心に考えると、弥生時代から平安時代までの長期間にわたる。

3　長期間にわたる墓址群は、概略すれば、時期により埋葬場所を異にする傾向をもつ。すなわち、弥生時代中期前葉は東半域に，中期中葉は全域、後期以降は西半域である。子細に見れば、小単位のグループも見られるようであるが、今回の調査地域の幅を考慮すれば、詳細な検討は避けておきたい。

4　土壙墓数156基は、片山遺跡の122基を大きく上回り県下最多の検出数である。これら156基の墓壙内には、棺の痕跡が皆無であった。このことは、砂丘墓の検出が困難であるためか、あるいは、本来的に棺をもたなかったものか判断の資料をもたない。

5　方形周溝墓4基のうち1基は、弥生時代中期に属し、県下最古のグループに位置付けられる。

6　出土遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器・瓦器・中世陶磁器の土器類に加え、鉄刀・鉇などの鉄製品も出土している。この中で土壙墓から出土するものは、弥生土器が主で土師器・須恵器がそれにつぎ、鉄刀・鉇などの武器・工具類も見られる。

葬送儀礼に異なりをもつものか、土器の中には、完形で埋納されるもの、土器に穿孔を施すもの、粉砕して墓壙内に流し込むものなどがある。

7　出土遺物の中で、縄文時代晩期最終末の土器片が見られる。細片ではあるが深鉢の口縁部である。この特徴ある土器は、片山・瀬戸・市ノ瀬各遺跡に出土しており、いずれも弥生時代前期の土器を伴うことが明らかにされている。したがって、本遺跡も弥生時代前期に遡る墓址が存在する可能性をうかがわせるものである。

8　弥生土器の中で結晶片岩を胎土に混入した土器は、紀北方面からの搬入品を意味するものである。

9　集落に関しては、本砂丘上にも数箇所の遺跡が知られているが、これらの遺跡の中から被葬者た

ちの生活立地が求められるか、現在のところ不明としなければならない。

以上のように、吉原遺跡は、砂丘上に位置した墓址として県下有数の遺跡であり、種々の問題点をはらんだ遺跡といえる。しかしながら、吉原遺跡の調査は緒についたばかりである。今回の調査は、本遺跡を東西にトレンチ掘りした状況に近いものである。それ故、これらの資料をして吉原遺跡のすべてを語ることはできない。したがって、今後に持ち越された課題は大きく、より詳細な調査研究が待たれるところである。

【註・参考文献】

註1 『吉原遺跡』(財) 和歌山県文化財センター 1988.3

註2 『(財) 和歌山県文化財センター年報』(財) 和歌山県文化財センター 1988

註3 『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』和歌山県教育委員会 1989.3

註4 『道成寺』道成寺発掘調査報告1 天音山道成寺 1978.12
『道成寺』昭和54年度発掘調査報告書 川辺町教育委員会 1980.3

註5 『吉原遺跡埋蔵文化財発掘調査に伴う自然科学分析報告』1989

註6 『片山遺跡A地点発掘調査概報』南部町教育委員会 1978.3
「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部付属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会 1977
「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学構内遺跡調査会 1978
「和歌山県瀬戸遺跡の試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学埋蔵文化財研究センター 1980.3
「和歌山県瀬戸遺跡の第4・5次発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学埋蔵文化財研究センター 1984
『市ノ瀬遺跡発掘調査概報』(社) 和歌山県文化財研究会 1987.3
『弥生前期地域論』(和歌山県紀南・家根祥多) 帝塚山大学考古学研究所 1984

註7 『弥生文化の研究8』(土壙墓・藤田 等) 雄山閣 1987.4

註8 『船岡山遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会 1986

註9 『片山遺跡B地点発掘調査概報』和歌山県教育委員会 1979

註10 『(財) 和歌山県文化財センター年報』(財) 和歌山県文化財センター 1988

註11 『富安Ⅰ遺跡発掘調査概報』御坊市教育委員会 1982
『富安Ⅰ遺跡他発掘調査概報』御坊市教育委員会 1985
『尾ノ崎遺跡』御坊市教育委員会 1981
『美浜町史』(史料編・考古資料) 1984.10

註12 「田辺市神田出土の弥生式土器について」伊勢田進『田辺文化財(9号)』田辺市教育委員会 1965
「神田Ⅱ遺跡発掘調査報告」『田辺文化財(27号)』田辺市教育委員会 1984

註13 「日高郡由良町里出土の須恵器と弥生式土器」巽三郎・小賀直樹『和歌山県文化財学術調査報告 第一冊』和歌山県教育委員会 1966

『続日高郡誌』(下巻) 日高郡町村会 1975.3

『御坊市史』(第3巻史料編Ⅰ) 御坊市 1981

『和歌山県史』(考古資料) 和歌山県 1983.2

『和歌山県の地名』日本歴史地名大系第31巻 平凡社 1983.2

『美浜町史』(上巻) 美浜町 1988.3

『日本農耕社会の成立過程』都出比呂志 岩波書店 1989.2

図　　版

1　遺跡遠景
（北西から）

2　調査区近景
（南東から）

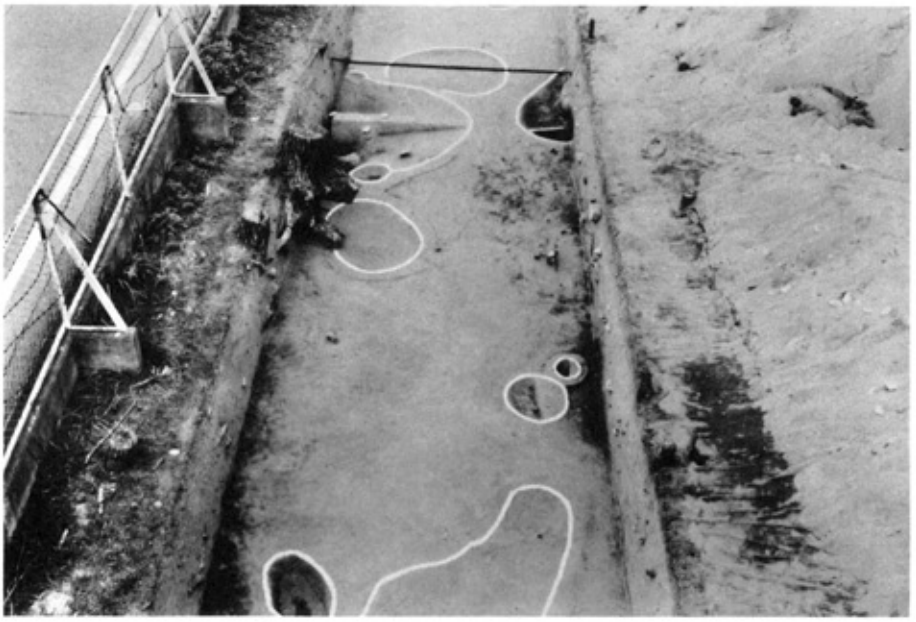
3　調査区近景
（北西から）

4　第1区全景
（東から）

1　第３区南端部
（北から）

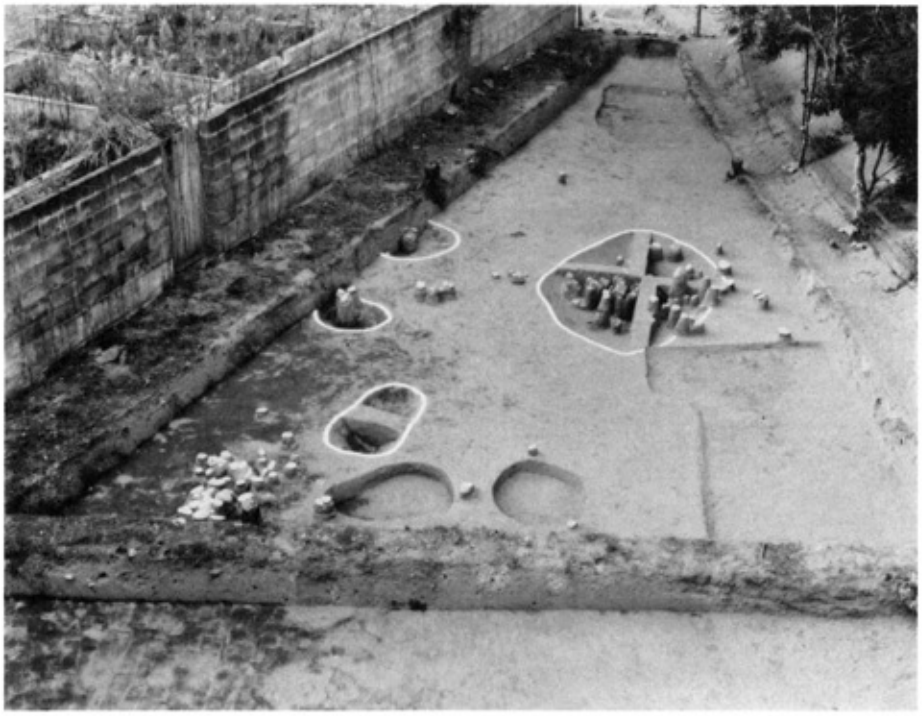
2　第３区
中央部以北
（南から）

3　第３区中央部
（南から）



1　第４区東半部
（西から）

2　第４区中央部
（東から）



3　第４区西端部
（西から）

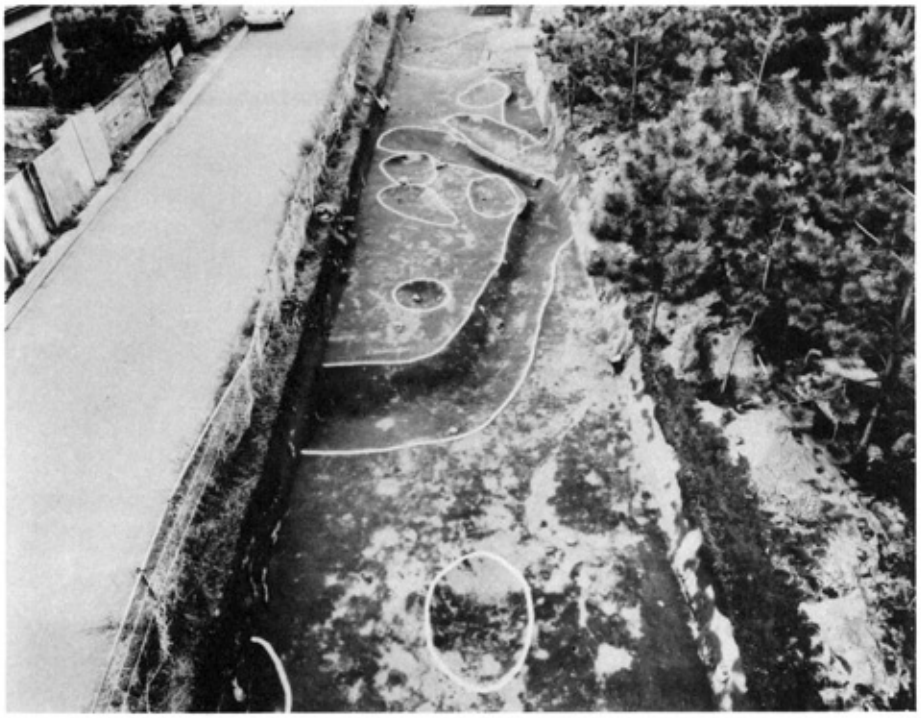
1　第5区全景
（東から）

2　第6区東半部
（東から）

3　第6区西半部
（西から）

1　第７区
ＳＸ―001付近
（北西から）

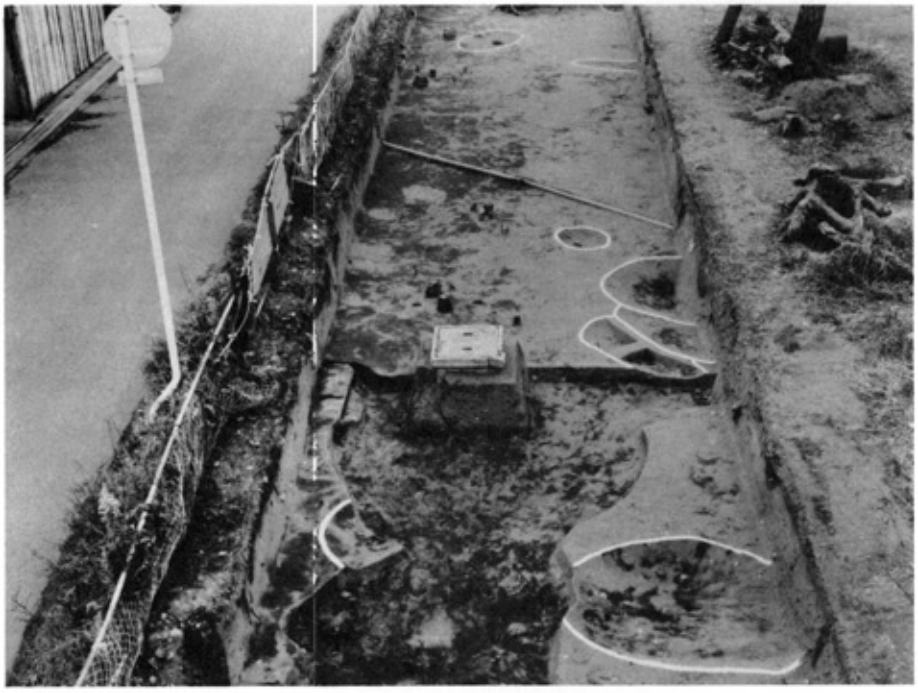
2　第７区
ＳＸ―002付近
（南東から）



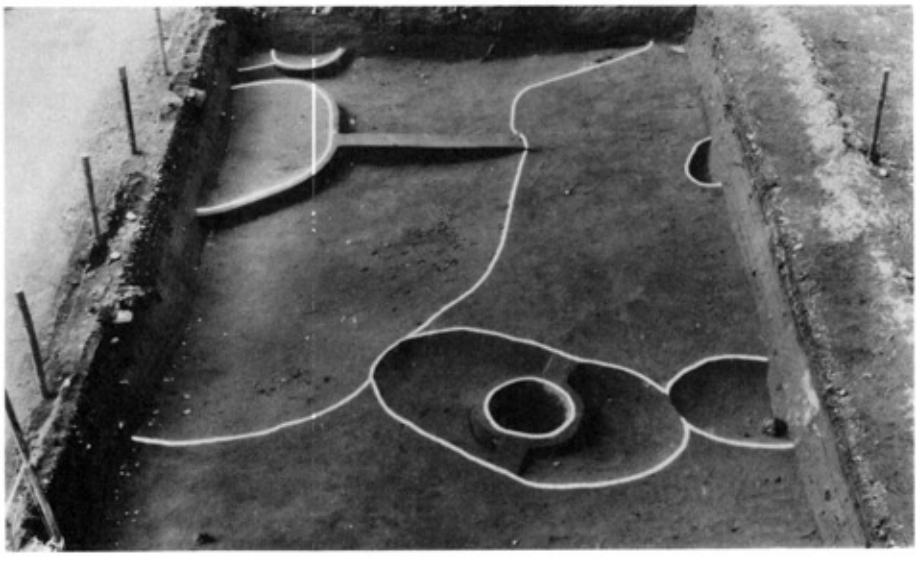
3　第７区
ＳＫ―081付近
（北西から）

1　第7区
ＳＫ－086付近
（南東から）

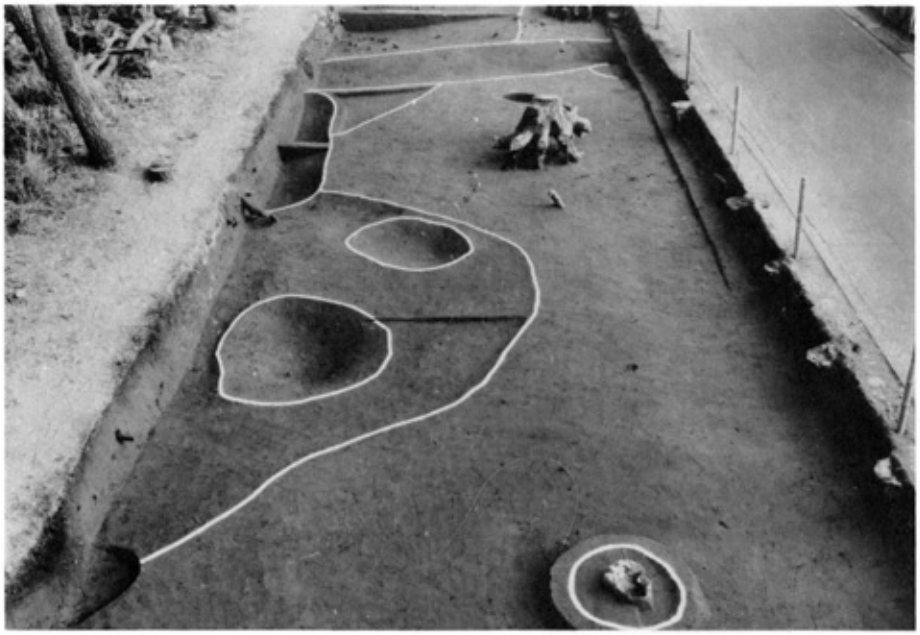
2　第7区
ＳＫ－100付近
（南東から）



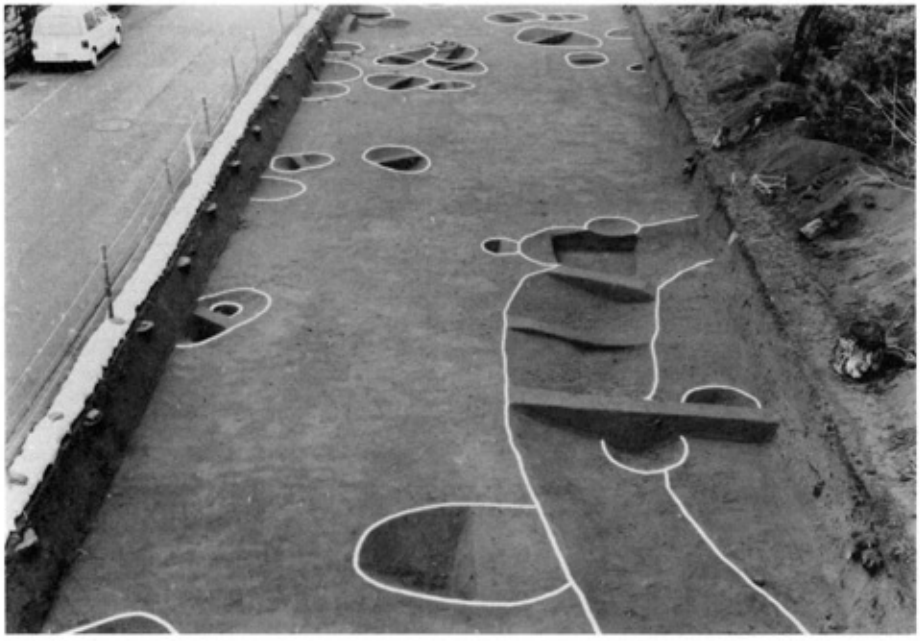
3　第7区
ＳＫ－109付近
（南東から）



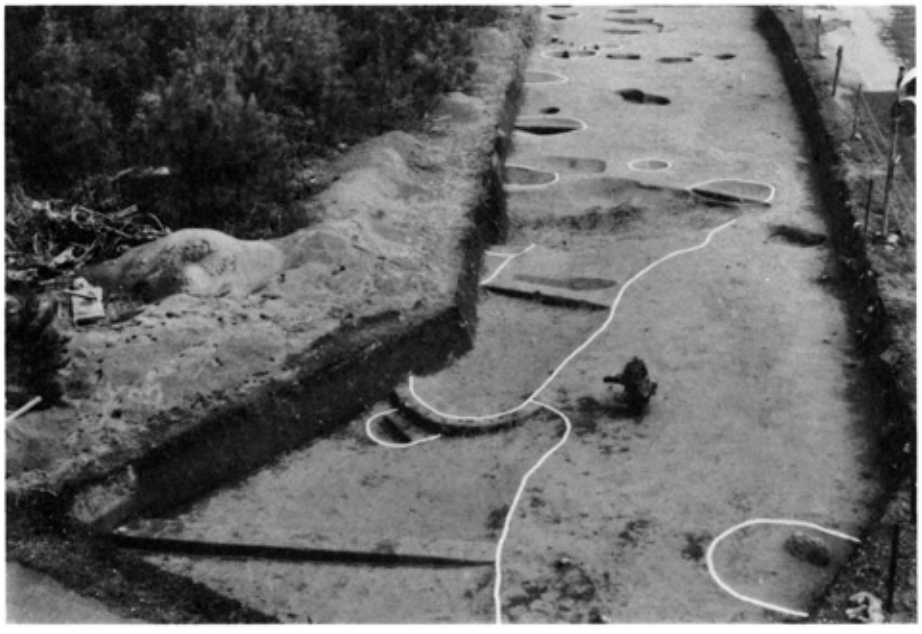
1　第7区
ＳＺ―020付近
（北西から）

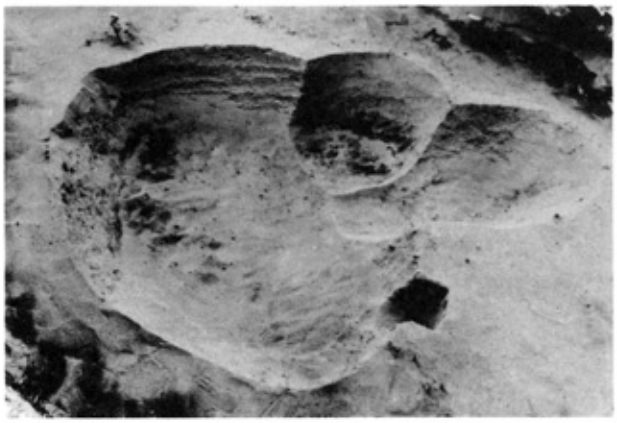


2　第7区
ＳＸ―004付近
（南東から）



3　第7区
ＳＤ―020付近
（北西から）

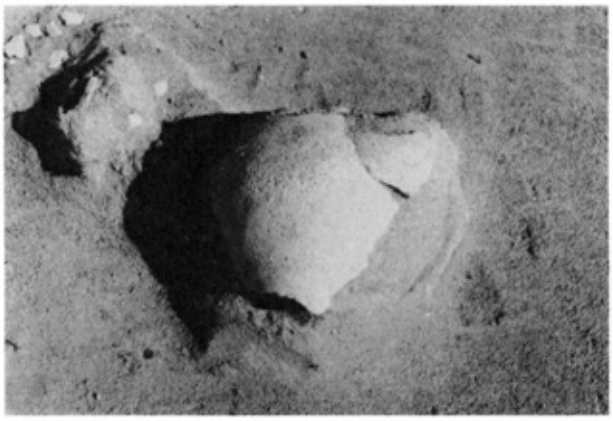




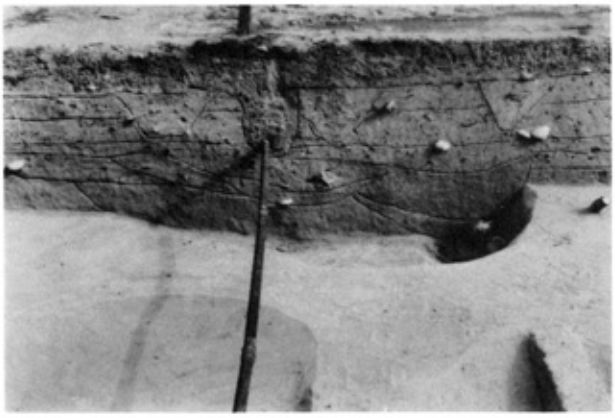
1　ＳＫ―003・第１区（南から）

2　ＳＫ―004・第１区（南から）

3　ＳＫ―006・第３区（南から）



4　ＳＫ―006遺物出土状況・第３区（南から）

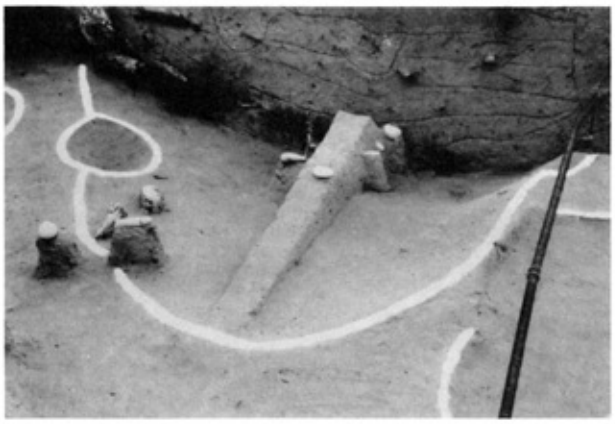


5　ＳＫ―012と他遺構の重複関係・第３区（南西から）

6　ＳＫ―012遺物出土状況・第３区（西から）

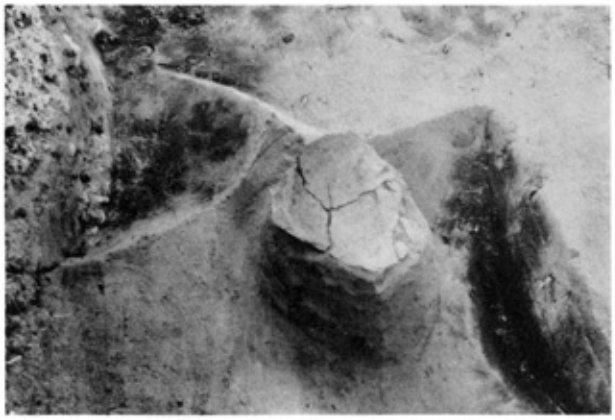
7　ＳＫ―018遺物出土状況・第３区（南から）

8　ＳＤ―001・第３区（北西から）

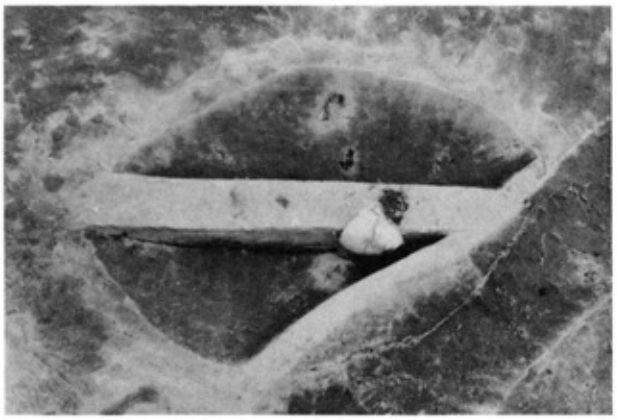


1　ＳＤ―002・第３区（北東から）

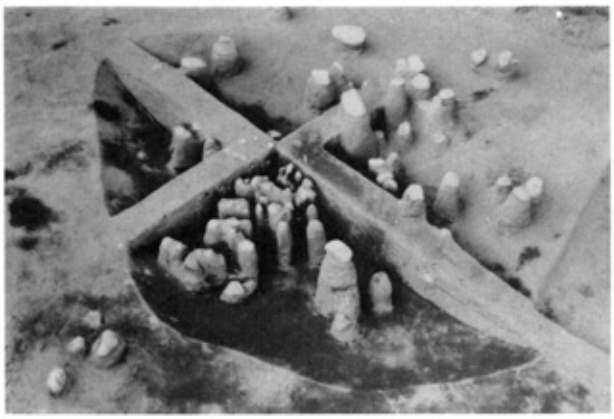
2　ＳＤ―003・第３区（北から）



3　ＳＫ―024遺物出土状況・第４区（北から）



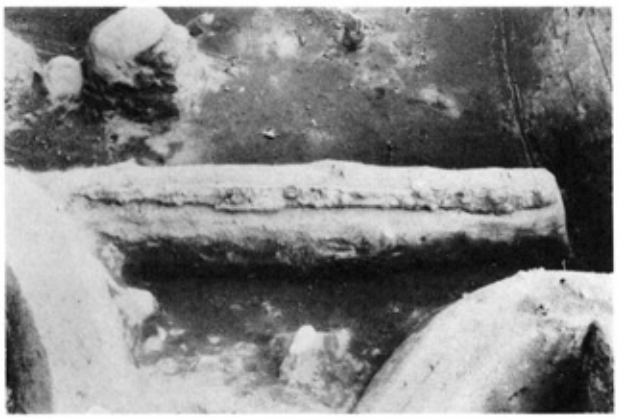
4　ＳＫ―028遺物出土状況・第４区（南西から）



5　ＳＫ―032遺物出土状況・第４区（南から）

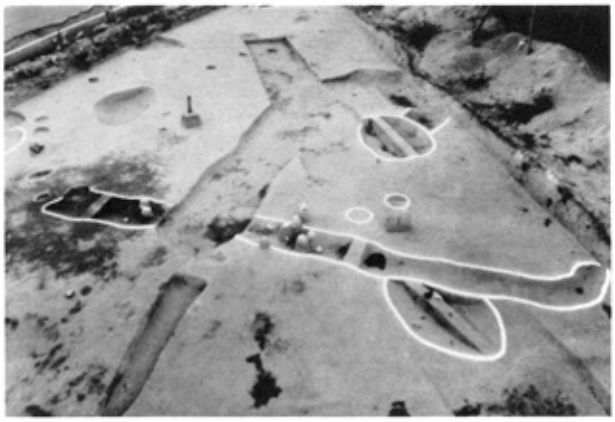
6　ＳＫ―032遺物出土状況近景（南から）

7　ＳＫ―038遺物出土状況・第４区（南東から）

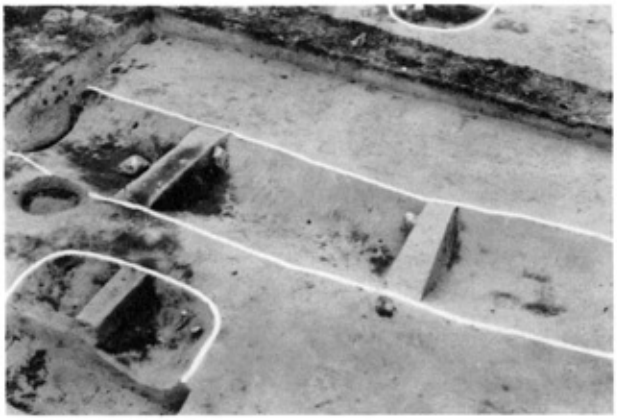


8　ＳＫ―038遺物出土状況近景（北から）

1　ＳＫ―042他土墳群・第４区（北西から）

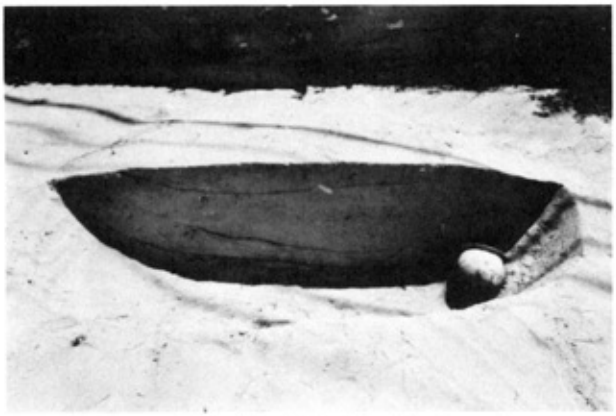


2　ＳＤ―005・第４区（北西から）



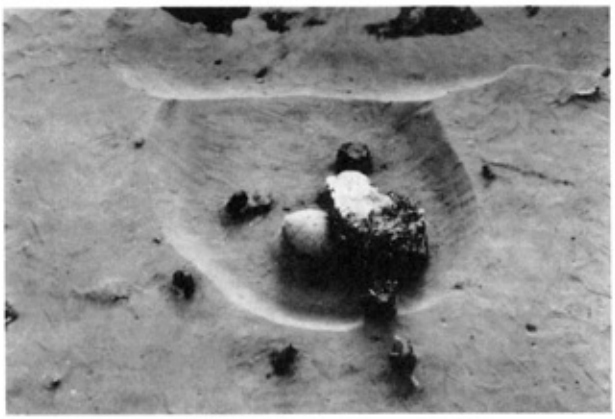
3　ＳＤ―006・第４区（北西から）

4　ＳＫ―055遺物出土状況・第５区（南東から）



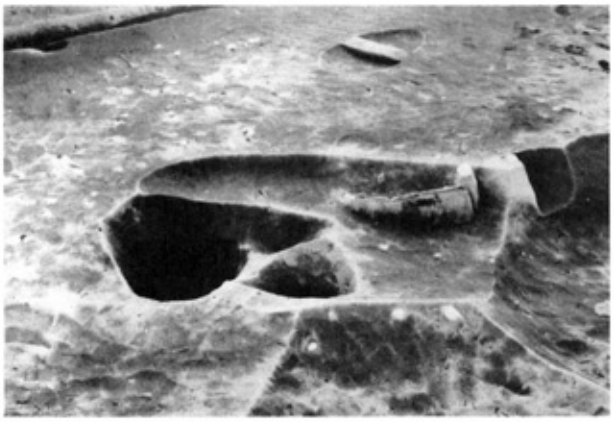
5　ＳＫ―055遺物出土状況近景（北東から）

6　ＳＫ―056礫出土状況・第６区（北から）



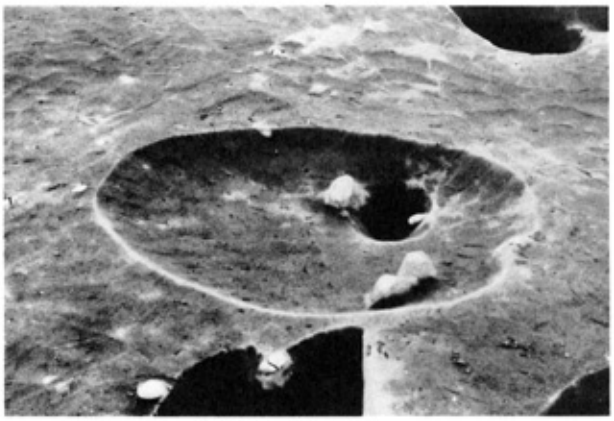
7　ＳＫ―057遺物出土状況・第６区（北東から）

8　ＳＫ―057遺物出土状況近景（北東から）



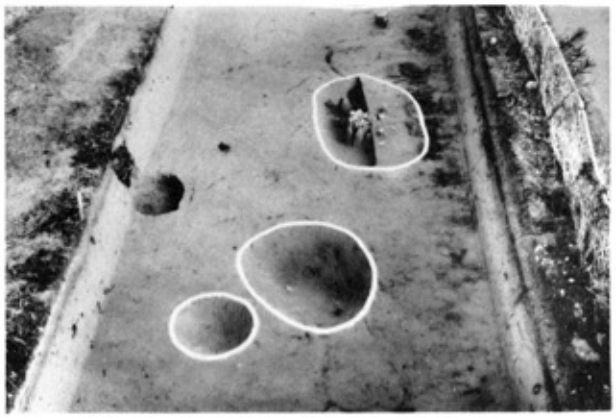
1　ＳＫ―066遺物出土状況・第６区（東から）

2　ＳＫ―066遺物出土状況近景（西から）

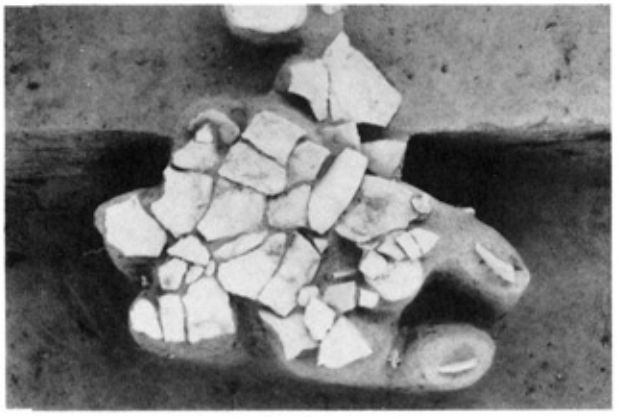


3　ＳＫ―064・第６区（東から）

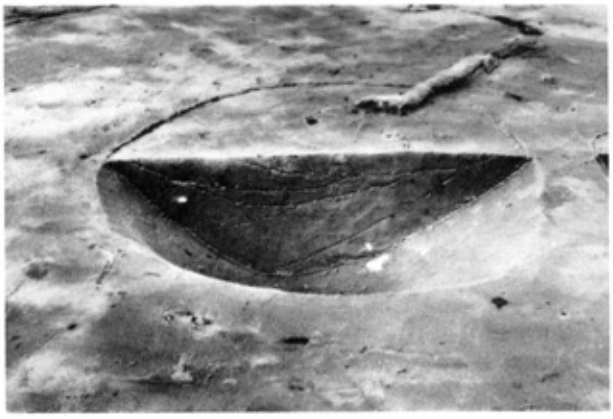
4　ＳＫ―069遺物出土状況・第７区（東から）



5　ＳＫ―081他土壙群・第７区（北西から）



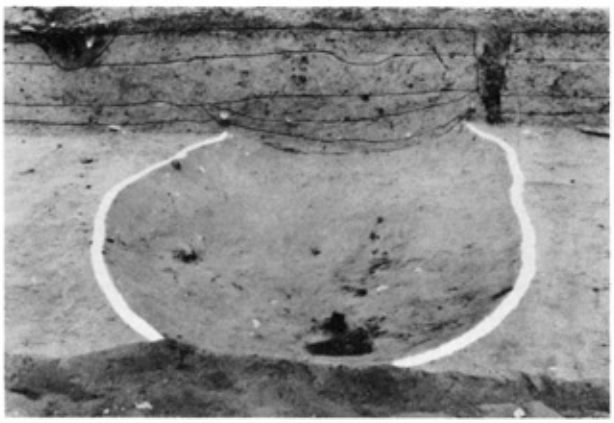
6　ＳＫ―081遺物出土状況・第７区



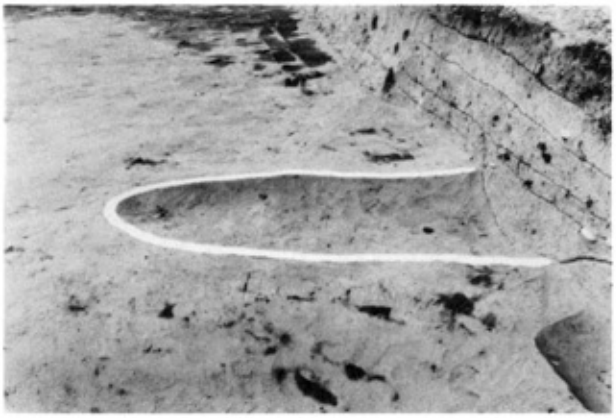
7　ＳＫ―082土層・第７区（東から）

8　ＳＫ―091他土壙群・第７区（北面から）

1　ＳＫ―091土層・第７区（西から）

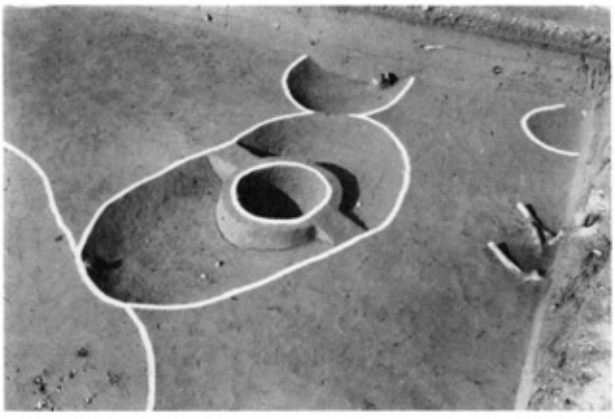


2　ＳＫ―098土層・第７区（南西から）

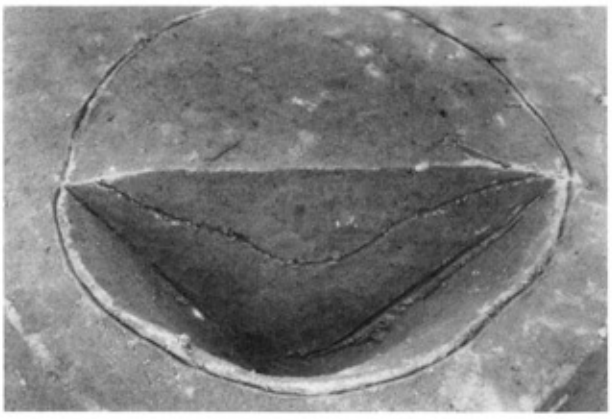


3　ＳＫ―104・第７区（南東から）

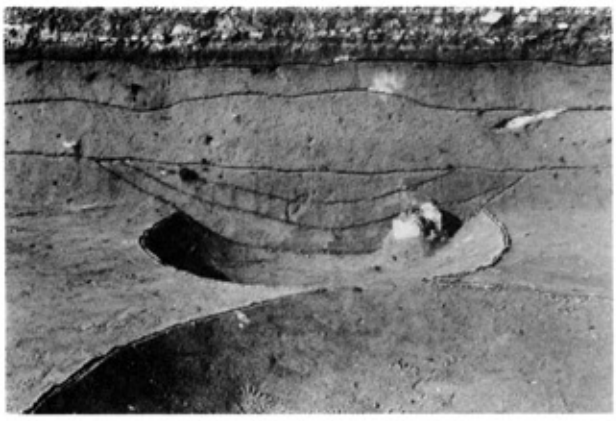
4　ＳＫ―104土層（南西から）



5　ＳＫ―108・109・第７区（南から）

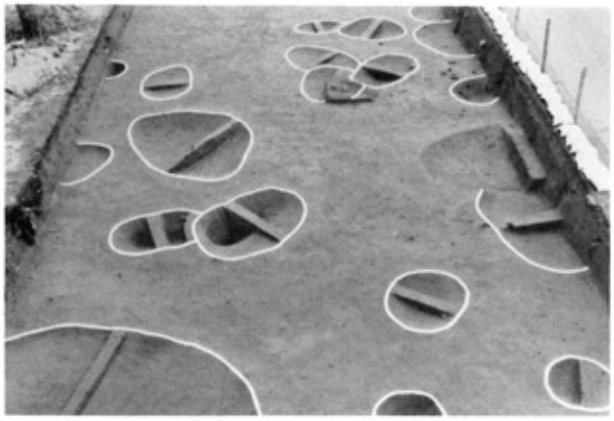


6　ＳＫ―109土層（南西から）

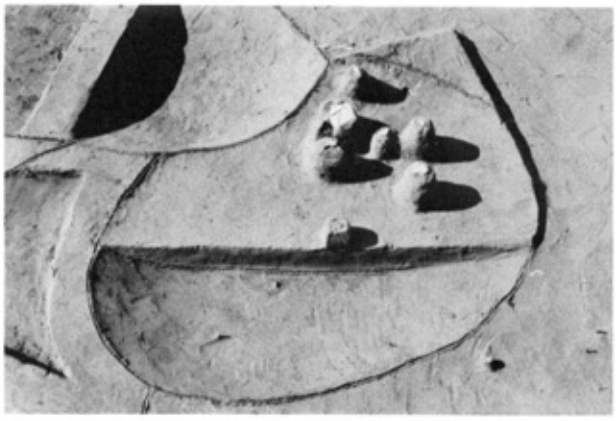


7　ＳＫ―107遺物出土状況・第７区（南西から）

8　ＳＫ―107遺物出土状況近景（南から）

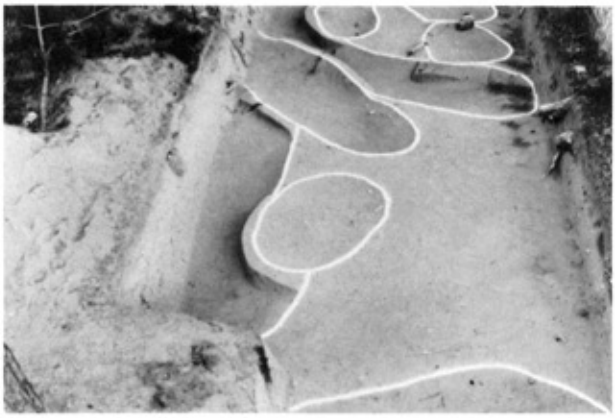


1　ＳＫ―137他土壙群・第７区（北西から）



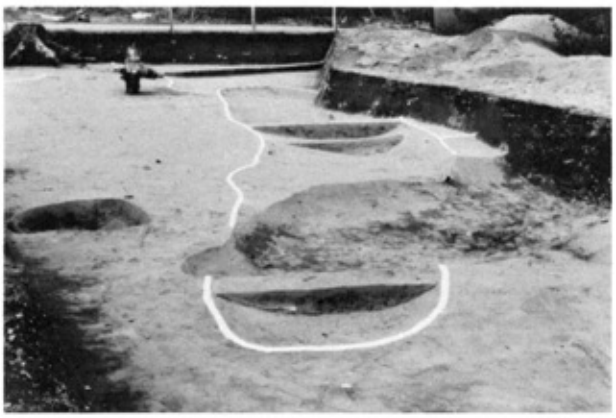
2　ＳＫ―133遺物出土状況・第７区（北東から）

3　ＳＫ―147他土壙群・第７区（南東から）

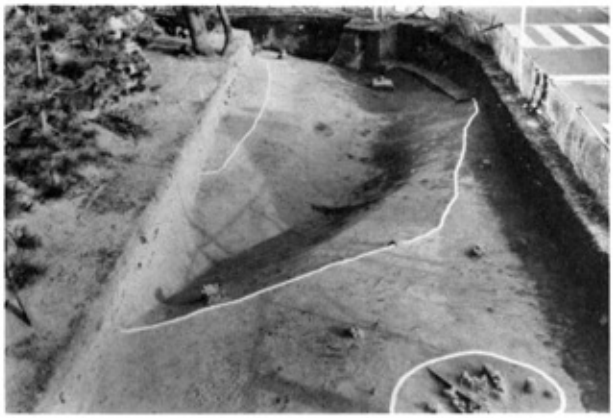


4　ＳＤ―009・010・第７区（北西から）

5　ＳＤ―017・第７区（北から）



6　ＳＤ―020・第７区（南東から）



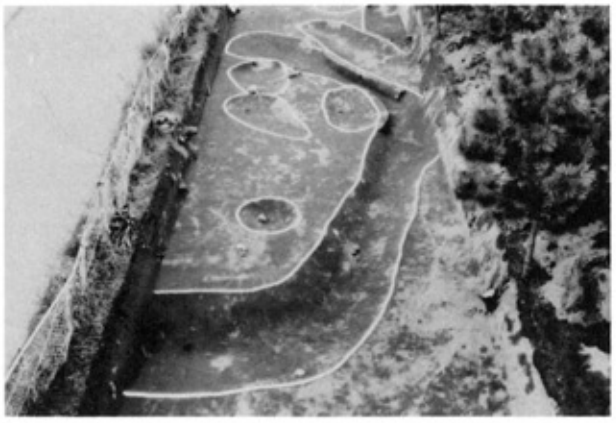
7　ＳＸ―001・第７区（北西から）

8　ＳＸ―001土層（南西から）

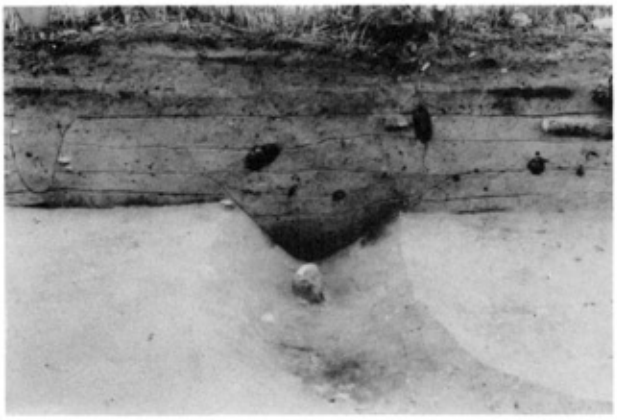
1　ＳＸ―001・第７区（東から）

2　ＳＸ―001周溝部（ＳＤ―007）土層（南から）

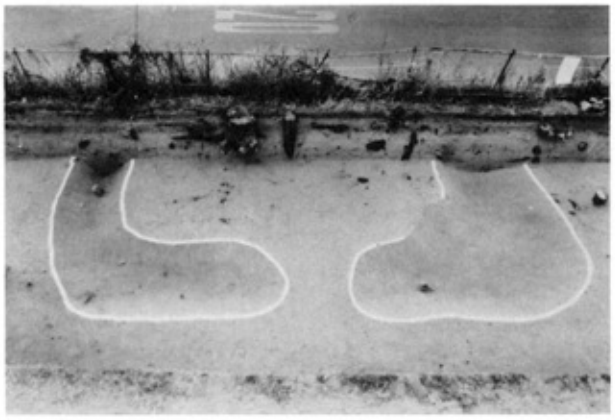
3　ＳＸ―001周溝部南東隅遺物出土状況



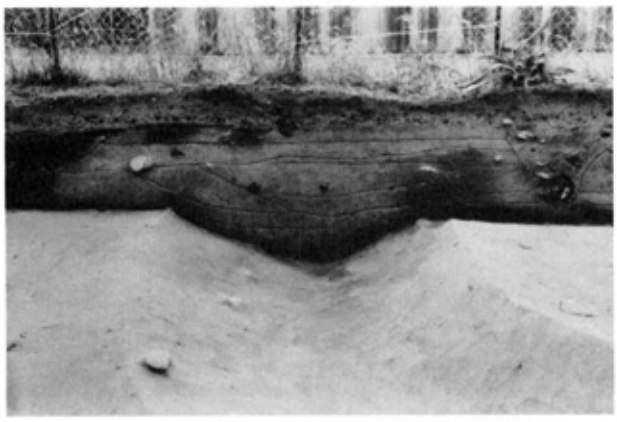
4　ＳＸ―002・第７区（南東から）



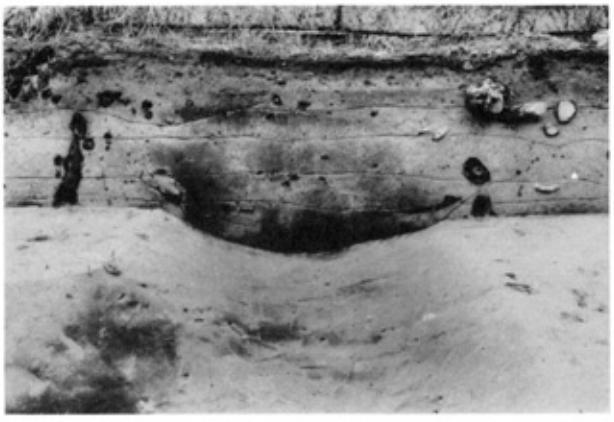
5　ＳＸ―002周溝部（ＳＤ―008）土層（南東から）



6　ＳＸ―003・第７区（北東から）



7　ＳＸ―003周溝部（ＳＤ―012）土層（北東から）



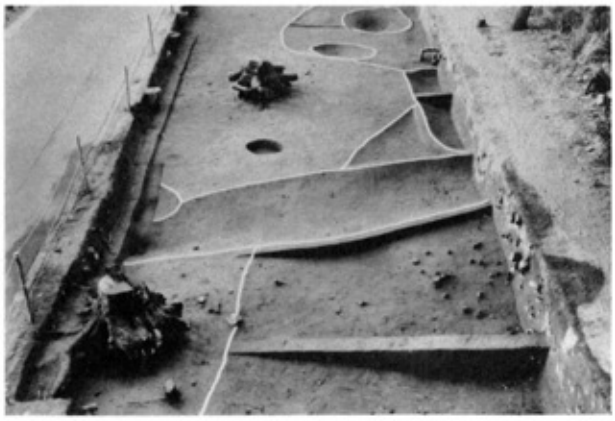
8　ＳＸ―003周溝部（ＳＤ―013）土層（北東から）

1　ＳＸ―003周溝部（ＳＤ―012）遺物出土状況

2　ＳＸ―004・第７区（北西から）

3　ＳＸ―004周溝部（ＳＤ―019）土層（北東から）

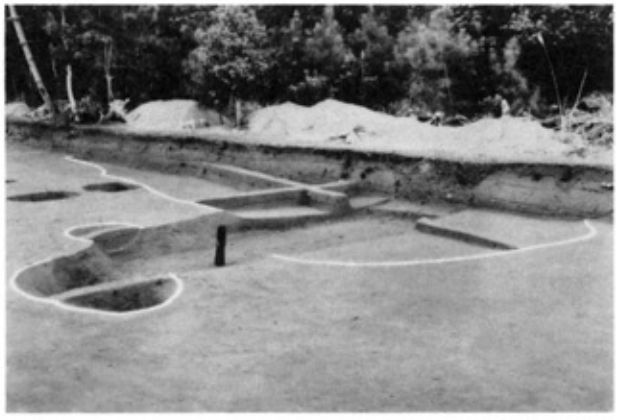
4　ＳＺ―012・第７区（北西から）



5　ＳＺ―017・第７区（南東から）

6　ＳＺ―021遺物出土状況・第７区

7　ＳＺ―021土層（南西から）



8　ＳＺ―024・第７区（南東から）

1

2

3

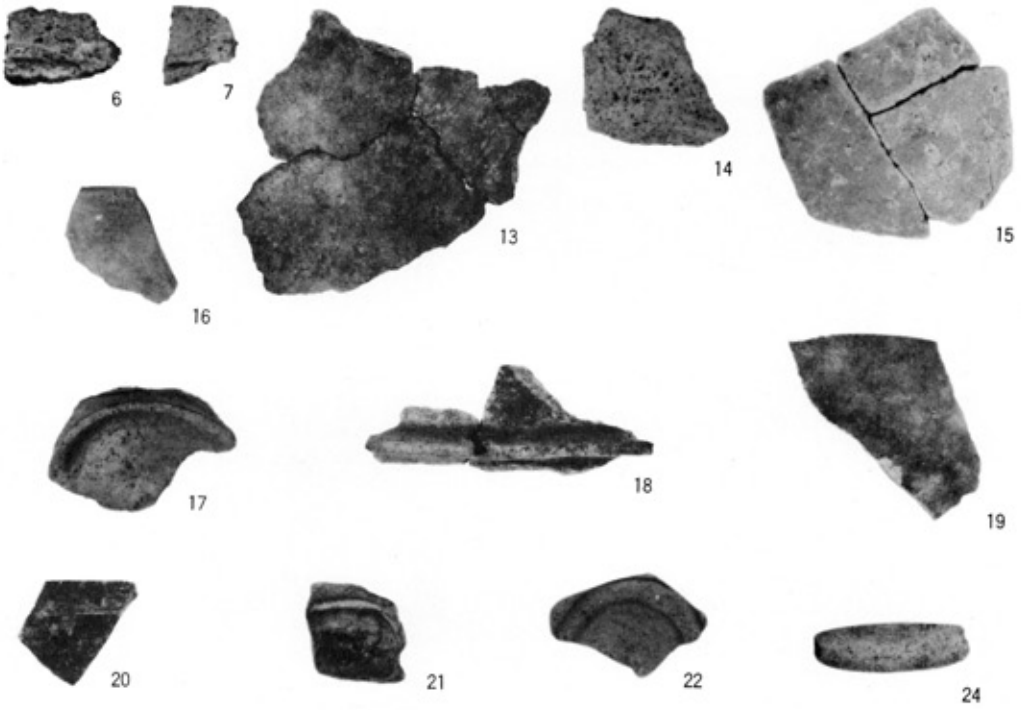
6

10

8

11

12



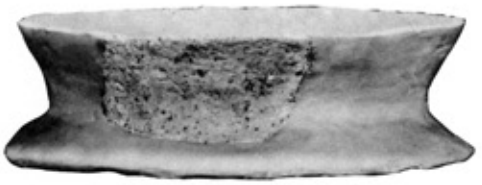
26

28

27

29

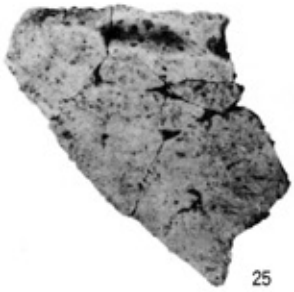
35



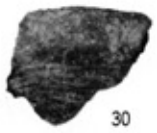
34

41

44

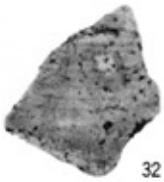


25

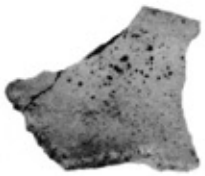


30

31



32



33

42

43

36

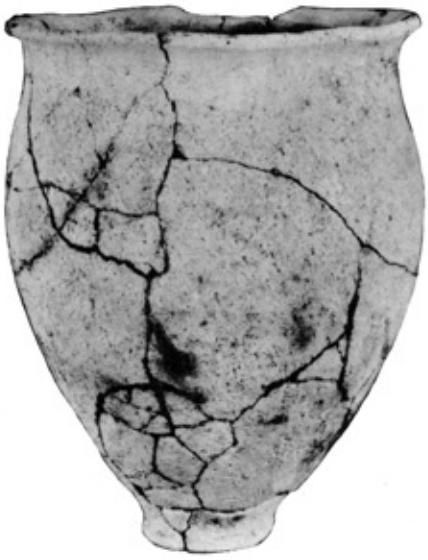
37

38

39

40

37

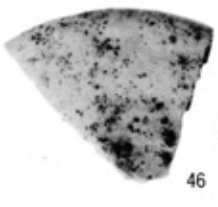


45

47

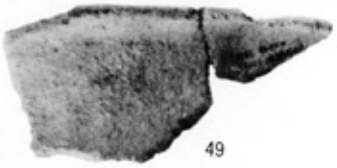
54

55

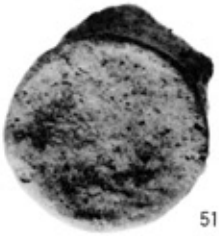


46

48



49



51

52

50

56

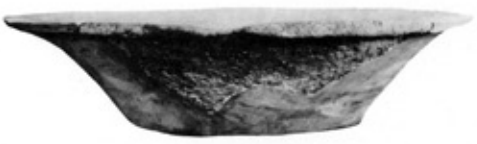
60

58

57

69

111

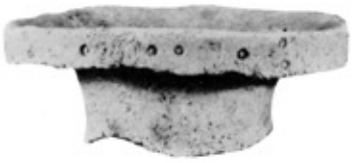


70

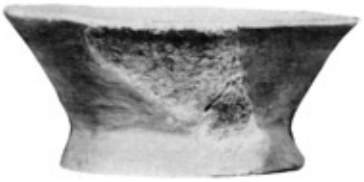
71

73

74



81



75

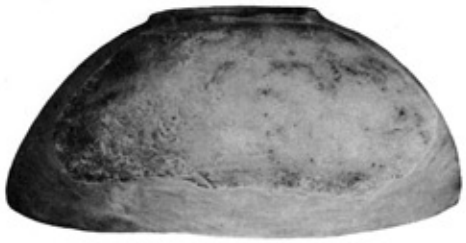
79

95

78

93

80



110

85

112

84

114

88

113

115

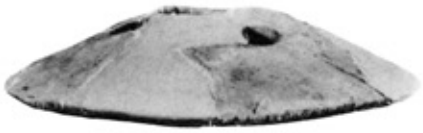
123

146

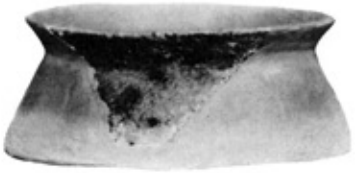
124

147

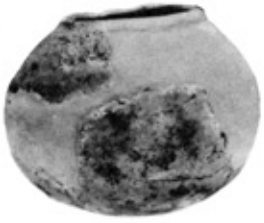
138



120



139



150

140

151

167

169

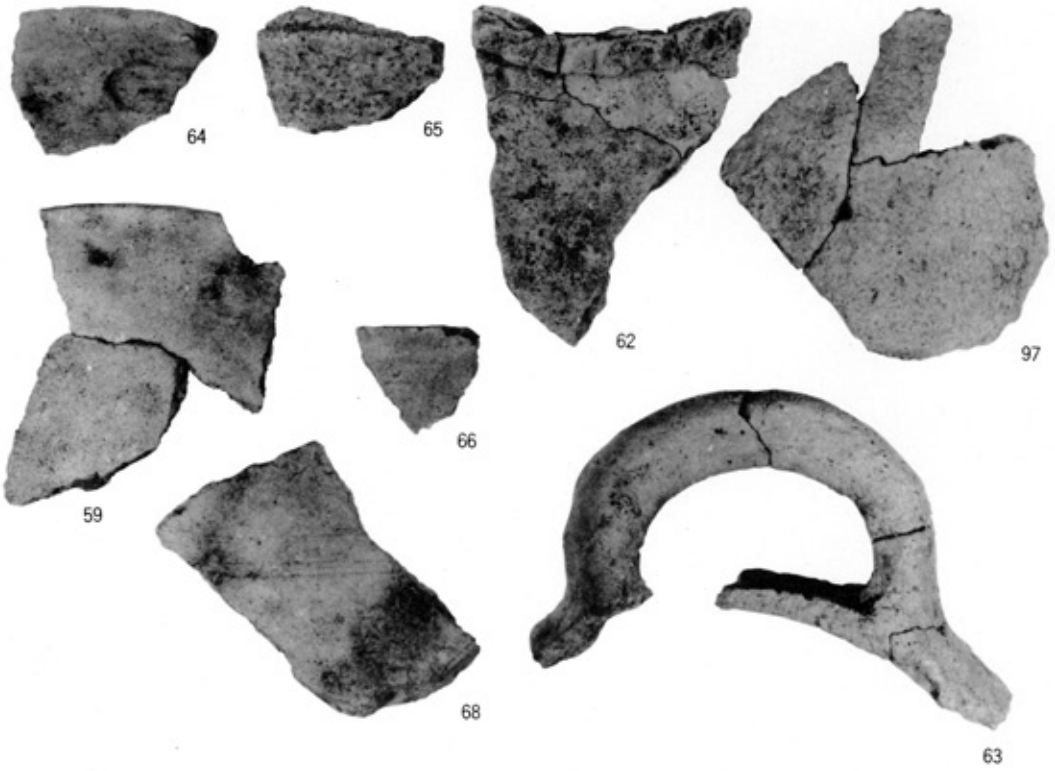
171

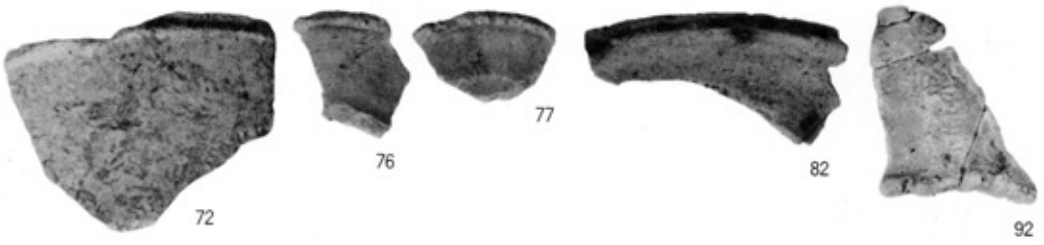
166

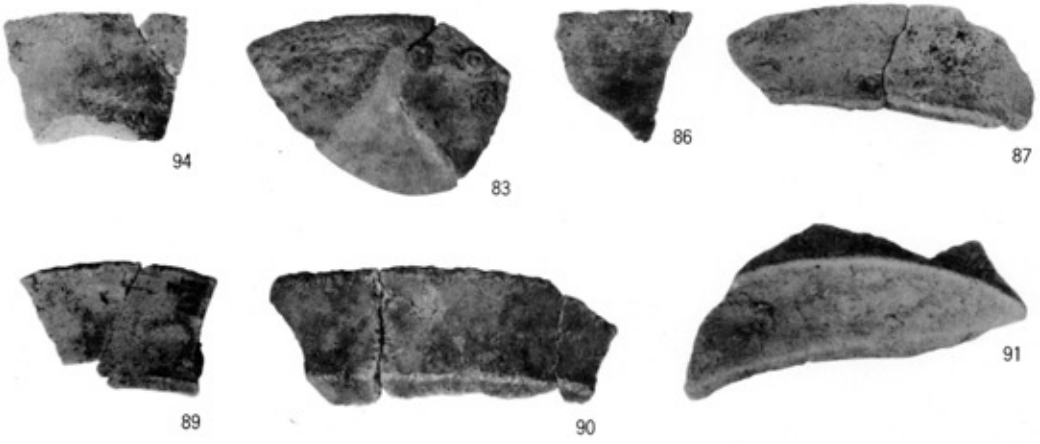
173

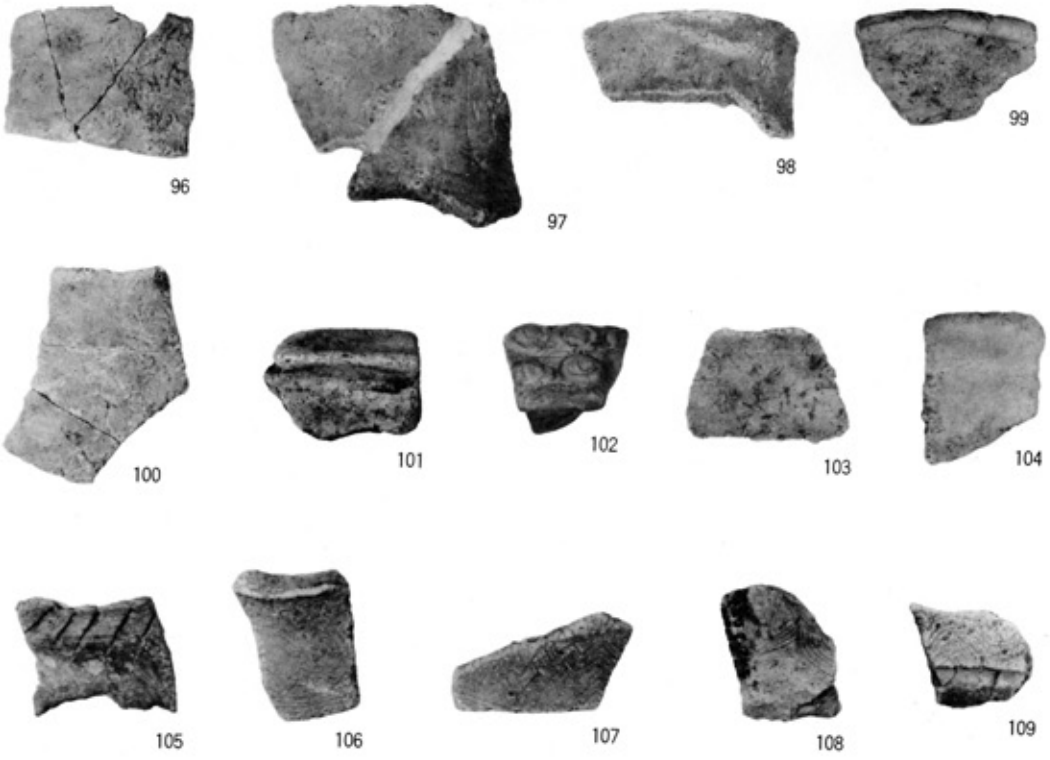
170

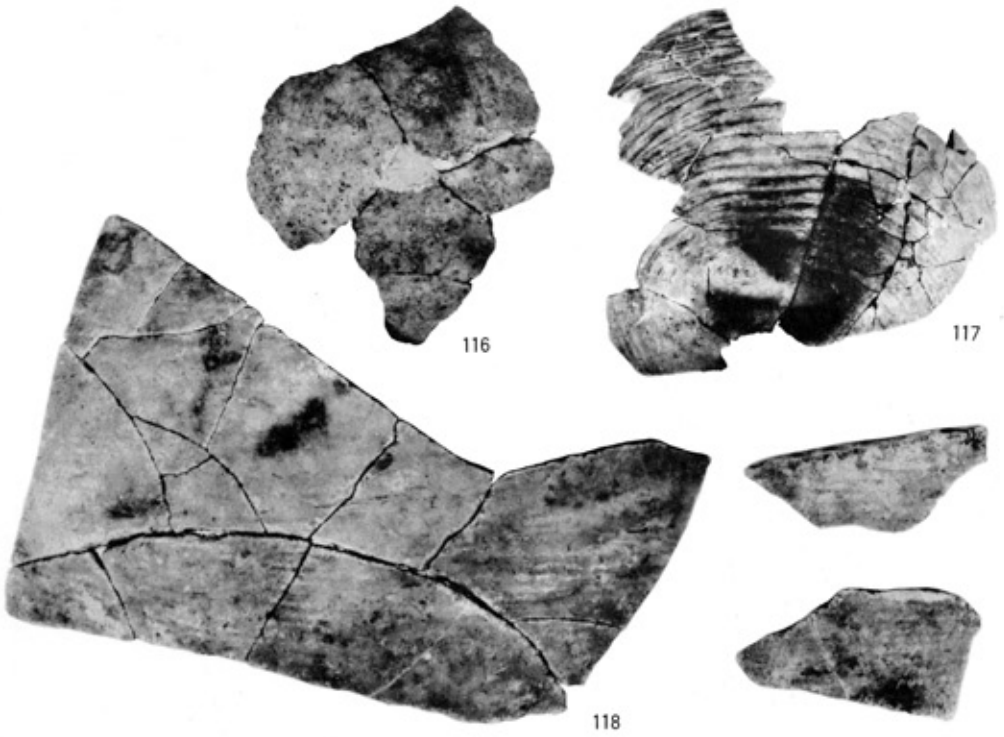
172

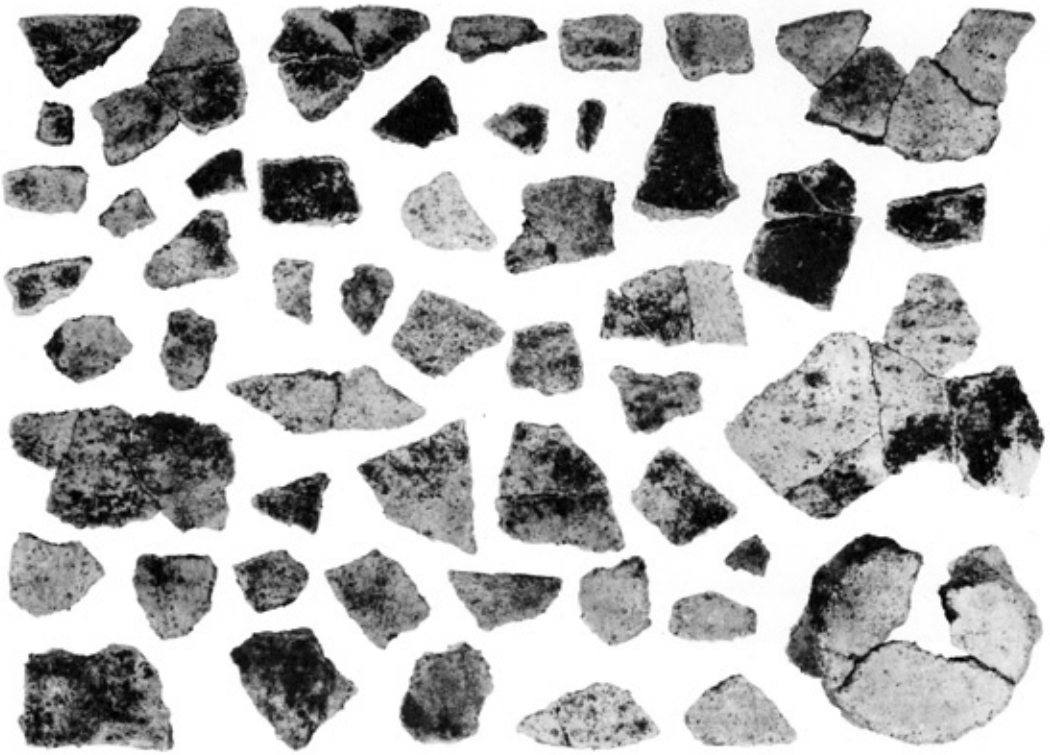

64
65
62
97
59
66
68
63


72
76
77
82
92

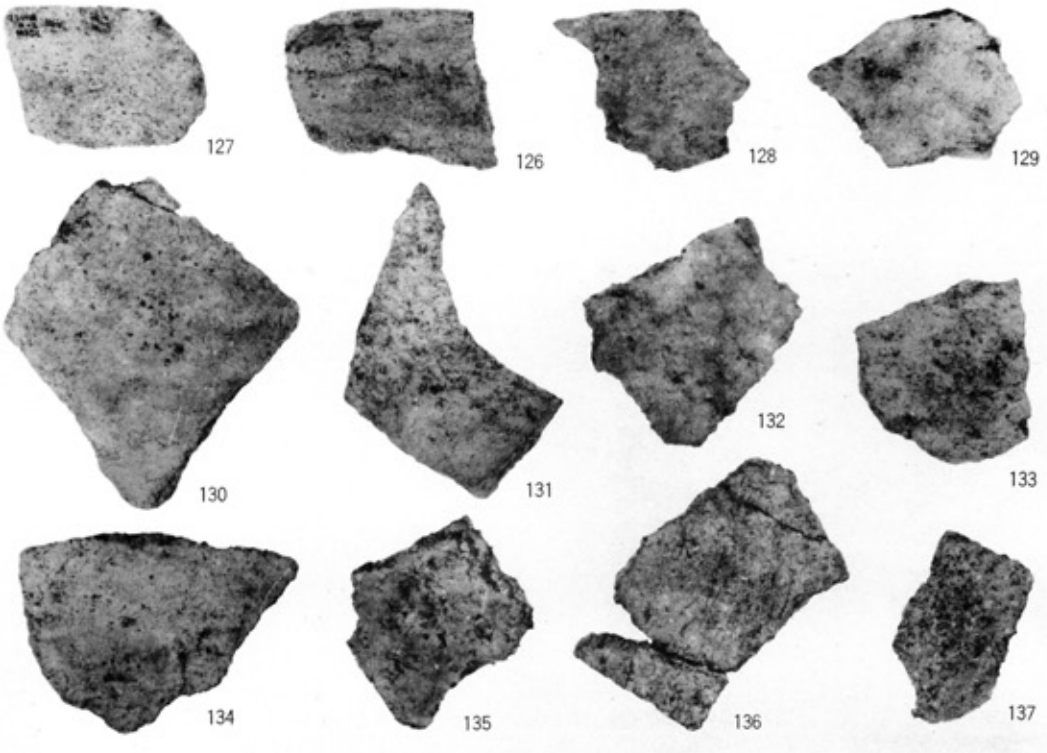

94
83
86
87
89
90
91

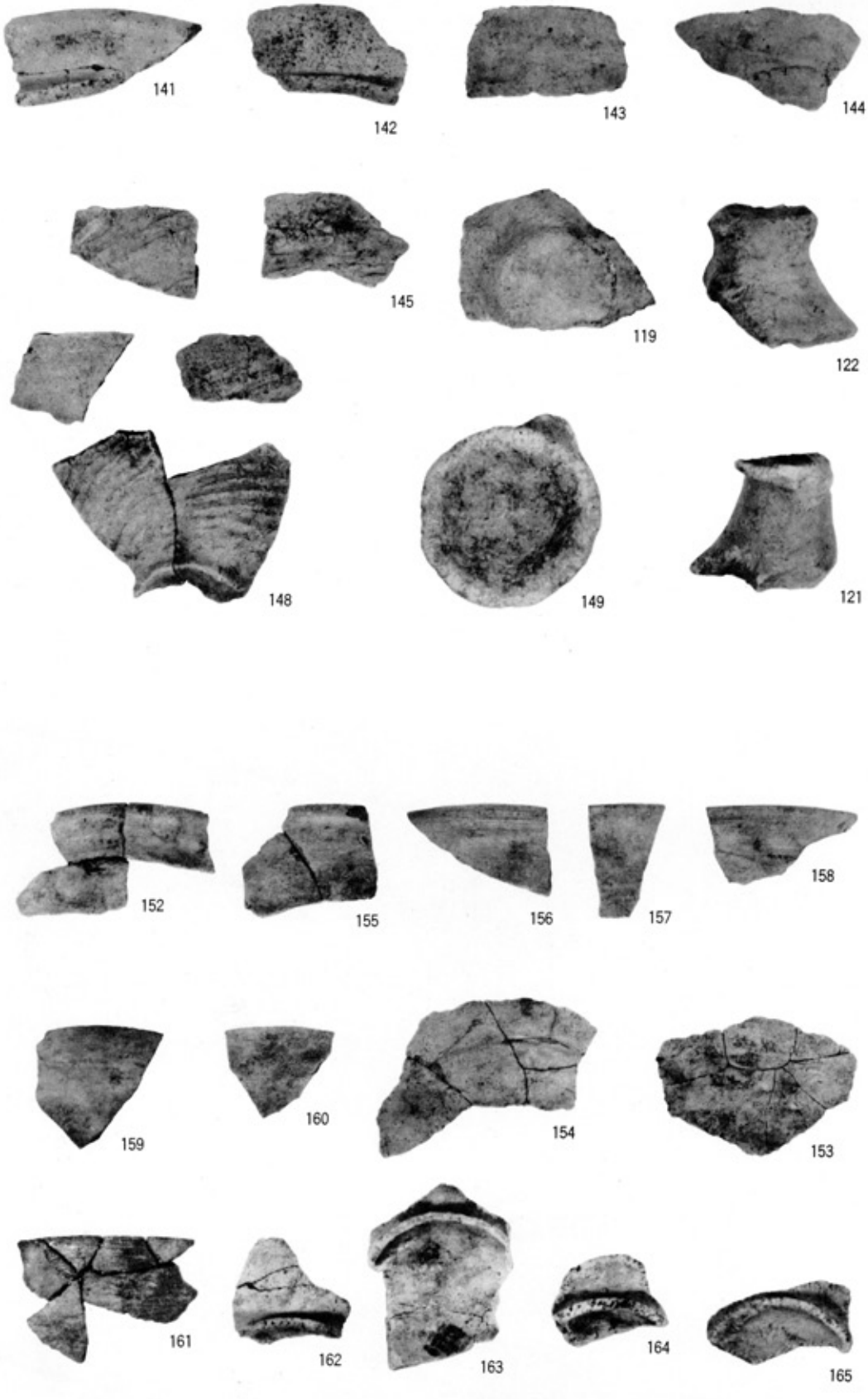

96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109


116
117
118



125




141
142
143
144
145
119
122
148
149
121
152
155
156
157
158
159
160
154
153
161
162
163
164
165

吉　原　遺　跡
—県道柏・御坊線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—
1990年3月発行

編集
発行　財団法人和歌山県文化財センター

印刷　有限会社　真　陽　社